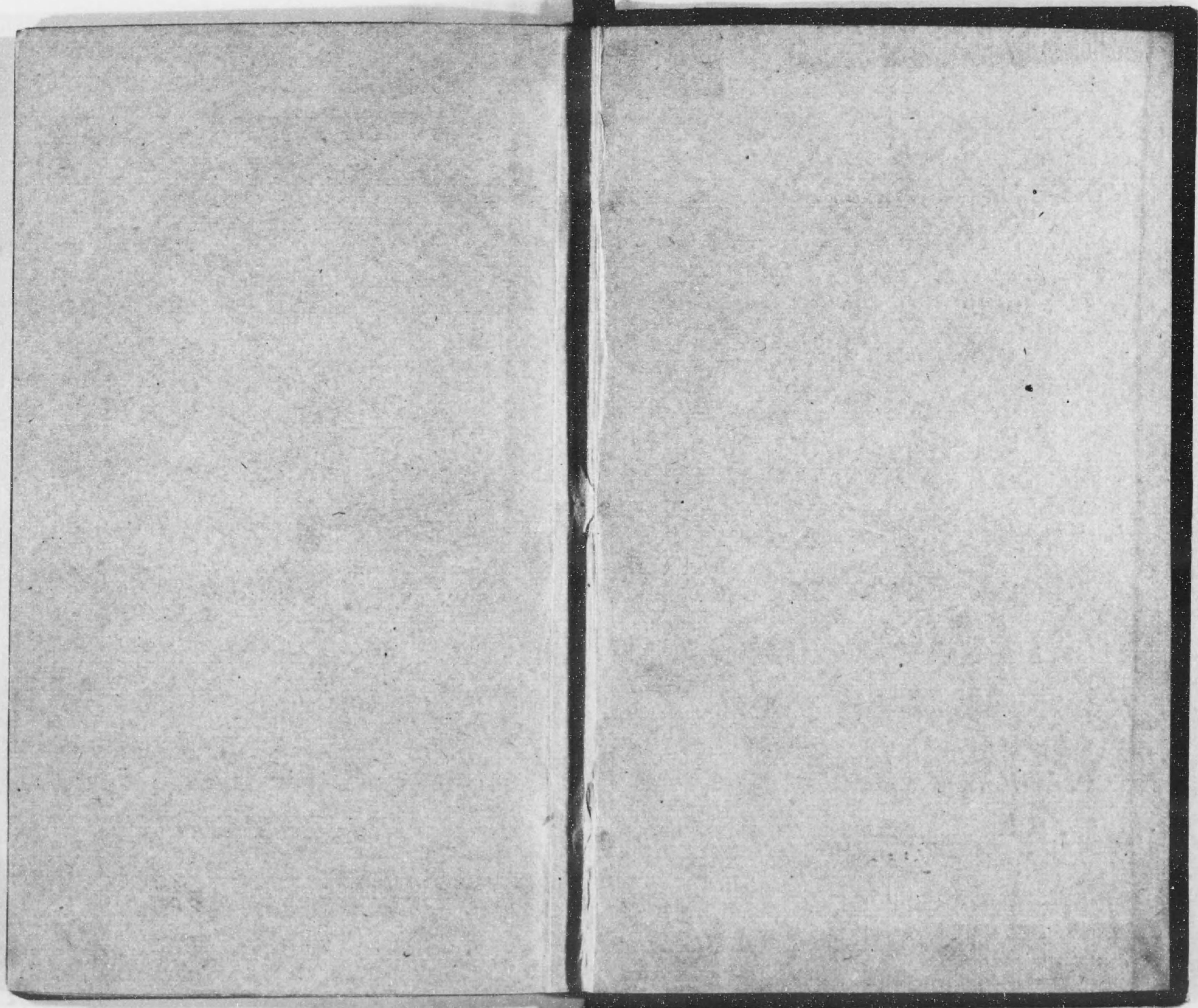


500
20



始





500-20

集全フェニーゲルツ

— 卷 四 第 一 —

處

女

地

大正
12.3.16
版 圖 社 夏 冬



小説

處

女

地

ツルダニーエフ作
秋庭俊彦譯

冬夏社藏版

千八百六十八年の春、或る日の午後一時頃、無頓着な見すばらしい服装をした、年頃二十七位の男が、ペテルブルグの役人町の或る五階建の家の裏側の階級を昇つて行つた。踵の磨り減つた靴をどしん／＼踏み鳴らして、足を運ぶたんびに大きな不格好な身体をぐたり／＼させながら、漸く階段を昇りきつた。彼は蝶番がはづれて半分開いた儘になつてゐる扉の前に立停つて、呼鈴は鳴らさず、たゞ大きな咳拂ひを一つして、狭い薄暗い控室へすん／＼入つて行つた。

「ネヴダーノフは居るか」と彼は深い低音で訊いた。

「居ません——私です、お入りなさい。」と次の室から何となく荒々しい他の女の聲が答へた。

「マシユリーナですか？」と新來の客は訊いた。

「え、私。そしてあなたは——オストロデューモフ？」

「ピーメン・オストロデューモフ。」と彼は答へて、先づ注意深く護謨の套靴を脱ぎ、それから指切り切れて糸の見える小さい古外套を釘にかけて、女の聲のした部屋へ入つて行つた。

それは天井の低い、汚らしい部屋で、壁が陰氣な綠色に塗つてあつて、塵埃だらけになつた一つの

窓から光線が薄暗くさし込んでゐた。そこにある家具と云へば、片隅に小さな鐵の寢臺が一つ、真中に卓が一つと椅子が二つ三つ、それに書物を詰めこんだ書棚が一つ置いてあるだけであつた。卓の傍には黒い毛織の寛衣を着て、帽子を被らずにゐる、年頃三十格好の女が坐つて、巻煙草を吹かしてゐた。オストロデューモフが入つて來たのを見ると、彼女は物も云はずに大きな赤い手を差し出した。彼も何とも云はずに握手した。そして椅子へ腰を下すと、横の衣兜から半分吸ひかけの葉巻を取り出した。マシユリーナが火を遣ると、彼は葉巻を吹かし始めたが、二人とも一言物も云はず、目を見合はしもしないで、既に煙草の匂でむん／＼としてゐる、息苦しいやうな空氣の中へ、青い煙の輪を吹き出した。

この二人は、容子には少しも似通つたところはなかつたが、何處となく共通な點があつた。構はない服装や、粗野な唇や、齒や、鼻や（オストロデューモフはその上又痘瘡が目立つてゐた）それ等の様子に、正直と克己心と勤勉の風が現はれてゐた。

「あなたはネヴダーノフに會ひましたか？」とオストロデューモフが到頭訊いた。

「會ひました。あの人は直きに歸つて來るでせう。圖書館へ本を持って行つたんです。」

オストロデューモフは側を向いて睡をした。

「どうして此頃は始終うろつき廻つてゐるんでせう？　ちつとも會へやしない。」
マシユリーナは又もや巻煙草を取り出した。

「退屈してゐるんですわ。」と彼女は注意深く火をつけながら云つた。

「退屈してゐるんですつてー」とオストロデューモフは非難するやうに繰返した。「何て馬鹿なこつです！　我々の間にはあの男のする仕事がないと思つてゐるんですかね。とに角我々は、うまく仕事
が成功するやうにと願つてゐるのに、あの男は退屈してゐるなんてー！」

「モスクワから何か通信がありました？」とマシユリーナは一寸の間黙つてゐた後で訊いた。

「えゝ……一昨日。」

「あなたはお読みになりましたの？」

オストロデューモフはたゞ頷ぎただけであつた。

「それで……どんな事が書いてありましたの？」

「おゝ——誰れか直ぐに彼處へ行かなければならぬでせう。」

マシユリーナは彼女の口から巻煙草を離した。

「何故です？　彼處では何もかもうまく行つてると云ふ話でしたのに。」

「さう、何もかもうまく行つてます。唯或る一人の男の、信頼出来ないことが分つたんです。そこで……我々はその男を他所へ追ひやるか、で無ければ全然除け者にするかしなければならぬんです。おゝ、そしてまだ他にも色々な事があるんです。みんなはあなたにも頼んでゐます。」

「えゝ。」

マシユリーナは彼女の厚い頭髮を後方へ振りのけた。それはぐる／＼捲きにして後方のところへ無
雑些に小さく結んであつたので、額や眉毛へおつ被さつて來るのであつた。

「あゝちやあ。」と彼女はきつぱりと云つた。「命令が來たのなら、もう何も云ふことはありませんわ。」

「勿論、何にも云ふことはありません。たゞそれを實行するには金がなければ遣れないんですが、ど
うして金を拵へたものでせう？」

マシユリーナは考へに沈んだ。ネヴダーノフが其れを作らなければならぬでせう。」と彼女は獨言
でも云ふやうに小聲で云つた。

「僕が來たのはその問題のためなんです。」とオストロデューモフは説明した。

「あなたはその手紙を持つていらしつて？」とマシユリーナは不意に訊ねた。

「え、持つて来ました。あなたは讀みたんですか？」

「え、私に下さい……いえ、宜うございますわ。後で……私達は一緒に讀みませう。」

「僕は本統の事を云つてゐるんです。」とオストロデューモフは呟いた。「僕を疑ふ必要はありませんよ。」

「え、私疑やしません。」

二人は再び沈黙に入つた。そして前と同じやうに、たゞ煙の輪だけが黙り込んだ唇から、さ迷ひ出て、二人のもぢや／＼頭の上へ昇りながら軽く渦巻いてゐた。

套靴の音が控室から聞えて来た。

「あの人ですわー」とマシユリーナは呟いた。

扉が細目に開いて、その隙間から一つの頭が覗いた——が、ネヅダーノフの頭ではなかつた。

それは剛い黒い、頭髮と廣い皺だらけの額と、もぢや／＼した眉毛の下で絶えず動いてゐる鋭い小さな鶯色の眼と、家鴨の嘴のやうに尖つた鼻と、蔷薇色をした、道化たやうな小さな口とを持つた小さい頭であつた。この頭はぐるつと其處を見廻はして、頸づいて——小さな白い嚙の列を見せながら微笑みを浮べて、そして蹠跟とした小さな身軀と、短い腕と、少し腕曲した跛行の脚とを伴つて部屋

へ入つて来た。マシユリーナとオストロデューモフとはこの頭を見ると直ぐ、二人の顔にはどつちも心中に「何だこいつか！」と云つてゐるやうな輕蔑したやうな表情が浮んだ。そして二人は一言物も云はず、身軀を動かもしもしなかつた。が、こんな接待をうけても、この訪問客は少しも狼狽しなかつたばかりか、却つて其れを喜んだやうな風であつた。

「こりや如何したことだ？」と彼はきい／＼云ふ聲で云つた。「二部合奏ですね？」何故三部合奏ではないんです？ 第一の次中音は何處にゐるんです？」

「ネヅダーノフの事を訊いてるんですか、パークリン君。」とオストロデューモフは眞面目な顔付で答へた。

「仰せの通りです。ナストロデューモフさん。あの男の事を云つてゐるんですよ。」

「あの男なら多分もう直き歸つて来るでせうよ、パークリン君。」

「それは大いに嬉しい、オストロデューモフさん。」

跛行の小男はマシユリーナの方へ身軀を向けた。彼女は顔をしかめながら坐つてゐた、そしてちつと思ひ耽りながら巻煙草を吹かしてゐた。

御機嫌いかゞです、親愛なる、親愛なる……え、どうも困つたな！私はいつともあなたの名前とあ

なたのお父さんの名前を忘れてしまふので。」

マシエリーナは彼女の肩をしやくり上げた。

「何も名前をお覚えになる必要はありませんわ。あなたは私の苗字を知つてらつしやいますわ。それで澤山ぢやありませんか？　そして何てことをお訊きになるんです、御機嫌いかゞですなんて！　あなたには私がこの通り強壯で生きてゐるのがお分りになりませんか？」

「分ります、よく分りますよ！」とパークリンは鼻の穴を擽げて、眉毛を寄せながら叫んだ。「あなたが生きていらつしやらなけりや、あなたの卑むべきこの下僕は、かうしてあなたにお目にかゝつて、あなたにお話しする喜びを持つことが出来ない譯ですからな！　私が御機嫌を伺つたのは、昔からの悪い習慣だと思つて笑つて下さい。ですが、あなたの名前とお父さんの名前のことはね、……どうも唯マシエリーナとだけ呼ぶのは具合が悪くつて變ですからなあ！　そりや實際あなたがあなたの手紙にボナバルトさへ署名なさることは知つてゐます——マシエリーナと書くのも同じことですからな！　けれども、やつぱり話の時には……。」

「でも、私と話をするやうにつて誰れがあなたに頼みましたの？」

パークリンはさながら息が詰つたやうに神経的に笑つた。

「いや、もう澤山ですよ——さあ、握手しませう。さう意地悪くするものぢやありません。私はあなたがこの上ない善良な心を持つてらつしやることはよく知つてゐます。そして私だつて矢張り善良な心を持つてゐるんですからね……え？」

パークリンは手を差し出した……マシエリーナは不快さうに彼を眺めやつた。が、彼女も彼に手を差し出した。

「あなたが如何しても私の名前を知らうとお思ひになりますなら、」と彼女はやつぱり陰鬱な顔付で云つた。「私の名はフョークラですわ。」

「そして僕の名はピーメン。」とオストロデニューモフが低音の聲でつけ加へた。

「あゝ、それは非常に……非常に立派な名前ですね！　所でそれはまあ其れとして、ねえ、フョークラ、それからあなた、ピーメン君、如何してあなた方は私に對してこんな友情のない、こんな偏屈な友情のない態度をなさるんです？　私の方では……。」

「マシエリーナは斯う思つてゐるんです。」とオストロデニューモフは遮つて云つた。「いや、さう思つてゐるのはマシエリーナだけぢやありませんが、あなたは何ものをも滑稽な點から眺めるので、あなたに對しては信頼が出来ないと思つてゐるんです。」

ピークリンは鋭く踵を廻はして側の方を向いた。

「あの人は——いや、一躰みんなは、私に對して何時も間違つた批評を下してゐるのです、尊敬すべきピーメン閣下！ 第一、私は始終笑つてはゐませんよ。ですから、この事のために私を信用出来ないとお思ひになる譯は少しもありません。こんな事は、私が始終あなた方の仲間に信用を得て、ちやほやされてると云ふ事實で、よく分つてゐる筈です！ 私は正直な人間です、尊敬すべきピーメン閣下！」

オストロデューモフは齒の間で何やらぶつくさ云つた。その間にピークリンは口を振りながら、今度は微笑みさへ浮べずに繰返した。「どうしまして！ 私は始終笑つてなんかゐるもんですか！ 私はたゞ氣輕な人間だと云ふだけです！ 私をちよつと御覽になれば分るでせう。」

オストロデューモフは彼をちよつと眺めた。事實、ピークリンが笑はないである時には、ちよつと黙り込んでゐる時には、彼の顔には殆んど憂鬱と云つていゝやうな、恐怖と云つていゝやうな表情が浮んでゐた。が、彼が口を開くや否や、その表情は忽ち滑稽になり、意地悪くさへなるのであつた。併しオストロデューモフは何とも云はなかつた。

ピークリンは再びマッシュリーナの方を向いた。

「時に、あなたの研究はどんな風にお進みです？ あなたは、あなたの眞の博愛的技術に成功しましたかね。今迄少しも經驗のない市民に初めてこの世の光を見せてやるやうにすると云ふ事は、なかなか六か敷い仕事でせうね、え？」

「いゝえ、ちよつとも六か敷しくはありません、その市民があなたより大きくさへなければね。」とマッシュリーナは答へた。彼女は遂此頃産婆の免狀を取つたばかりだつたので、何となく嬉しさうに微笑んだ。一年半程前に、彼女は南露西亞の貧乏貴族である自分の家族を見棄て、衣兜にたつた六留の金を持つてベテルブルグへ出て來たのであつた。彼女は産婆學校へ入つて、絶えず苦しい仕事をつゞけた後、やうやく望んでゐた免狀を得たのである。彼女は獨身の婦人であつた……而も非常に素行の正しい獨身の婦人であつた。彼女の外面から見たそんな評判には何も驚くことはないと思つて疑ひ深い人は云ふだらう。が、我々に云はせれば、稀有な驚嘆すべき何物かを持つてゐる婦人であつた。

ピークリンは彼女の侮辱したやうな返答を聞いた時、再び笑つた。

「あなたはうまい事を云ふ人ですね！」と彼は叫んだ。「當意即妙と云ふところですね！ さう云はれたつて仕方がありませんよ。何しろ私はこんな小人でゐるんですからな。だが、此處の主人公はどうしたんでせう？」

パークリンはわざと話題を變へた。彼は丈の低さや不格好な小さい身躰付やを考へると堪らなかつた。彼は熱心な婦人崇拜者だったので、一層鋭くそれを感じた。彼には女を惹きつけるやうな何物も與へられてゐなかつた。彼は自分の血筋の卑しいことや社會的地位の低いことよりは、自分の外貌の醜さを意識する事の方が一層耐へがたい苦痛であつた。パークリンの父親は純粹の商人であつた。彼は様々な策略を弄して名義上だけは議員の地位に昇つた男であつた。彼は訴訟事件にかけても投機にかけても、家屋や地所の賣買にかけても非常に機敏な媒介者であつた。彼は可なりな財産を作つたが、晩年になつてから酷く酒浸しになつてゐたので、死んだ時には何一つ後に残して行かなかつた。若いパークリンは（彼はシーラ・サムソニツチと名づけられてゐた、即ち「サムソンの息子なる強い力」と云ふ意味であつたが、彼はこんな名前もまた嘲笑の種だと思つてゐた。）商業學校で教育をうけて、全然獨逸語だけを學んだ。可なり不愉快な様々の經驗を積んでから、漸く彼は一箇年百五十ポンドの給料で或る個人の商館へ勤めることになつた。その給料で彼は自分自身を、病身の叔母と、債背の妹を支へてゐた。我々のこの話が始まつた頃、彼は丁度二十七であつた。パークリンは大勢の學生と知り合つてゐた。若い連中は、彼の皮肉な頓智や、傍若無人の愉快な毒舌や、偏狹ではあるが確乎とした術氣のない、學識を好いてゐたのである。たゞ時々彼は學生たちのために苦しめられてゐ

た。或る時彼は或る政治的會合に少し遅れて出席したことがあつた……彼は席へ入ると直ぐ大急ぎで辯解しはじめた。と、その時、片隅の方で「哀れなパークリンは怖がつてゐた！」と誰れか歌ひ出した。すると、みんながどつと笑ひ崩れた。パークリンは心中には苦しかつたが、自分も到頭笑ひ出してしまつた。「人の急所を衝きやがるな、畜生！」と彼は思つた。ネヴダーノフとは或る希臘料理屋で知己になつたのであつた。彼はよくその料理屋へ出掛けて、食事をしながら、開けつばなしな大膽な議論をぶちまけてゐたのであつた。彼は自分が民主的精神に傾いたのは、肝臟を厭に刺戟する咀ふべき希臘料理が主な原因をなしてゐるのだと斷言してゐた。

「あゝ、實際……此處の主人公はどうしたんでせう？」とパークリンは繰返へした。「私は此間から氣がついてゐるんですが、あの男は此頃少し如何かしてゐますよ。戀愛にでも陥つてゐるのかな？——呪ふべきこつた。」

マシユリーナは顔をしがめた。

「あの人は圖書館へ、何か本を取りに行つたんです。あの人には戀愛なんぞしてゐる閑暇はありませんわ、それに戀をする相手もありませんわ。」

「あなたと云ふものがあるぢやありませんか？」と彼はもう少しで口に出すところであつたが、自分

を押へつけて、「私はあの男に會ひたいんだがな。」と嘆いた。「私は或る重大な事件についてあの男に話さなければならぬことがあるんです。」

「どんな事件ですか？」とオストロデューモフが口を押んだ。「我々に關係した事件ですか？」

「多分あなた方にも……詰り我々皆に關係した事件なんです。」

オストロデューモフはふむと呻吟した。心の中では怪訝に思つた。が、直ぐと彼は反省した。「何云つてるんだか分るものか！ こんなたくり廻る鰻の云ふ事が！」

「やつと歸つて來ましたわ。」と不意にマシユリーナが云つた。控室の扉口をちつと見詰めた彼女の愛嬌のない小さな眼に、何となく温かな、優しい感情の閃きが、深い心中の輝きを仄めかすやうな或る閃きがあつた……。

扉が開いた。と同時に、縁無帽を被つて、脇の下に何かの書物を抱えた、年頃二十一三の青年が——ネヴダーノフその人が——入つて來た。

二

自分の部屋にゐる三人の訪問者を見ると、ネヴダーノフは一寸扉口に立停つて、一目で彼等を見廻

はしてから、帽子を脱いで、行きなり床板の上へ書物を投げ出した。そして一言物も云はずに床の處へ行つて、その端へ腰を下した。波打つた胡挑色の頭髮が深い赤味を帯びてゐるために一層白く見える彼の顔には、不快の困惑との表情が浮んでゐた。

マシユリーナは唇を咬みながら、ほんの少し側の方を向いた。オストロデューモフは呻吟した。「到頭！」

「一ばん最初にネヴダーノフに近づいたのはパークリンであつた。」

「何が面白くない事があつたのかね、アレキセイ・ドミトリヴキツチ、露西亞のハムレット！。誰れか君を怒らしたのか？ で無ければ、何と云ふ譯もない憂鬱かね？」

「放つといつて呉れ、露西亞のメフキストフェーレス。」とネヴダーノフは苛々したやうな調子で答へた。「僕には君の鈍感な頓智の相手になつてゐられるやうな餘裕はないんだから。」

パークリンは聲を立て、笑つた。

「君はどうも、言葉を精確に使はない人間だね。頓智があるなら鈍感ぢやない。鈍感なら頓智はないよ。」

「分つた、分つた……君の懶巧なことは僕等はよく知つてる。」

「君はひどく興奮してるやうだね。」とパークリンは落ちつき拂つた口調で云つた。「若しか本統に何か事件があつたんぢやないのか？」

「特別に何にも事件はありやしない。だが、斯う云ふ事はあるさ、ベテルブルグのやうな斯様な不潔な街にゐると、何か陋劣な事や、愚にもつかない事や、恐ろしい不正や、腐敗の中へ足を突込まずには一步も歩けないと云ふ事だ！ 斯んなところで生活するのは逆ももう我慢が出来ない。」

「君が家庭教師の口を探すために新聞へ廣告して、何處かへ逃げ出さうとしてるのは、その爲なんだね。」とオストロデューモフは再び呻吟つた。

「僕は衷心から喜んで此處を去らうと思つてるんだ！ 若し誰れか馬鹿な奴が僕に或る雇口を與へてさへ呉れよば。」

「でも、あなたは何よりも先に「此處で」あなたの役目を果さなければなりませんわ。」とマシユリーナはやつぱり側を向いた儘意味ありげに云つた。

「それは如何いふ？」とネヴダーノフは鋭く彼女の方へ振向きながら問ひ返した。
マシユリーナは堅く口を結んだ。

「オストロデューモフがあなたに云ふでせう。」

ネヴダーノフはオストロデューモフを振り向いた。が、オストロデューモフは咳拂ひをして、かう呟いたゞけであつた。

「ちよつと待ち給へ。」

「いや、本統にもう笑談は抜きにして。」とパークリンが口を挿んだ。「君は何か面白くない事があるのを聞いたのか？」

ネヴダーノフはさながら何物かの力が彼を衝き上げたかのやうに床へ跳び上つた。

「君はこれ以上にどんな面白くない事があると思つてるんだ？」と彼は不意に大聲になつて叫んだ。」

「露西亞の半分は餓死しかゝつてゐる。モスクワ・ガゼットは凱歌を揚げてゐる。奴等は古典主義を唱導しやうとしてゐる。學生の相互救済俱樂部は禁止された。何處にも此處にも探偵や、迫害や、裏切や、瞞着や、内通やが行はれてゐる——我々は何方に向いても一步も足を進めることは出来やしない……所が、この男にはまだ此れだけで充分でないんだ——この男は何か更に尙新らしい不快事を求めてゐる。この男は僕の云ふことを笑談だと思つてゐるんだ……パサーノフが拘引されたんだぜ。」と彼は少し聲を低くしてつけ加へた。「圖書館でみんなにその事を聞いたんだ。」

オストロデューモフとマシユリーナとは、兩方とも同時に顔を揚げた。

まあ君、アレキセイ・ドミトリヴキツチ。」とパークリンは始めた。「君は興奮してる——そりや尤もなことだ……が、君は我々が今如何な時代に、如何な國に生活してゐるかと思ふ事を忘れたのか？ ねえ我々の間では、水に溺れやうとしてゐる者は、自分の握む繩を自分で縛はなければならないんだ。さう云ふ場合にセンチメンタルになつたつて何の役にも立ちはないぜ！ 我々は悪魔の顔を見究めてやらなければならない、子供のやうに興奮してしまつては可けない。」

「あゝ、どうか止めて呉れ！」とネヴダーノフはかつとしたやうな調子で遮つた、そしてまるで痛みでも感じたやうな顔付をした。「君が氣の強い男だつたことは、何物をも恐れない、何人をも恐れない男だつたことは、みんなよく知つるよ。」

「僕が……何人をも恐れないつて！」とパークリンは云ひかけた、

「だが、バザーノフを裏切つた奴は誰れだらう？」とネヴダーノフは續けた。「僕には分らん。」

「そりや確かに誰れか友達だね。奴等はさう云ふ事にかけてはや偉い手をやるからね——友達と云ふ奴は。君は奴等を要心しなければ可けないぜ！ その一例を云ふと、僕に或る友達があつたが、その男は非常に善良らしい人間だつた。僕の境遇や、僕の評判を始終心配してゐてくれたんだ！。すると、或る日、その男が僕のところへやつて来て、「ねえ君！ 君の事で馬鹿げた醜聞が擴がつてるよ。」と云

ふんだ。

「奴等は、君が自分の叔父さんを、毒殺したと云つてゐる。それから又、君が或る家へ、紹介されて行つた時、君はいきなり其家の主婦に尻を向けて腰を下したが、その晩一晩中君がさうして尻を向けた儘坐つてゐたので、その夫人はこの侮辱に腹を立て、泣き出した、おい／＼聲を揚げて泣き出した……と云ふんだ。何て馬鹿々々しい嘘つぼちだらう！、こんな馬鹿げた話をどいつがふれ廻つたんだらう？」

とかう云ふんだ。所が、その後で如何な事になつたかと云ふと、それから一年経つて、僕はその話をした友達と絶交してしまつたんだ……そして奴はお別れの手紙に、

「何だ貴様は、自分の叔父を毒殺した人間ぢやないか！ 尊敬すべき婦人に尻を向けて坐つた、侮辱したことを耻ぢない人間ぢやないか！ とこんな風な事を書いて寄越した。友達なんて者はまあ斯んなものさ！」

オストロデューモフはマシユリーナと眼を見合はした。

「アレキセイ・ドミトリヴキチ」と彼は重苦しい低音で突然云ひ出した——

彼は明らかに際限のない下らない鬨舌りをぶち切つてやらうと思つたらしかつた。

「モスクワのワシリイ・ニコライヴキツチから手紙が来たよ。」

ネヅダーノフはちよつと跳び上つて、目を伏せた。

「何て云つて来たんだ？」と到頭彼は訊いた。

「む、僕とこの人に——」オストロデューモフはマシユリーナを指した。「来るやうにと云ふんだ。」

「何？ この人にも来るやうにつて？」

「む。」

「で、何かそれに就て困つてゐることがあるのか？」

「勿論、困つてるのは——金だ。」

ネヅダーノフは床から起ち上つて、窓際へ行つた。

「どの位要るんだ？」

「五十留……それだけは如何しても無けりや。」

ネヅダーノフは少しの間黙り込んでゐた。

「僕は今そんなには出来ない。」と彼は指の先で窓框をこつ／＼やりながら、判頭呟いた。「けれど……何とか出来なかな。僕はやつて見やう。君は手紙を持つて来たかい？」

「手紙か？ そりや……勿論。」

「何故君はいつでも僕に物を隠さうとするんです？」

とパークリンが叫んだ。

「私は君の信用に懐ひしないんですか。假令私が、君達の計劃に對して、充分に同情を表さなかつたとしても、私が裏切りをしたり、秘密を洩らしたりする人間だといふ風に考へなくても好いでせう？」

「何もそんな氣で……たゞ偶然！」とオストロデューモフは沈んだ聲で云つた。

「そんな氣であつても、そんな氣でなくつても、どつちでも同じこつてす。ほら、此通りマシユリーナさんは私を見て笑つていらつしやる……けれども私は……。」

「私笑つてやしませんわ。」とマシユリーナは咬みつくやうに云つた。

「だが、私は諸君に云ふ、諸君には直覺力がないんだ、諸君には諸君の眞の友人がどんな人間であるか判断することが出来ないんだ。」

「さうですとも！」とマシユリーナは再び咬みつくやうに云つた。

「例へば今、」とパークリンは新らしい元氣を出して、最早やマシユリーナには答へやうともしないで急ぎ込んで云つた。「諸君は金に騎してゐる……そしてネヅダーノフには今持ち合せがない……それな

ら、私がそれを出しても宜いんです。」

ネッダーノフは素早く窓際から振向いた。

「いや……いや、そんな必要はない。僕が拵へる……僕は僕の手當の幾分かを前借しやう……まだ幾らか貰へる筈だ。だが、オストロデューモフ、手紙を見せ給へ。」

オストロデューモフは最初少しの間ちつと立つてゐた。それから四邊を見廻はして、やがて立ち上ると、前へ屈んで、洋袴を捲くり上げながら、長靴の中から丸めた、青い紙の球を注意深く取り出した。この球を取り出すと、何のためか、彼はふうつと其れに息を吹きかけて、それからネッダーノフに渡した。

ネッダーノフは手紙を受取つて、それを伸ばして、熱心に讀んでゐた、そしてマシユリーナに渡した……彼女は最初椅子から立ち上つて、やがて彼女もそれを讀んだ。そしてパークリンがその方へ手を差し出してゐたにも拘らず、ネッダーノフに、それを返へした。ネッダーノフは肩をしやくり上げて、その神秘的な手紙をパークリンに渡した。今度はパークリンがそれに目を通して、如何にも意味ありげに口元を引き締めながら、ちつと沈黙した儘それを卓の上に置いた。オストロデューモフはそれを取り上げると、強い硫黄の匂ひのする大きな燐寸に火をつけた。そして最初其處にゐるみんなに向

つてこの通りだと云つたやうにその手紙を頭の上へ高く翳しながら、燐寸の火をうつして、指に火の子が掛るのも構はず、すつかりそれを燃して了つてから、灰になつた奴を暖爐に投げ込んだこの所作の間、誰れも一言も物を云はなかつた、身じろぎもしなかつた。みんなは顔をうつむけてゐた。オストロデューモフは凝り固まつたやうな生真面目な容子をしてゐた。ネッダーノフの顔は怒りに燃え立つてゐるやうに見えた。パークリンは何となく不安らしい色を浮べてゐた。マシユリーナはちやうど莊嚴な儀式に出た時のやうな様子であつた。

かうして二分ばかり経つた……やがて軽い困惑がみんなの上に襲ひかゝつて來た。一ばん最初にこの沈黙を破る必要を感じたのはパークリンであつた。

「ところで、」と彼は始めた。「祖國の祭壇にさゝげる私の生贄は受けて貰へるのか、貰へないのか？ よし五十留でなくつても、少くとも二十留か三十留は朋黨のために寄捨することを許してくれるだらうねー」

ネッダーノフは忽ち、かつと激昂してしまつた。彼の背立しい気分はだん／＼と烈しくなつてゐたのであつた……手紙を燃した厭かな有様も彼の氣分を和げることは出来なかつた、たゞ爆發させる機會を待つてゐただけであつた。

「僕はもうそんな必要はないつて云つたぢやないか、必要はない……必要はないよ！僕は許さない、僕は受け取らない。金は僕が拵へる、直ぐに拵へる。僕は誰れにも助けて貰ふ必要はない！」

「宜しい、親友。」とパークリンは云つた。「ぢや君は、革命家でありながら民主主義者ぢやないんだ！」

「その場で僕を貴族主義者だと云つて見ろ！」

「宜しい、實際君は貴族主義者だ……或る程度まで。」

ネヅダーノフは無理に押し出したやうに笑つた。

「君は僕が私生兒だと云ふことを諷刺するつもりなんだらう。餘計な心配をしてくれるな、親切な友達……君の助言がなくなつたつて、僕はそれを忘れるやうな事はなからうよ。」

パークリンは矢鱈に両手を振り揚げた。

「アリオシヤ、一體君は如何したんだ？ 何だつて僕の言葉をそんな風に取りるんだ！僕には今日は君と云ふ人間が分らない。」ネヅダーノフは頭と肩でもう我慢がならないと云つた風な容子をした。

「ベサーノフが拘引されたので君は昏亂してゐるんだね、併し、君も知つてゐるやうに、あの男は何時もあんまり不謹慎だつたから……」

「あの人はいつも自分の信する所を隠さなかつたんですわ」とマッシュリーナが陰鬱な調子で遮つた。

「あの人の缺點を探し出すなんて事は、私達のすべきことぢやありません。」

「そりや勿論です。たゞ併し、あの男は現在自分のために危険を及ぼすかも知れない他の友人の事も考へなければならなかつたんです。」

「どうして、君はあの男の事をそんな風に想像するんです……」と今度はオストロデューモフが怒鳴つた。「ベサーノフは意志の堅固な人間だ、彼は決して誰れをも裏切るやうなことはしない。不謹慎と云ふことに就ては……僕をして言はしむれば、我々が皆同じやうに慎重にしてゐると云ふ事は出来難いことですからね、パークリン君！」

パークリンは、かつとして何か返答しやうとしたが、ネヅダーノフは彼を遮つた。

「諸君」と彼は叫んだ。「どうか、暫くの間政治上の義論を止めて呉れたまへ。」

沈黙が來た。

「私は今日。」とパークリンが到頭始めた。「我々の國民的批評家であり、狂信的美學者であるスコロビヒンに會つた。逆も堪らない厭な奴だ。あいつは何時でも沸騰して、ぶつ／＼泡を立ててゐる、何のことはない、この世界は一つの燻で、あいつはその中に入つてゐる悪く強いクワス（ライ麥で作つた酒、乾葡萄酒など）で味がつけてある」のやうなものだ……給仕人はそいつが沸騰すると怪の代りに

指で口を押へて、囁の首へ太い葡萄の蔓を差し込んで置くだ……すると、そいつはいよいよ沸騰して、ぶつ／＼云つてゐるところが一度泡が囁から溢れ出て了ふと、囁の底には悪い強い奴が二三滴しか残らない、その味と來たら渴を癒すどころか、痛いほど胃を刺戟するだけだ……あいつは若い者が交渉を持つたら大きな害毒をうけるやうな代物だ！」

パークリンの云つたこの比較は、非常にうまくの中したものであつたが、誰れの顔にも微笑み一つ浮ばなかつた。たゞオストロデューモフだけは、假令スコロビヒンが青年たちを邪道に惹き入れたとしても、美學に興味を持ち得る青年たちに對して悲しむには當らないと云ふ意見を述べた。

「けれども、一寸待ち給へ。」とパークリンは熱くなつて叫んだ……彼は同感を得なければ得ない程、益々興奮するのであつた……「此處に一つ問題があるんだ、政治上の問題として認めるには足りないが、それにも拘らず非常に重大な問題なんだ。スコロビヒンの議論に従へば、凡ゆる古代の作品はそれが古いと云ふ理由に依つて、良いものでないと云ふのだ……若し然りとすれば、藝術と云ふものは、一種の流行品に過ぎなくなる、眞面目に論ずる價值がないと云ふことになるぢやないか！ 藝術上の作に品永遠不朽な何物もないとすれば……それは其れでも構はないが、例へば科學や、數學に於ても、諸君はユーラトや、ラブレースハウスを廢物になつた馬鹿者だと思はないだらう！ 彼等の權

威を認めずには居られないに違いない。然るにラフェルやモツアルトに對しては、彼等を馬鹿者扱ひにせよと云ふのだ。彼等の權威を認めることは出來んと云ふのだ。藝術上の標準に到達するのは、科學上の法則を發見するより困難であることは分つてゐる。けれ共、それは存在してゐるのだ、それを發見しないのは、故意とであらうと無からうと、いづれにしても盲目であるからだ！」

パークリンは止めた……みんなは口に水を含んでゝもゐるやうに、又パークリンを氣耻かしいものに思つてゝもゐるやうに、誰れも一言も云はなかつた。たゞオストロデューモフが呻吟るやうに斯う云つただけであつた。

「でも、僕はやつぱりスコロビヒンに迷はされる青年を可哀相だとは思はない。」
「おゝ、どうでも勝手にしろ！」とパークリンは心中に云つた。「俺はもう歸る。」

彼は外國から Portal Star 「北極星」を取寄せる事についてその當時 Ball 「警鐘」は既に廢刊になつてゐたので、自分の意見を通じて置くためにネツダーノフに會ひに來たのであつたが、今はこの問題さへ云ひ出さない方がいゝと思つた程、會話が外へそれて了つた。パークリンは何時か自分の帽子を持つてゐた。と、その時不意に、何の豫告もなく、扉を叩く音もなしに、非常に氣持ちの好い、男らしい、和らかな上低音の聲が控室から聞えた。「ネツダーノフさんはお家ですか？」その聲の調子には、

何となく非常に上品な、教養のある人間であることを暗示するやうな、佳い香菊をさへ思はせるやうな響きがあつた。

みんなは驚駭して顔を見合はした。

「ネツダーノフさんはお家ですか？」とその上低音が繰返した。

「居ります。」と到頭ネツダーノフが答へた。

扉がしづかに滑かに開いた。そして短かく刈り込んだ美しい頭から艶のいゝ帽子をゆたりと脱ぎながら、年頃四十格好の、丈の高い、よく釣合ひのとれた、容子の堂々とした一人の男が入つて來た。彼は四月も最早終りに近づいてゐるのに、海狸皮の素晴らしい襟をつけた綺麗な布地の外套をまといつてゐた。その態度の優雅な調子と上品な丁寧な言葉使ひには、ネツダーノフも、パークリンも、マシユリーナも……オストロデユーモフさへも驚ろかされた。彼の姿を見ると、みんなは、思はず起ち上つた。

三

風采の優雅なこの訪問客は、ネツダーノフに近づいて、愛想よく微笑みながら始めた。

「私は一度もあなたにお目にかゝつて、いろいろお話をも伺つた者でございますよ、ネツダーノフさん、記憶でせうが、昨日劇場で。」客は何事かを待ち設けるやうに言葉を切つた。ネツダーノフは軽く頭づいて、顔を赧くした。「そこで……私は今日新聞で、あなたの廣告文を拜見しましたものですか、お目にかゝりに上つた次第です。私はほんの二言三言お話しいたすことが、出来れば結構なのです、こちらの御婦人や御友人の御邪魔になるやうな事がございませんでしたら……」客はマシユリーナに點頭をして、それからパークリンとオストロデユーモフの方へ瑞典製の白い手套をはめた手を差し出した。「若しや御邪魔ではございませんまいか……。」

「いゝえ……少しも……。」とネツダーノフは何となく云ひ悪くさうな調いで云つた。「友人たちには差支ありません……どうかお掛け下さいませんか？」

客は丁寧に頭を下げ、椅子の凭背に手をかけて、しづかに自分の方へ引き寄せた。が、みんなが立つてゐたので、彼は腰を下さなかつた。彼は半ば閉ぢてはゐたが、澄んだ眼であたりを見廻はした。

「左様なら、アレキセイ・ドミトリウキツチ、」とマシユリーナが突然云ひ出した。「私後で來ますわ。」

「僕も、」とオストロデユーモフがつけ加した。「僕も後で來やう。」

を籠めた握手をして、誰れにも挨拶もせずには部屋を出て行つた。オストロデューモフはわざと靴の音をどしん／＼やつて、彼女の後から出て行つた、丁度かう云はうとしてるかのやうに、何度となく鼻嵐を立てながら。「ふん、貴様の海狸皮の襟はいかにも立派だよ！」

客は静やかな併し幾らか怪訝な眼付で二人を見送つてゐたが、今にこの男もあの二人と同じやうに部屋を出て行くだらうと待ち設けてゐるやうにパークリンを眺めやつた。が、こゝ未知らぬ訪問客が入つて来た瞬間から奇妙なわざとらしい微笑みを面に浮べてゐたパークリンは、少しづつ向うへ下つて、片隅へ引込んだ。

「私の苗字はシプヤーギンと申します……多分お聞き及びかと存じますが。」と客は勿體ぶつた謙遜な調子で始めた。

併し此處で先づ、如何してネツダーノフが劇場でこの男と出會つたかを語つて置かなければならぬ。

その劇場では、モスクワからサドフスキイが来てゐたのを機會として、アレキサンダー・オストロフスキイの「他人の橋に乗る勿れ」を上演してゐた。ルサコフの役は、この名優の嵌り役の一つとして有名なものであつた。その朝早くネツダーノフは一ぱい人の押し寄せてゐる切符賣場へ出掛けて行

つた。彼が土間の切符を買はうと思つて、賣場の窓に近づいた時、彼の背後に立つてゐた一人の士官が、ネツダーノフの肩越しに三留の紙幣を突き出しながら、「この人はきつと釣銭が要るんだらう、俺は要らないんだから、俺に直ぐ椅子場の第二列目の切符を呉れ……俺は急ぐんだ」と叫んだ。「失禮ですが。」とネツダーノフは鋭く言ひ返した。「僕も椅子場の切符が要るんです。」かう云ふと、彼は小さい窓口へ三留……彼が持ち合はせてゐた金を残らず……投げ出した。賣子は彼に切符を與へた。斯うしてネツダーノフはその晩アレキサンドリンスキイ劇場の一等席へ姿を現はしたのであつた。

彼は見すばらしい服装をして、泥だらけの、長靴をはいて、手套もしてゐなかつた。彼は心中おど／＼しながら、自分のおど／＼してゐるのに腹を立ててゐた。彼の右隣りには勳章を幾つも飾つた將軍がゐた。左側の席には同様に美しく着飾つた男がゐた。この男は、それから二日経つて、今ネツダーノフを訪問してマシユリーナとオストロデューモフとを驚かした樞密顧問官のシプヤーギンだつたのである將軍の方はさながら或る不當な意想外な、厭はしい物でも見るやうに、時々じろ／＼とネツダーノフを眺めてゐた。それと反對にシプヤーギンの方は、少しも敵意のない眼付でそつと彼の容子を見てゐた。ネツダーノフの周りにゐた人々は、いづれも普通の見物とは大分違つた貴族階級の人間であつた。彼等はみんなお互によく知り合つてゐて、短い會話を取り交はしたり、簡単な感嘆詞を述

べ合つたり、歓迎の挨拶をしたりした……中には、ネツダーノフの頭越しに話し合つてゐる者もあつた。かう云ふ人々の中でネツダーノフはまるで穢多か何かのやうにおどろ／＼して、廣い氣持のいい椅子に身動きもせず坐つてゐた。彼は心中に苦痛と羞恥と嫌惡とを感じてゐた。彼にはオストロブスキイの喜劇もサドフスキイの藝も大して面白く／＼じられなかつた。すると突然、或る幕間に、彼の左側にゐた、勳章を下げた將軍でない、胸に何にも徽章をつけてゐないもう一人の方が、彼に向つて何となく取り入らうとするやうな優しい態度で、物知らずに丁寧に聲をかけたので、ネツダーノフは非常に驚駭した。その男はオストロブスキイの劇作について話を始めて、ネツダーノフを「新時代の代表的人物」として彼がどんな感想を持つてゐるかを知らうとしたのであつた。殆んど慄える程驚駭したネツダーノフは、最初の間はたゞ狼狽して、左様とか否とかしか、答へることが出来なかつた……實際彼の胸は、どき／＼と動悸打つてゐたのであつた。が、その中に彼は、何だつて自分はおぼ／＼してゐるんだ？ この男が外の者と何處が違つた人間なんだと？ 自分を腹立たしく思つた。そして彼は逡巡としないで、包み隠しなく自分の意見を述べはじめた。お終ひには明らかに隣席の勳章の將軍を怒らした程熱中して、聲高に饒舌り捲つた。ネツダーノフはオストロブスキイの熱烈な讚美者であつた。が、この喜劇「他人の橋に乗る勿れ」の中に現はれてゐる作者の才能に對する彼の讚嘆

にも拘らず、ウイホーレフの道化た性格の中で、文明と云ふものを侮蔑しやうとした明らかな意圖に對しては、同意することが出来なかつた。隣席の禮儀正しい紳士は、非常な注意と同感とをもつてちつと彼の意見を傾聴してゐた。そして次の幕間になると、再びネツダーノフに向つて、4度はもうオストロブスキイの劇曲に就ては、一般的様な題目について、人生について、科學について、政治問題について迄も話し始めた彼は明らかにこの雄辯な青年に興味を感じたらしかつた。ネツダーノフは話が進むにつれて、もう控目どころではなく、水の流れるやうな調子になつて論じてゐた。「宜しい、そんなに聞きたけりや、幾らでも聞かしてやる！」とでも思つてゐるやうに。此方隣りの將軍は、最早や單に、不愉快なと云ふやうな程度を越して……斷乎とした怒りと疑ひとを起してゐた。演技がお終ひになると、シプヤーギンはネツダーノフに丁寧に挨拶したが、彼の苗字を聞かうとせず、自分の名前も名乗らずに出て行つた。彼は階段へ出て馬車を待つてゐる間に、彼の友人で侍從官であるG公爵に出會つた。

「僕は自分の坐席からあなたを見てゐました。」と公爵は香水の匂のぶん／＼する口髭の下に白い齒を見せながら彼に云つた。「あなたが話してたあの男をあなたは知つてゐるんですか？」
「いゝや。あなたは知つてゐるんですか？」

「あの青年はなか／＼懶巧者でせう、え？」

「非常に懶巧な人間です。ありや誰れです？」

公爵は彼の耳に頭を寄せて、佛蘭語で囁いた。「僕の弟……さう、僕の弟です。僕の父の私生兒なんです……名前はネヅダーノフと云ふんです。何時かそれに就てあなたに話をするが……僕の父は彼の事を全く豫期しなかつたので、ネヅダーノフ（豫期しなかつたものと云ふ意味）と云ふ名をつけたんですけれ共、父は彼の爲めに面倒は見つてやつてみました……*in huius die in aort*（彼は彼れに幾らかの財産を分けてやつた）……僕等は現在彼に幾分の仕送りをしてゐるのです。なか／＼頭のいゝ奴ですよ……矢張り僕の父のお蔭で、好い教育をうけたんですが、共和黨か何かの馬鹿者の仲間になつてゐるんです……で、今では僕等は彼を寄せつけない事にしてゐます……*it is impossible!*（飛んでもない事ですからね）だが、これで失禮します。馬車が来たやうですから。」と公爵は行つてしまつた。そして次の日シプヤーギンは、ネヅダーノフが出した新聞廣告を読んで、彼を訪問したのであつた……。「私の苗字はシプヤーギンと申します。」と彼はネヅダーノフと差向ひに藤椅子へ腰を下しながら云つて、優しい眼付でちつと彼を見詰めた。「私はあなたが家庭教師の口を來めてゐらつしやる事を新聞で拜見しましたので、その御相談に上りましたのです。私は家庭を持つて居りますもので、息子が一人

あります……今年九つになります……遠慮なく申し上げると、なか／＼懶發なたちでございます。私共は夏と秋は大部分……縣の首府から互露里ばかり距つた田舎で暮らすことにして居ります。そこで、あなたに御休養をなさるつもりで私共と一緒ににお出でになつて頂いて、あなたが新聞へ御廣告になりました通りの學課を……露西亞語と歴史を……私の子供にお教へ願へますまいか？ 私の考へます所では、私や私の家族の者も、その田舎の土地も、多分あなたの御氣に召すだらうと存じます。素晴らしい庭園もあれば、河の流れもあり、あたりの景色も非常に佳く、家も廣うございます……如何でせう、御承知願へますか？ 若し御承知願へますなら、あとは唯期限の事だけをお訊ねすれば宜しいのです。」とシプヤーギンは軽く微笑みながらつけ加へた。「尤も左様いふ點につきましては、あなたと私との間に何か面倒な問題が生じやうとは思はれませんが。」

シプヤーギンの饒舌つてゐる間中、ネヅダーノフは、少し後方へ反らした彼の小さい頭や、平つたく狭くはあるが懶巧さうに見える額や、羅馬人のやうな華奢な鼻や、愉快さうな眼や、愛想のいゝ言葉が滑らかに流れ出て來る形のいゝ唇や、英國風に垂れ下つた頬鬚やをちつと見詰めてゐた……見詰めたがら困惑してゐた。「これは一躰どう云ふ事なんだ？」と彼は考へた。「何だつてこの男は俺にこんな相談を持ち掛けに來たんだらう？ この男は貴族なんだし……俺は！ 一緒になるなんて有り得な

「い事ぢやないか？ 何に誘はれて俺のところへ遣つて来たんだらう？」

彼はちつと思ひに耽つてゐて、シプヤーギンが返答を待つために途中で言葉を切つた時にも口をきかなかつた程自分の考へに氣を取られてゐた。シプヤーギンは片隅へ引込んだ儘ネツダーノフと同じやうに彼をちつと見詰めてゐるパークリンの方をちら／＼眺めやつた……。この第三者があるために、ネツダーノフが答へを躊躇してゐるのではあるまいか？ シプヤーギンは自分が身を置いたこの周囲の奇怪な光景に適はしいやうな振舞ひしやうとするやうに、眉毛を屹とつり揚げて、それから又聲を高めて、彼の問ひを繰返へした。

ネツダーノフは身體をびくりとさせた。

「勿論。」と彼は幾らか慌てゝ云つた。「僕はお受けします……喜んで……けれ共、實を云ひますと……僕は何だか不思議な氣がしてならないんです……僕は推薦狀一つ持つてる譯ではありません……それに一昨日劇場で申述べたやうな議論は、寧ろあなたのお考へに悖つてゐることと思ふんですが……。」

「あなたはまるで思ひ違ひしていらしやいますよ、アレキセイ……アレキセイ・ドミトリヴキツチー左様お思ひになりませんか？」とシプヤーギンは微笑みながら決めつけた。

「遠慮なく申し上げますが、私は自由な、進歩的な思想を抱いてる人間として世間に知られて居るの

です。然るに、あなたの御意見は、青年の特徴たる、常に誇張に陥らうとするいやお氣を悪くして下さつては困りますが……さう云ふ様な點は例外として、あなたのあの御意見は、私の思ふ所と少しも抵觸しないのです。そして實際、私はあの若々しい熱烈な御精神を喜ばしく思ふのです。」

シプヤーギンは少しの躊躇もなく饒舌つた。彼の流暢な、婉曲な調子は、露西亞でよく云ふやうに、

「油の上へ蜜を垂すやうに滑らか」であつた。

「私の妻もやはり同じやうな考へを持つて居ります。」と彼は續けた。「彼女の議論は尙更らあなたの御考へに近いかと存じます。それは極めて自然なことなのです、彼女は私よりすつと年が若いのですから……あなたにおけにかゝりました翌日、私は新聞でお名前を拜見しました時……私は既に劇場で承つてお名前は存じて居りましたが、あなたが普通の例とはまるで反對に、御住所まで紙上にお掲せになつてゐるので、この事實のために……さうです……この事實のために、私は驚駭いたしました。私はその……その暗合……迷信的な云ひ草ですが……その暗合に、云はゞ何か斯う微妙な因縁があるやうに思ひましたのです。あなたは推薦狀のことを仰しやいますが、私は推薦狀などを必要といたしません。あなたの御容子とあなたの御人柄とに私は敬意を捧げます。それだけで充分でございます。私はいつも自分の眼を信じて居りますので、では、その心算にいたしましたして宜しうございますか？ 承

「知下さいませうでせうな？」

「え、……勿論……。」とネツダーノフは答へた。「そして僕はあなたの御信頼に添ふやうに努めたいと思ひます。ですが、唯一つちよつと申し上げたいことがあります。僕はあなたの御子息をお教へするつもりですが、監督して上げすることは出来ないのです。僕はさう云ふ事には適さないんです……それを實を云ひますと、僕は自分を束縛したくないんです、自分の自由を失ひたくないんです。」

シプヤーギンは蠅でも追ひ拂ふやうな格好に軽く手を振つた。

「御心配には及びません……あなたはさう云ふ詰らんお人柄ではありません。それに私も彼を他人に監督して貰ふとは思つて居りませんから……私は先生を看つて居りたいと思つて居りますのです、そしてもう看つかつた譯なのです。そこで期限はどんな具合に？ それから厭な問題ですが、報酬の點は？」

ネツダーノフには何と云つたら好いのか分らなかつた……。

「いや。」とシプヤーギンは身體を前へ屈めて、指の先を馴れ／＼しくネツダーノフの膝に觸れながら云つた。「紳士の間では斯う云ふ問題は一言でもう定めますよ。私はあなたに一箇月百留差し上げたいと存じます。往復の旅費は勿論私の方の負擔といたしまして。如何でせう？」

ネツダーノフは再び顔を赧くした。

「それでは僕が要求してるよりもずつと多いんですが……僕は——。」

「宜しいです、宜しいです……。」とシプヤーギンは遮つた。「この問題はもうそれで定まりました……では、これからはあなたを私の家族の一人と云ふ事にさせて頂きます。」彼は椅子から立ち上つて、まるで何か贈物でも受けた人のやうに、急に晴れ／＼とした緩たりとした容子になつた。かうした彼の舉動には、一種打ち融けた親密さが現はれた、何となく子供染みた馴れ／＼しい様子さへ現はれた。「私達は二三日中に出立することにいたしましたせう。」と彼は打ち解けた調子で云つた。

「私は職務の性質上散文的な人間で、都會に縛りつけられて居りながら、田舎で春を迎へるのが好きなのです。では、今日からもうあなたを願ひした最初の月として御計算に入れて下さい。私の妻と子供とはもうモスクワに行つて居るのです。私より先へ出發しましたので。私達は田舎で會ふことになつてゐるのです、自然の懷中で會ふことに。私達は御一緒に出かけませう……、獨身者と云ふ格で……へつ、へつ。」とシプヤーギンは何となく氣障な鼻聲で笑つた。「さて、それで……。」

彼は外套の衣兜から銀で縁取りした黒い紙入を取出して、一枚の名刺を抽きとつた。

「これが私の住所です。明日……いらしつて下さい。さう十二時に。尙いろ／＼お話しいたします。教育に就ての私の考へも申述べたいと存じます……それから出發の日を決めることにさせよう。」シプ

「ヤーギンはネツダーノフの手を取った。所で序でに失禮ですが。」と彼は小聲になつて、俯向きながらつけ加した。「若し前に御必要がありますなら……どうぞ御遠慮なく仰しやつて下さい、一箇月分先に差し上げることいたしますから！」

ネツダーノフは問と答へたらいゝのか分らずに、前と同じやうに困惑して、いかにも晴れ晴れとした、愛想のいゝ、と同時に、彼に取つては少しも親しみのないその顔を彼のすぐ眼の前に屈みかゝつて優しく微笑みかけてゐるその顔をぢつと見詰めた。

「御必要はございませんか、え？」とシプヤーギンは囁いた。

「お許し下さるなら、その事は明日申し上げます。」とネツダーノフは到頭きつぱりと云つた。

「宜しうございます。では、左様なら。明日又お目にかゝります！」

シプヤーギンはネツダーノフの手を離した、そして歸りかけた。

「一寸お訊ねしますが。」とネツダーノフは不意に云つた。「先程あなたは劇場で私の名前を御承知になつたと仰しやいましたが、誰れからお聞きになつたんです？」

「誰れから？ おゝ、あなたのお友達からです、多分御親戚かと思ひますが、公爵……G公爵……」

「あの侍従職の？」

「えゝ。」

ネツダーノフは前よりも一層顔を赧くして、口を開けたが……彼は何にも云はなかつた。シプヤーギンは今度はもう何とも云はずに再びネツダーノフの手を握つて、それから最初彼に黙頭をし、次にパークリンに頭を下げて、丁度扉口のところで帽子を被つて、例の愉快さうな微笑みを顔に浮べたまゝ部屋を出て行つた、その微笑みの中には自分のこの訪問が深い印象を與へたに相違ひないと思ひ持つてゐるらしい表情をあり／＼と浮べてゐた。

四

シプヤーギンが出て行くや否や、パークリンは椅子から飛び立つて、ネツダーノフの前へ突き進みながら祝福の言葉を云ひ始めた。

「やあ、君は素晴らしい魚を捕へたものだね！」彼はくす／＼笑つて、靴の踵を、こつん／＼やりながら決めつけた。「君はあの男が誰れだか知つてるか？ 誰れ一人知らぬものもない有名な侍従職のシプヤーギンだよ、或る一流の社會の柱石で、未來の大臣の！」

「僕はあの人の事は全然何にも知らない。」とネツダーノフは陰鬱な調子で云つた。

パークリンは滅茶苦茶に手を振り上げた。

「それ其處なんだ、アレキセイ・ドミトリヴキツチ、我々の不幸は、我々が世間の誰れをも知つてゐないと云ふ其の點にあるんだ？ 我々は成る程或る仕事を企てゝゐる、世界を顧養させやうとしてゐる、然るに我々はその世界の外側に住んでゐるんだ、我々が交渉を持つてゐる人間は我々の二三人の友達に過ぎない、そして我々はいつも其の小さい範圍内をぐるぐる廻つてゐるんだ——」

「いゝや」とネツダーノフは遮つた「そんな事はない。僕等は唯敵に對しては何等の關係を持つまいとしてゐるだけだ、そして我々の仲間の者に對しては民衆に對しては、絶えず深く交渉して行かうと努めてゐるだけだ。」

「まあ、待ち給へ、待ち給へ——」と今度はパークリンの方で遮つた。先づ第一、敵と云ふ事に就ては、ダーチの詩にかう云つてゐる、

„Wer den Dichter will verteh'n

Muss im feinde's Lande geh'n……”

「詩人を理解しやうとする者は

詩人の境地へ入らなければならぬ……」

けれ共、僕はかう云ふね。

„wer die feinde will verstehen

Muss im feinde's lande geh'n……”

「敵を理解しやうとする者は

敵の領土へ入らなければならぬ……」

彼等の生活や習慣を知らずして、敵を避けると云ふ事は笑ふ可きことだ！ 笑ふ……可き……ことださうぢや無いか！ 若し僕が森の中で狼を射たうと思つたら、狼の穴をよく知らなければならぬ……第二に、君は今民衆と交渉すると云つたね。千八百六十二年に波蘭土人はその所謂「森の中」へ行つたが、我々も今その森の中へ入りかけてゐるんだ。詰り僕等にとつてはその森と同様に眞暗な恐ろしい民衆の中へ！」

「それなら君の意見に従へば、如何しなければならんと云ふのだ？」

「印度人は Ougement (印度にはこの神の偶像を巨大な車に乗せて曳き廻る祭あり、信徒この車に擲殺されるれば極樂に行く)と信じて自ら車の下に身を投げると云ふ。)の車の下へ自分から身を投げる」とパークリンは沈鬱な調子で續けた。「そしてその車に擲殺されて、祝福を與へらる。それと同じやうに

我々も Zugermarkt の車を持つてゐるんだ……我々はそれに犠牲されるかも知れないが、祝福は與へられないだらう。」

「だから、君にすれば如何しなければならん？ と云ふんだ」とネツダーノフは殆んど絶叫しないばかりに繰返した。「問題小説でも書けと云ふのか、それとも又？」

パークリンは両手を擴げて、左の肩の方へ首を曲げた。

「或る場合には、君は小説を書くが好いさ、君は文學趣味を持つてゐるんだからね……まあ、怒らずに聞き給へ！ 君がそれを云はれるのが嫌ひな事は僕にはよく分つてゐる。それに又、「埋草」のやうな文章や斬新奇抜な文句でもつて「あゝ私はあなたを愛します」と彼女は跳び上つた……それが僕にとつて何です」と男はぶん／＼して叫んだ」と云つた風な事を書き並べて行くのは、餘り立派な仕事でないつてことは僕も同感だ。上から下まで社會の凡ゆる階級の生活を見なければならぬと僕が繰返し云ふのは、そのためなんだ！ 我々はオストロデニューモフのやうな連中のみ凡ての希望を繋いで置いては可かん。あの連中は正當な、良い人間ではあるが、愚鈍だからね！ さうだ愚鈍だ！ まあ我々の尊敬すべきあの友人をちよつと見て見給へ。あの底金を打つた長靴はどうだ。とても氣の利いた人間の穿く代物ぢやないね！ 一體あの男が先程この部屋から出て行つたのは何のためだ？ 貴族

と席を共にして同じ部屋の空氣を呼吸したくないと云ふ譯さ！

「僕の前でオストロデニューモフの事をそんな風に輕蔑して貰ひたくない。」とネツダーノフは嚴然とした調子で遮つた。「あの男が厚い長靴をはいてるのは、値段が安いからだ。」

「僕はそんな事を云つてるんぢやない——」とパークリンはやり始めた。

「若しあの男が貴族と同じ席に残つてゐたくなかつたなら。」とネツダーノフは聲高になつて續けた。

「僕はその精神を讚美する。だが、それより更に讚美すべきことは、あの男は自分を犠牲にする事が出来ることだ。あの男は、若し必要な場合には、死をも恐れないだらう。君や僕にはそんな事は迎も出来やしない。」

パークリンは悲しげに顔をしかめて、自分の役に立たない小さな跛行の脚を指した。

「僕にも戦線に立てと云ふのか？ アレキセイ・ドミトリヴナツチ。あゝ！ だが、其様なことは如何でもいゝさ……僕は繰返して云ふが、君がシプヤーギン氏と關係が出来たことを心から喜んでゐる。そしてその關係から我々の仕事の上に非常な利益があるだらうと想像する。君はより高い生活に入り込むだらう！ あの牝獅子共に會へるには違ひない、「西班牙からの手紙」に云つてあるやうな「鋼鐵

の弾機で動いてゐる天鷲絨」の女共に會へるに違ひないよ。彼等を研究したまへ。ねえ、彼等を研究したまへ！ 君が若し享樂家だったら、僕はきつと君に對して不安を抱くかも知れない——確かに抱くに違ひない！ けれ共、君が斯う云ふ職業を求めたのは、勿論そんな目的のためではないんだからね。」

「僕が職業を求めたのは。」とネツダーノフは言葉の先を切つた。「麵麩と牛酪のためさ……そして暫の間君達から離れるためさ！」と心の中でつけ加した。

「勿論、勿論さうだからこそ僕は彼等を研究したまへと君に繰返し勸めてゐるんだ。まあ何て匂をあつた先生は残して行つたらう！」とパークリンは鼻をすん／＼云はせて空気を吸ひ込んだ。「これこそ「檢察官」(ゴオゴリの喜劇)の中の市長の妻君が憧れてゐた琥珀(香水)つて奴だね！」

「あの男は僕の事をG公爵に聞いたんださうだが。」とネツダーノフは再び窓際へ行きながら口の中を吐いて「多分もう僕の事はすつかり知つてゐるに違ひない」

「多分ぢやない、確かにだ！ それが如何だつて云ふんだ？ あの男が君を子供の家庭教師に採用しやうと思つたのは、君の話聞いたからの事さ、僕は賭をしてもいゝ！ 何を云つても君は矢張り貴族の生れだからね、君も自分達貴族の一人だと云ふ譯なんだ、だが僕は長居をし過ぎて了つた、僕はも

う事務所へ出掛けなけりやならん、あの山師の處へ！ ぢや左様なら、親友！」

パークリンは扉口の方へ出て行きかけたが、立停つて振り向いた。

「ちよつと、アリョーシヤ。」と彼は氣嫌を取るやうな調子で云つた。「君はさつき僕に拒絶したね、

それにもう君にも金が入る事になつたんだが、其れでも僕に幾分の犠牲を捧げることが許し給へ、備かでもいゝから、我が黨の仕事のために！ 僕にはそれより外に盡す道がないんだ。せめて僕の財巾を用に立たして呉れ給へ！ さあ、此の卓へ十留の札を置いて行く。受け取つて呉れるだらう？」

ネツダーノフは何とも答へもしなければ、身ぢろぎもしなかつた。

「黙つてるのは受取つて呉れたんだね！ 有難う！」とパークリンは喜ばしげに叫んだ、そして姿を消した。

ネツダーノフは獨り残された……彼は窓から陰鬱な狭苦しい、夏でも日光の差したことのない中庭をぢつと眺めてゐた。彼の顔も同じやうに陰鬱になつてゐた。

我々が既に云つたやうに、ネツダーノフは近衛の將軍であり、財産家であるG公爵の息子であつた。將軍の娘の家庭教師であつた彼の母親は、以前は貴族學校の女學生であつた。彼女はネツダーノフの生れたその日に死んでしまつたネツダーノフは或る寄宿學校で聰明な嚴格な瑞西人の教師に初等教育

を受けた。そしてその後大學へ入つた。彼は自分では法科に入るつもりであつたが、彼の父親の將軍は、ニヒリストを嫌つてゐたので、ネツダーノフ自身がいつも苦笑しながら云つてゐるやうに「美學科」へ詰り歴史哲學科へ無理強ひに入れたのであつた。ネツダーノフの父親は一年に三四度しか彼に會はないことにしてゐたが、彼の將來については非常に氣遣つてゐたので、彼が死んだ時には、ナスチンカ（彼の母親）に對する紀念として六千留の金額を彼に残して行つた。そしてその利息は彼の兄のG公爵から「年金」として彼に送られてゐたのであつた。パークリンが彼を貴族だと云つたのは間違ひではなかつた。彼の小さな耳、手、足、繊細ではあるが稍小さ過ぎる顔、柔かな皮膚、絹のやうな髪、少し氣取つたところがあるが音樂的にさへ聞える聲、彼の身に備つた凡てのものが、その血筋の良いことを表はしてゐた。彼は酷く神経質で、自意識が強くて、敏感で、氣紛れでさへあつた。少年時代から置かれてゐた過つた境遇が、彼を苛々した激し易い人間にしてしまつたが、彼の生來の廣量さのお蔭で疑い深い人間にはならなかつた。ネツダーノフのこの同じ過つた境遇、は彼の性格に看られる様々な矛盾を説明してゐた。彼は嚴密過ぎるほど潔癖で、小さな事にも氣難しくなるのであつたが、言葉の上では嘲笑的な粗暴な風を装つてゐた。生れつき理想家で、熱情的であると同時に素行が正しく、大膽であると同時に臆病であつたが、彼は自分の臆病さや純潔さを何か惡徳でもあ

るかのやうに耻ぢてゐたり、物の理想的方面を殊更ら嘲笑したりしてゐた。彼は深切な心を持つてゐたが、友人を遠ざけてゐた。彼は直きに腹を立てたが、いつまでも感情を害してゐるやうな事はなかつた。彼は「美學」を研究させられた事に對して父親を嘲笑しながら、誰れにも氣のつく程露骨に、政治上の問題や社會上の問題にのみ興味を持つて、非常に極端な議論を吐いてゐた。（彼にとつては其れはもう單に議論ではなかつたのである！）が、それにも拘らず彼は美術や詩や凡ゆる美の表現に心を寄せてゐた……彼は自分でも詩を書いてゐた。彼は自分の詩を書き散らしたノートブックを用心深く隠してゐたが、ペテルブルグにゐる友達の中で、パークリン一人だけは——それも唯彼特有の直覺によつて——さう云ふ物のある事を疑つてゐた。で、ほんの一寸でもそんな詩作——それは許し難い自分の弱點だと思つてゐたので——の事を仄めかされる程、ネツダーノフの氣を悪くするものはなかつた。彼は瑞西人の教師のお蔭で、可なり色々な事を學んだので、辛い仕事を少しも恐れなかつた。稍氣紛れで不規則ではあつたが、自分から熱中して労働もした。彼の友人達は彼を愛してゐた……彼等は彼の卒直な性格と、善良な、純潔な精神とに惹きつけられてゐたのであつた。が、而もネツダーノフは幸運な星の下に生れてゐなかつた。彼の前には容易に生涯の路が開けなかつた。彼は自分で深くこの事を知つて、友人達の敬愛にも拘らず、孤獨の寂びしさに沈んでゐた。

彼は窓際に佇んだまゝ、自分の前に迫つてゐる旅行について、自分の生涯の新らしい、思ひ掛けない變化について、物悲しく寂びしく思ひに耽つてゐた。彼はペテルブルグを去る事を少しも悲しくは思はなかつた——彼にとつて特別に貴重なものは此都には何一つ残つてはゐなかつた、その上又、秋になれば再び歸つて來ることも分つてゐた。それにも拘らず、恐ろしい暗い気持ちに襲はれて、彼は知らず／＼憂鬱に沈んで行つた。

「俺はさぞ立派な教師になるだらう！」彼の胸にはふとこんな考へが浮んで來た。「立派な教師に！」彼は教育上の仕事を求めたことを自分から非難せずにはゐられなかつた。が、かう云ふ非難は正しいものではないのであつた。ネツダーノフは相應に豊かな智識を貯へてゐた、そして變化の多い彼の氣質にも拘らず、子供たちは彼によく馴染むのであつた、彼も子供たちに對しては直きに好きになるのであつた。今ネツダーノフを襲つてゐる憂鬱は、その境涯が變らうとする度毎に、いつも迫り來る感情——凡ての陰鬱な、沈思的な人間にあり勝ちな感情——であつた。それは放膽な、多血質な人々には知られない感情であつた。彼等は單調な生活の條件が破壊されたり、習慣的な周囲の事情が變化したりする時には、寧ろ喜ばしさを感ずる傾向があるからである。ネツダーノフはだん／＼と深く、殆んど無意識的に獨言を云ひ始めたほど、ちつと冥想に沈んでゐた。胸に押し迫つた感情が自から旋

的な調子で鳴り出さないばかりになつてゐた程であつた。

「えゝ、畜生！」と彼は聲高に叫んだ。「俺はもう又詩を作りかけてゐる！」

彼は首を振つて、窓際を離れた。パークリンが卓子の上へ置いて行つた十留紙幣が目に入ると、それを衣兜へ突き込んだ、そして部屋の中を往つたり來つたりし始めた。

「俺は前借をしなければならぬ。」と彼は思つた。「あの紳士がそれを云ひ出して呉れて可かつた。百留……それに兄貴から——公爵から——百留……五十だけ借金の方に……五十か七十を旅費……にそれから残餘はオストロデューモフに。パークリンが置いてつた金は、——一緒にあの男に渡せばいゝさ。それからまだマークロフから幾らか貰へる筈だ。」

彼は頭の中でこんな風に計算してゐたが、その間にさへ前と同じ感情の旋律が再び胸に湧き上つて來た。彼は立停つて想ひに耽つた……彼は遠くの方をちつと見詰めてゐるやうな眼付をして、釘づけにされたやうに立つてゐた。やがて彼の手が摸索するやうに卓の一つの抽出に觸つて、そこを開けた、そして奥の方から何か一ぱい書いてある小さなノートブックを取出した。

彼は椅子に腰を下して、眼を見据ゑたまゝ、ペンを取り上げて、口先で何やら呻吟つたり、時々頭髪を掻き上げたりしながら、吸取紙を當てたり消したりして行から行と書いて行つた。

控室の扉口が半分開けられて、マシユリーナの顔が覗いた。ネツダーノフはそれには気がつかずに、仕事を續けてゐた。マシユリーナは長い間ちつと彼の方を眺めてゐたが、頸づいて後へさがつた……が、ネツダーノフは不意に頭を揚げてあたりを見廻した。そして「おゝ、あなたか！」と狼狽したやうに叫びながら、卓子の抽出へノートブックを投り込んだ。

マシユリーナはしつかりした歩調で部屋の中へ突き進んだ。

「オストロデューモフのお召使ひに來たんです。」と彼女は氣ぜはしく云つた。「何時お金が出来るか聞いて來るやうになつて。若し今日出來るんでしたら、私達は今夜出發しますから。」

「今日は逆も駄目です、明日來て下さい」

「何時に？」

「十二時に。」

「承知いたしました。」

マシユリーナは少しの間黙り込んでゐた。突然彼女はネツダーノフに手を差し出した。

「御邪魔しましたのね——御免なさい。でも、直ぐ彼方へ参りますわ。何時か又お目にかゝれるでせうか？ 且、あなたにお別れが云ひたうございますわ。」

ネツダーフは彼女の冷めたい赤い指を握つた。

「あなたは此處へ來たあの紳士を見たでせう？」と彼は始めた。「僕等は相談が纏つたんです。僕はあの男の家へ家庭教師に行くことになりました。あの男の領地はS——縣の街に近いところにあるんです。」

嬉しうな微笑みがマシユリーナの顔に閃めいた。

「S——に近いんですつて！ では多分又お目にかゝれますわ。私達はあそこへ遣られるかも知れませんから。」とマシユリーナは溜息をついた。「あゝ、アレキセイ・ドミトリヴキツチ……。」

「何です？」とネツダーノフは訊いた。

マシユリーナは一層強くちつと見詰めてゐた。

「何でもありません。では左様なら。何でもありませんのよ。」

もう一度彼女はネツダーノフの手を握つた、そして部屋を出て行つた。

「ペテルブルグ中での……奇妙な女ほど俺の事を思つてくれたものはない！」とネツダーノフは考へた。「だが、何だつてあの女は俺の邪魔をしに來たんだ？……それも俺に對する好意のためなんだろうか！」

次の朝ネッダーノフはシプヤーギンの邸宅へ訊ねて行つた。そして彼は、自由主義の政治家と云はれ現代の名士と云はれるだけの威厳に適はしい、重々しい様式の家具で飾り立てられた堂々とした書齋へ案内されて、大きな書卓の前へ腰を下した。その書卓の上には、決して誰れの後にも立つたことのないやうな色々な定期刊行物が整然と積み重ねてあり、その傍にはまだ何の頁をも切つたことの無い大きな象牙のナイフが置かれてあつた。たつぷり一時間ばかり、彼は自由思想を持つたこの家の主人の言葉に耳傾け、氣の利いた、愛想のいゝ、丁寧な流暢な言葉に聞き惚れてゐた。最後に彼は前金で百留受取つた。そしてそれから十日の後、ネッダーノフはこの同じ聰明な自由主義の政治家であり現代の名士である人と一緒に、汽車の買切りの一等室の天鵝絨の長椅子に半ば身を凭せかけながら、コライエフスキイ鐵道の震動の烈しい線路の上をモスクワへと運ばれて行つた。

五

有名な農業家であり、tooth-puller（歯を挽ぎ取る人、と云ふ意味。自分の農奴に、好んで體刑を與へる地主を指して云ふ。）であつたシプヤーギンの父親に依つて、千八百二十四五年の頃に建てられた、圓柱と希臘式の正面とを持つた大きな石造の家の客間の中で、非常に容色の美しい、シプヤーギ

ンの妻のワレンチーナ・ミハロウナは、電報で先ぶれのあつた夫の到着を今か／＼と待つてゐた。この客間の裝飾には近代的な、洗練された趣味が現はれてゐた。そこにある物は凡てが——印度棉布の愉快な様々な裝飾や雑多な色彩の掛布を始めとして、卓子や飾棚に並べられた色々な種類の支那の陶器も、青銅も、硝子の小さな器物も、玩具も——凡てが美しく魅惑的であつた——凡ての物が開け放された高い窓から自由に流れ込む輝かな五月の日光に和かに調和して美しく融け合つてゐた。Hill-valley（この美しい春の花の大きな花束がそこ此處に白い斑點を描いてゐた）の匂にしつとりとした室内の空氣は、時折り庭園の豊かな若葉の上を靜かに漂つて來る微風につれて仄かにそよいでゐた。

それは美しい一つの畫であつた！そしてこの家の女主人のワレンチーナ・ミハロウナは、この畫を完成した——それに生命と意味とを與へた。彼女は暗い褐色の頭髮と、變化はないが生氣に充ちた顔色と、システイン堂のマドンナを思ひ起させるやうな容貌と、非常に深みのある、和いだ眼付とをもつた、年頃三十格好の丈の高い女であつた。彼女の唇は、どつちかと云へば厚くつて赤味がなく、肩は稍高く手は大きい方であつた……とは云へ、誰れでも彼女を見たものは——彼女がいかにも自由に、靜やかに客間の中を歩き廻はりながら、今花の上へ華奢な、何となく緊つた身體を屈めて、微笑みな

がら、その香氣をかいであるかと思ふと、今度は支那の陶器を置きかへて見たり、鏡の前に立つてその微妙な眼を半ばつぶりながら、房々とした頭髪を、素早く掻きあげたりしてゐる容子を見たものは言葉には出さないまでも、まだこんなにも、魅惑的な女に出會つたことはないと心中に叫ぶに違ひな

51

スコッチの短袴をはいて、脛を露出しにした。九つ位になる、捲毛の頭髪を鏡で縮らして香油を塗つた、可愛らしい男の子が惶たゞしく客間へ駆け込んで来た、そしてワレンチーナ・ミハロウナを見ると不意に立停つた。

「何んです？ コーリヤ。」と彼女は訊いた。彼女の聲はその眼付と同じやうに謙やかに和かであつた。

「母様。」と子供はあたふたと始めた。「叔母さんがねえ……山百合を少し持つて来て下さい……叔母さんのお部屋へ挿すのに……叔母さんのところにはちつとも無いんだから。」

ワレンチーナ・ミハロウナは子供の頭へ手をやつて、香油をつけた小さい頭を仰向かした。

「叔母さんにねえ、花屋へ百合をとりにおやりなさいつて仰しやい……此處にあるのは私のですからね……觸つてはいけませんよ。ちゃんと飾つたのをこわすのは母様は嫌ひだからつて言ふんですよ。その通りに云へますか？」

「ええ、僕云へる……」と子供は呟いた。

「ちや、云つて御覽なれよ。」

「云へますとも……云へますとも……叔母さんに上げるのは厭だからつて。」

ワレンチーナ・ミハロウナは笑聲をたてた。その笑聲も蕭やかであつた。

「そんなお使ひの云ひやうちや役に立ちませんよ。でも、まあ好いから、お前の思つた通り叔母さんに仰つしやよ。」

子供は指輪の幾つも光つてゐる母親の手にせか／＼と接吻して、轉ぶやうに駆け出して行つた。

ワレンチーナ・ミハロウナはその後姿を見送りながら溜息をついた。そして金の針金で編んである鳥籠の方へ歩いて行つた。その籠の中には緑色の鸚鵡が綱へ攀ちのぼつたり、嘴や爪でそつと引つ掻いたりしてゐた。彼女は指先でちよつと鳥にからかつてゐたが、やがて低い長椅子に腰を下して、彫刻のしてある丸卓子から新刊の *Revue des Deux Mondes* (佛蘭西雜誌の名) を取り上げて、頁をめくり始めた。

懐み深い咳拂ひの音がしたので、彼女はあたりを見廻はした。制服を着て白の襟飾をした、身綺麗な一人の家僕が扉口のところに立つてゐた。

「何です？ アガーフォン。」とワレンチーナ・ミハロウナはやつぱり肅やかな聲で訊いた。
 「セミヨン・ペトロヴキツチ・カロミエーツエフがお出でになりました。お通し申しませうか？」
 「あゝ、お通しよ。それからね、マリアンナ・ウイケンツエフナに客間に降りていらつしやいと云つて頂戴。」

ワレンチーナ・ミハロウナは *Revue des Deux mondes* を小さな卓の上へ投げ出して、長椅子に寄りかゝつて、上の方を見上げながら、非常に彼女に似つかはしい思ひ沈んだやうな眼付をした。

向ふの方から年頃三十二三の若いセミヨン・ペトロヴキツチ・カロミエーツエフが、ゆつたりとした無頓着な、のろくさしたやうな容子で部屋へ入つて來たが、彼は不意に謹み深く晴れやかな顔付をして、少し側の方へ點頭をしてから、まるで彈機仕掛けのやうに身體を真直にして、半ば堅苦しい、半ば愛想のいゝ調子で口をきゝながら、恭しくワレンチーナ・ミハロウナの手を取つて、素早く接吻した……かうした凡ての容子から見ると、この訪問客は附近の別荘に住んでゐる普通の地主とか、縣の富豪とか云つた種類の人間ではなく、正しくペテルブルグの土流社會の名士であることは明らかであつた。彼は英國式の最上等な服装をしてゐた。縁に色どりをした白麻の新らしいハンケチの隅が、蘇格蘭絨のジャケットの平つたい横衣兜から三角形に覗いて、單眼鏡が稍幅廣のリボンで、ぶら下つてゐ

て、スエード皮の手套の鈍い蒼白い色が、細い下袴の青味がかつた灰色とよく調和してゐた。カロミエーツエフ氏の頭髮は短く刈り込まれ、顔は滑らかに剃りつけてあつた。間の迫つた小さい眼をもつた何處となく女性的なその顔や、つまみ上げたやうな華奢な鼻や、眞赤な唇やが、育ちの善い貴族でなければ見られないやうな晴れ々とした表情を見せてゐた。それは一體に柔和であつたがそれにも拘らず、若し誰れかゞ、或は何物かゞ、セミヨン・ペトロヴキツチの保守的な、愛國的な宗教的な主義に反對して、少しでも彼の感情を害つた時には、その柔和な表情は忽ち腹立たしげになり、粗暴にさへもなるのであつた。……おゝ！ さう云ふ時には彼は慘酷な人間になるのであつた！ 彼の凡ての優雅なところは忽ちに消え去つて、その優しい眼には凄いやうな輝きが現はれ、その小さい奇麗な唇からは狂暴な言葉が吐き出される……そして、泣くやうな叫び聲をあげて、政府の威嚴に訴へるのであつた！

セミヨン・ペトロヴキツチの血統は單に街の園丁であつた。彼の祖父はコロメンツォフと云ふ名前に依つてその地方の（モスクワ地方のコロムナ）出身である事が分つてゐた……が、彼の祖父は自分の名をコロメーツエフと改めたのであつた。彼の父親はそれをカロメーツエフと署名してゐたが、最後にセミヨン・ペトロヴキツチはそれに「と云ふ字を挿んだ、そして全然眞面目に自分を純粹な貴族

の血統をひいた人間だと考てゐた。自分の血統は三十年戦争の時埃太利軍の司令長官であつたガレンマイエル男爵から出てゐるのだとさへ思つてゐた。セミヨン・ペトロウキッチは宮内官で、待従職の稱號を持つてゐた。その教養、その世間的智識、貴婦人社會に於けるその勢力、その容貌風采、凡ての點から云つて彼は外交官に適した人間であつたが、彼の愛國主義のためにその方面に入ることを妨げられてゐた……mais quitter la Russie jamais! (露西亞を見棄てることが出来ない! どうしても!) と彼はよく斯う云つてゐた。カロミエーツエフは可なり財産もあれば、色々な手藝もあつた。ペテルブルグの官吏仲間の首領の一人である有名な公爵の批評に依れば——En peu trop fœdral dans ses opinions——(彼の意見は多少中世紀的ではあるが)彼は信頼に價する献身的人物として持て囃されてゐた。彼は自分の財産を整理するために、詰り「威嚇したり搾り取つたりする」ために、二箇月間の休暇をとつて、縣へ来てゐたのであつた。勿論、さう云ふ事でもしなければ外には何にもすることが無いのであつた。

「多分もうボリス・アンドレーキッチにお目にかゝれる事と思つて上りました。」と彼は肅やかに足を片方づゝ爪立てゝ揺すりながら、高貴な人々がするやうな容子を模倣して不意に流し目を使つて始めた。

ワレンチーナ・ミハロウナはちよつと顔をしかめた。

「さうで無ければあなたはいらつしやらないお心算でしたの?」

カロミエーツエフはワレンチーナ・ミハロウナのこの言葉を如何にも不當な法外な問ひだと思つたらしい容子で後へ跳び下つた。

「ワレンチーナ・ミハロウナと!」彼は叫んだ。「あゝ、あなたは如何してそんな風に……!」

「まあ、お掛け下さいまし。ボリス・アンドレーキッチはもう直きに着きますでせう。停車場へは迎へへの馬車をやつてあるんです。少し待つてゐらして下さい……きつと直ぐまわりますわ。いま何時ですか?」

「二時半です。」とカロミエーツエフは胴衣の衣兜からエナメルで裝飾した金時計を出して見ながら答へた。彼はシプヤーギン夫人にその時計を見せた。

「まだこの時計をあなたに御覽に入れませんでしたね? これはあのミハイル……御存じでせう、セルビアの公爵の……オペレーノヅキツチから贈つて呉れた物なのです。私達は非常に親しくして居るのです。よく一緒に狩獵に出かけたものでした。非常に偉い人間ですよ! 一方の首領となるべき手腕家です。下らない事には決して關係しませんからね! えゝ、決して!」

カロミエーツエフは安樂椅子に腰を下し、脚を組み合せて、左の手套をゆつくりと脱ぎはじめた。
 「このS縣にたつた一人でもあのミハイルのやうな人間がゐてくれましたら！」
 「何故ですか？ 何かお氣に入らないことでもありますか？」
 カロミエーツエフは眉毛の間に皺を寄せた。

「え、この縣のゼムストウオ（露西亞の制度なる地方會議）と云つたら如何です！ あのゼムストウオは！ あれで何の役に立つてせう？ 唯行政を墮落させて……餘計な考へを起させたり……（カロミエーツエフは手套の壓迫を逃れて露出した左の手を振つた）無様な期待を持たせたりするだけです。（カロミエーツエフは手に息をかけた。）此事については私はベテルブルグでも議論したんですが……mais bah（何にもなりやしません）です。今ではあの街の風潮が變つてますからね。まあ、考へて御覽なさい……あなたの御良人さへ！ 勿論あの方は有名な自由主義ですが！」

シプヤーギン夫人は長椅子へ眞直に座り直した。

「何ですつて？ カロミエーツエフさん、あなたは政府の反對黨ですか？」

「私が？ 反對黨？ どう致しまして、決してそんな事はありません。 mais j'ai en n franc parler.（けれ共、明らかに云ひますと）私は時々批評はしますが、常に服従してゐます。」

「そして私はそれと反對ですわ、私は批評もしなければ服従もしません。」

Ah ! mais c'est un mot !（あ、併しそれは唯言葉の上だけの事です）あなたがお許し下さるなら、そのお言葉を私の友達のラディスラス……vous savez（御存じでせう）……あの男に聞かしてやりませう。あの男は今社會小説を書いてゐるんです。私はもう何章か読んで聞かされました。あの男はさぞ喜ぶでせう。 Nous aurons enfin le grand mot de russe peint par lui-même.（あの男の筆に依つて初めて偉大な露西亞が描寫されるでせう。）

「それは何に掲載されるんですか？」

「勿論『露西亞の先驅者』へ掲げるでせう。あの雑誌は我々の Revue des Deux mondes です。あなたはさつき読んでいらつしやいましたね。」

「え、でもあの雑誌はだん／＼面白くなくなりますのね？」

「恐らく、恐らく……左様です、『露西亞の先驅者』は恐らく——現代の言葉で云ひますと——此頃は一寸轡が緩んでゐるやうです。」

カロミエーツエフは愉快さうに笑つた。彼は「轡が緩んだ」と云つたのを、「一寸」と云つたのさへも巧い云ひ方だつたと思つたのであつた。

「mais c'est un journal qui se res este」(けれ共兎に角尊敬すべき雑誌です)と彼は續けた。「そして其れが一ばん貴い事なのです。私は、私は明らさまに云ひますと、露西亞文學に對して少しも興味を感じないので、今の作品には實にも野卑な人間ばかりが描かれてゐますからね。主人公に選ばれてゐる人間と云つたら、料理人です、下等な料理人です、Parole d'omnium! (誓つて)けれ共ラヂイラスの小説は是非讀まなければなりません。Il y aura le petit mot pour lui……噴飯させるやうな事なんぞ少しも書いてありません。それにその傾向と云つたら! 虚無主義者共を架刑にしてしまひますよ。私はラヂイラスの問題の取り方から推して、かう斷言することが出来ます。」

「あの方の過去の物から考へると、それな事は無さうですがねえ。」とシブヤーギン夫人は指摘した。「Ah! j'etons un voile sur les erreurs de sa jeunesse! (おゝ、彼の青年時代の失敗に掛布を掩ひかけよ。)」とカロミエーツエフは叫びながら、右の手套を脱いだ。

ワレンチーナ・ミハロウナは再びそつと臉をしば叩いた。彼女はその美しい眼を巫山戯けたやうにばち／＼させる癖があつた。

「セミヨン・ペトロヴキツチ。」と彼女は云つた。「あなたは露西語を使つていらつしやるのに、どうして其様なに澤山佛蘭西語を入れるになるんですの? 何だかもう……失禮ですけれど時代遅れのやうな氣

がいたしますわ。」

「どうしてです? 何故です? それは、自分の國の言葉を、あなたのやうに完全に操つることは、誰れにも出来ないからです。私としては、露西亞語は法令に依つて定められた自分の國の言葉だと思つてゐます、その純粹さを讚美してゐます。私はカラムーチンを尊敬してゐます!……けれ共露西亞語には、云はゞ日常語とも云ふべき……言語があるでせうか? 例へば de tout a l'heur. (今しがた云ひました) あの C'est un mot! と云ふ感動的な言葉などは、どうして露西亞語で云ひ表はすことが出来ませう!……え?」

「さう、巧い言葉ですわね。」
カルミエーツエフは笑つた。

「巧い言葉ですつて! ワレンチーナ・ミハロウナ! けれ共何となく香氣の失はれてしまつた……術學的な調子があるやうにはお思ひになりませんか……!」

「えゝ、私はやつぱり左様は思ひません。それにはさうと、マリアンナは如何したんでせう?」と彼女は呼鈴を鳴らした。子供の家僕が入つて來た。

「マリアンナ・ウイケンツエウナに客間へいらつしやいつて云つて上げたのに、あの人にさう云はな

かつたんぢやないの？」

家僕がそれに答へやうとしてゐると、そこへ彼の背後からふはりとした黒の寢衣を着た、頭髮を短く切つた若い娘が扉口へ姿を現はした。それはシプヤーギンの母方の姪マリアンナ・ウイケンツエウナであつた。

六

「御免なさい、ワレンチーナ・ミハロウナ。」と彼女はシプヤーギン夫人の方へ進みながら云つた。「私忙しかつたものですから遅くなりました。」

それから彼女はカロミエーツエフに點頭をして、少し側の方へ寄つて、鸚鵡の傍の小さい櫛椅子に腰を下した。鸚鵡は彼女を見るや否やその方へ首を伸ばして、羽をばた／＼やり始めた。

「何故そんなに離れてお座りになるの、マリアンナ。」と櫛椅子のところを見やりながらシプヤーギン夫人が云つた。「あなたの小さいお友達の傍にいらつしやりたいの？　ねえ、セミヨン・ペトロヴキツチ」と彼女はカロミエーツエフへ振向いた。「あの鸚鵡はマリアンナとそりや仲善しなんですよ」

「そりや不思議はありませんね！」

「そして私を酷く厭つてゐるんですよ。」

「それは妙ですね！　あなたはきつとお慮めになるんでせう？」

「いゝえ、慮めるどころですか、私は始終お砂糖をやるんですよ、でも、私の手からはちつとも取らないんですよ……いゝえ、それは同情と反感とのためなんです。」

マリアンナは臉の下からシプヤーギン夫人をちらりと見た……シプヤーギン夫人もマリアンナをちらりと見た。

この二人の婦人はお互ひに嫌ひ合つてゐた。マリアンナはこの叔母に較べると、殆んど「卑賤な身分の者」と云はれても仕方がない位であつた。彼女は圓々とした顔と、大きな釣鼻と、大きな澄んだ灰色の眼と、薄い眉毛と薄い唇とを持つてゐた。彼女はふさ／＼とした濃い褐色の頭髮を短く切つてゐた、不愛想な表情をしてゐた。が、一體の容子に何處か強い、大膽な、活氣に充ちた、情熱的なところがあつた。彼女の足と手とは細そりとしてゐた。強さうに肉づけられてゐてしなやかな小さい身體付は十六世紀のフロレンスの彫像を思ひ起させた。彼女の動作は軽快で肅やかであつた。

シプヤーギン家に於けるマリアンナの地位はかなり厄介なものであつた。半分波蘭人の血統をひいてゐた彼女の父は、非常に聰明な、元氣旺盛な人で、將軍の地位まで昇つてゐたが、政府に對する

或る大きな陰謀が曝露した爲めに、突然破滅の境涯に落ち込んで、裁判に廻され……刑の宣告をうけて、官位も爵位も剝奪された上、シベリアへ送られたのであつた。その後彼は放免になつて歸つて來たが……再び元の地位を得ることは成功しなかつた、そして非常な窮迫の中に死んでしまつた。シプヤーギンの妹で、マリアンナの母親（彼女は他に子供がなかつた）ある彼の妻は、彼女の凡ての繁榮を滅ぼした打撃に堪えられないで、間もなく亡夫の後を追つてしまつた。で、シプヤーギンは自分の姪を家に引取つて養ふことにしたのであつた。が、彼女は他人の家に寄食してゐることを苦に病んでゐた。彼女は自分の頑固な性質から懸命になつて早く自由な人間にならうと努めてゐた。斯うして彼女と彼女の叔母との間には絶えず暗闘が續けられてゐるのであつた。シプヤーギン夫人は彼女を虚無主義者で無神論者だと思つてゐた。マリアンナの方では又、シプヤーギン夫人を無自覺な壓制家として憎んでゐた。彼女は他の凡ての人々に對すると同様に、自分の叔父をも避けてゐた。が、彼女は單に彼等を避けてゐたので、彼等を恐れてゐたのではなかつた。彼女は少しも臆病な性質を持つてゐなかつた。

「反感。」とカロミエーツエフは繰返した。「さう、反感と云ふ奴は妙なものですよ。私を例にして云ふと、私は誰れも知つてゐるやうに、信仰の深い人間で、字義通りの Orthodox（正教信者）です、然るに

坊さん達のあの垂れ下つた捲髪——あの蠶のやうな奴——を私はとても平氣で見ではゐられないので、胸がむか／＼するやうな氣がして來るんです。」

そしてカロミエーツエフは幾度も握り拳を振つて、いかにも胸が悪くなるやうな容子を見せやうとした。

「一體に頭髮といふものがあなたにはお氣に觸るものと見えますわね、セミヨン・ペトロヴキッチ。」とマリアンナは云ひ出した。「あなたはきつと、私のやうに頭髮を短く切つてゐる者は誰れでも平氣で見えていらつしやれないんでせう。」

シプヤーギン夫人はそつと眉をあげて、今の若い娘はどうしてこんなに自由な、氣輕な調子で會話の仲間入りが出来るのかと驚いたやうに頭を振つた。カロミエーツエフの方は恐縮したやうなお世辞笑ひをした。

「勿論。」と彼は答へた。「私はあなたのやうな美しい捲髪を慘酷な鉄で切り落して了ふと云ふ事には悲しみを感ずるばかりですよ、マリアンナ・ウイケンツエウナ。私は反感を持つどころか、或る場合には……あなたのその例は……私を *preelyi*ied とせる（改宗させる）かも知れませんよ。」

カロミエーツエフは巧い露西亞語が思ひ出せず、又女主人の注意をうけてから佛蘭西語を使ひたく

なかつたので、仕方なしにおづ／＼と英語でかう云つた。

「それでも仕合せなことには、マリアンナさんは未だ眼鏡をかけておませんわ。」とシプヤーギン夫人は口を押んだ。「それから自然科学や婦人問題まで研究していらつしやりながら、カフスと堅襟をしていらつしやらないのが、本統に残念ですわ……ねえ、マリアンナ。」

こんな言葉はマリアンナを狼狽させるつもりで言はれたのであつた、が、彼女は少しも狼狽しなかつた。

「え、左様ですわ、叔母さん。」と彼女は答へた。「私は婦人問題について書いてあるものはみんな読みましたわ。この問題をはつきりと理解しやうと思つてゐるんです。」

「年が若いからですわね。」とシプヤーギン夫人はカロミエーツエフを振向いた。「あなたや私はもう其様な問題には一向用がありませんわ——ねえ？」

カロミエーツエフは困惑ですと云はぬばかりに微笑んだ。彼はこの夫人の冗談には調子を合はさすにはゐられないのであつた。

「マリアンナ・ウイケンツエウナは。」と彼は始めた。「理想主義に……青春期のロオマンチズムに浸つていらつしやるのです……若い時分には詰り……」

「でも私は自分で自分を嘲笑つてゐるんですのね。」とシプヤーギン夫人は満つた。「私もさう云ふ問題に興味は持つて居りますわ、私だつてまだ其れ程老ひ込んだわけではないんですもの。」

「そして私もさう云ふ問題に興味は持つてゐるのです。」とカロミエーツエフは急いで叫んだ。「が、唯私は口に出して議論することを抑へてゐるだけです。」

「何故議論なさるのを控へていらつしやるんです？」とマリアンナは問ひ返した。

「何故と云つて、私は公衆に向つて斯う云ひますね！ 私は諸君がそれに興味を寄せることは妨げないけれ共、口に出して議論することは……叱つ！——と彼は唇に指をあてた——「兎に角、雑誌なんぞに議論をのせることは——私は絶対に禁じてしまいたいのです！」

シプヤーギン夫人は聲を出して笑つた。

「ぢや、あなたはその問題を解決するために官省へ委員をお出しになると言うごさいますわ、何故お出しになりませんの？」

「何故委員を出さないかですつて？ あなたは我々があの貧乏文士共……自分達の鼻の先しか見えない辭に、自分では第一流の天才か何かのつもりである、あの腹の空つた貧乏文士共と同じやうに下らなく問題を解決するだらうと思ひになるんですか？ それなら我々はボリス・アンドレーヴキツチ

を委員長に指命するにしませう。」

シプヤーギン夫人は前よりも一層聲をあげて笑つた。

「御用心なさい、ボリス・アンドレーヴキツチは、どうかすると大へんなジャコピン黨になりますから——。」

「ジャツコー・ジャツコー・ジャツコー。」と鸚鵡が鳴いた。

ワレンチーナ・ミハロウナは鳥に向つてハンケチを振つた。

「話のお邪魔をするんじゃないやありませんよ……マリアンナ、叱つて頂戴。」

マリアンナが籠の方を向くと、鸚鵡が直ぐに首を出したので、その頭を搔いてやり始めた。

「ええ。」とシプヤーギン夫人は續けた。「ボリス・アンドレーヴウツチは時々私を驚駭させますのよ。

あの人の頭の中には何ですか……演壇みたいなのがあるんです。」

「*C'est parce qu'il est orateur!* (それはあの方、雄辯家だからです)」とカロミエーツエフは興奮して佛蘭西語で遮つた。「あなたの御良人は他の者の持たない辯舌の才能を持つてらしやるし、始終喝采されていらつしやるからです…… *ses Propriétés Paro's Je suis ni!* (あの人は御自分の言葉に酔つていらつしやるのです)……それに又一般の人氣を求めていらつしやるからです……ですが、此頃は少しさう

云ふ方面から遠退いていらつしやるぢやありませんか? *I bande!* (お氣に入らない事でもあるのですか)……え?」

シプヤーギン夫人はマリアンナの方をちらりと見た。

「私は何にも氣が付きません。」と彼女は一寸黙つた後で云つた。

「さう。」とカロミエーツエフは思ひ沈んだ調子で續けた。「復活祭の時彼等に睨まれましたからね。」

シプヤーギン夫人はもう一度マリアンナ方を意味ありげにちらりと見た。

カロミエーツエフは微笑んで「解りました。」と云つた風に顔をしかめた。

「マリアンナ・ウイケンツエウナ!」と彼は必要以上に高い聲で叫んだ。「あなたは今年もまた學校へ敬へに出るおつもりですか?」

マリアンナは籠の方から向き直つた。

「それが又あなたに何の關係がございますの? セミヨン・ペトロヴキツチ。」

「勿論、非常な關係があるのです。」

「あなたはそれを禁止なさるおつもりぢや無いでせうね?」

「私は虚無主義者には學校について考慮することをも禁止するつもりです。けれ共、牧師の指導と牧

師の監督の下に、私自身で學校を建てやうと思つてゐます。」

「本當に？ でも、私は今年如何するか自分でもまだ分りません。去年すつかり失敗しましたし、それに夏の間は學校がありませんから。」

マリアンナは斯う云ひながら、だん／＼顔色を暗くした、さながら無理に努めて口を利いて、やつと續けてゐたかのやうに。彼女は極めて amour-propre (自尊心) が強かつたからであつた。

「あなたはまだ充分に準備が出来てゐないでせう。」とシプヤーギン夫人は聲に冷笑的な調子をもたせて訊いた。

「えゝ多分。」

「これは如何も！」とカロミエーツエフは再び叫んだ。「驚きましたね！ あの百姓共の小娘にABCを教へるのに準備が要るんですか？」

が、その瞬間コーリヤが客間へ駆け込んで来た「母様、母様、父さまがいらした！」と金切聲を揚げた。そして彼の背後から、帽子を被つて黄色い肩掛を捲きつけた、頭髮の灰色な婦人が太つた小さい足を踏くやうに運びながら入つて来て、ボリスがもう直ぐ此處へ來ると告げた。この婦人は名前をアンナ・ザハロウナと云ふ、シプヤーギンの叔母であつた。客間にゐた人々はみんな自分の席から跳

び立つて、控室の方へ驕出した。そして其處から、大玄關へと降りて行つた。刈り込まれた樅の樹の長い並木が往來から眞直にこの入口へついでゐた。四頭曳の馬車はもうその並木路を進んで來た。ワレンチーナ・ミハロウナは、みんなの一ばん前に立ちながらハンケチを振つた。コーリヤは金切聲を揚げて叫んだ。馭者は氣勢立つてる馬を巧みに入口の階段の前で停めた。馬丁は慌て、馭者臺から飛び下りて、鍵や蝶番がらぎれるかと思ふほど一ばいに馬車の扉を開けた。と、唇にも眼にも、顔全體に愛想のいゝ微笑みを浮べて、いかにも緩たりとした容子で外套をはねのけながらボリス・アンドレーヴキッチが、軽く飛び下りた。ワレンチーナ・ミハロウナは素早く肅やかに彼の頭へ兩腕を投げかけて、三、彼を接吻した。コーリヤは足をばた／＼やりながら、父親の外套の裾をひつ張つた……が、彼はまづ不愉快な厭なスコッチの旅行帽子を脱いで、一ばん先へアンナ・ザハロウナに接吻し、次にマリアンナに、それから同じやうに階段まで出迎へてゐたカロミエーツエフに接吻した。(彼はまるで呼鈴の綱でもひつ張るやうに手を上下に動かして、力を籠めた英國式の握手をカロミエーツエフに與へた。)そしてやつと息子の方を向いて、兩腕で抱き上げながら自分の顔へ接吻さした。

かう云ふ事が行はれてゐる間に、ネツダーノフはまるで罪でも犯した人のやうにこつそりと馬車から下りて帽子も脱がずに、額越しにちら／＼眺めながら、前の方の車輪の傍に突立つてゐた……ワレ

ンチーナ・ミハロウナは夫を抱擁した時、夫の肩越しにこの新來者の姿を鋭く一瞥した。自分と一緒に家庭教師を連れて行くこと、シプヤーギンが豫じめ知らして置いたのであつた。

一同のものは新しく歸つて來た主人と猶挨拶したり握手を交はしたりしながら階段をあがつて行つた。階段の兩側には重立つた家僕や下婢たちがずらりと居並んでゐた。彼等はすつと前から「東洋風の習慣」が履かれてゐたので、一々主人の手を接吻しに進み出るやうな事はせず、唯恭しく頭を下げた。シプヤーギンは頷ぐくと云ふよりは寧ろ鼻を額の動作で彼等の敬禮に答へた。

ネヅダーノフも靜かに廣い階段を昇つた。彼が控室へ入ると直ぐ、早くも彼を探してゐたシプヤーギンは自分の妻とアンナ・ザハロウナと、マリアンナとに彼を紹介した、そしてコーリヤに向つて「この方はお前の先生だよ、これから先生の仰しやることをよく聽かなければ可けない！ さあ先生に手をお上げなさい！」と云つた。コーリヤはおづ／＼とネヅダーノフに手を差出してちつと彼を見詰めてゐたが、この先生の容子に何にも珍らしいところも面白いところも看付からなかつたので、再び自分の「父さん」に絡みついた。ネヅダーノフは、あの劇場の時と同じやうな困惑を感じた。彼は古ぼけた、可なり見すばらしい大外套を着てゐた。顔と手とは旅の塵埃に汚れてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナは彼に向つて何か愛想を云つたが、彼にはよく聽きとれなかつたので、何とも答へなかつた。

彼は唯彼女が一種特別に晴れやかな愛情の籠つた眼付で夫を見詰めながら夫に寄り添つてゐるのに氣がついた許りであつた。彼はコーリヤの頭髮が饅で縮らして、香油がつけてあるのを好かなかつた。カロミエーツエフを見ると、彼は「何て氣觸な小ましやくれた奴だらう！」と思つた。そして他の者には何の注意も拂はなかつた。シプヤーギンは、さながら自分の家族の神々を見廻はしでもするやうに、その長い垂れ下つた頬鬚や少し小さい圓い頭がいかにも嚴然と立派に見えた程重々しい容子で二度あたりを見廻はした。やがて彼は少しも旅の疲勞を現はしてゐない、力強い、よく透る聲で家僕の一人を呼んだ。「イワン！ この方を「緑色の部屋」へお連れして、この方の荷物をあすこへ運ぶやうに。」そしてネヅダーノフに向つて、もう休んでくれるやうに、そして荷物をといて、すつかり整頓しできつちり五時に食事に出るやうにと云つた。ネヅダーノフは點頭をして、それからイワンの後について、「二階にある「緑色の部屋」へ行つた。

一同のものは客間へ入つた。挨拶の言葉がもう一度繰返された。半分目の見えなくなつた年寄りの乳母が畏る／＼部屋へ入つて來た。年寄りだからと云ふので、彼女はシプヤーギンの手に接吻することを許された。間もなくシプヤーギンはカロミエーツエフに許しを乞ふて、夫人に待たれながら自分の部屋へ退いた。

ネッダーノフが家僕に導かれて行つた廣い氣持のいゝ部屋は庭園に向つてゐた。窓が開け放してあつて、軽いそよ／＼風が白く窓帷を微かに揺つてゐた。窓帷は上へあがつたり元のやうに下つたりしながら、船の帆のやうにふくらんでゐた。黄金色の日光がしづかに床へさし込んで、部屋一ぱいに新鮮な、しつとりした春の空氣が漲つてゐた。ネッダーノフは家僕が出て行つて了ふと、荷物をといて顔を洗つたり服を着換へたりした。旅はすつかり彼を疲労さしてしまつた。丸二日間まだよく知らない男と一緒に様々な無駄話をしてゐたので、ひどく神経が疲れてしまつた。懶さともつかず腹立たしさうともつかない、何となく惱ましい思ひが、それともなく心中に蟠まつてゐた。彼は自分の氣弱さに腹を立つた。が、彼の心はやつぱり滅入つてゐた。

ネッダーノフは窓際へ行つて庭園を眺めはじめた。それはモスクワ附近では逆も見られない黒土の肥えてゐる非常に古さびた庭園であつた。傾斜の長い丘の上にあつて、四つの廓然とした區分から成り立つてゐた。家の前面には二百歩ばかり向ふまで花園が擴がつてゐて、砂を敷いた眞直な小徑があり、アカシヤやライラックの茂みがあり、圓形の花壇などが出來てゐた。左手の方は、既に圍ひのあ

る處を通つて、眞直ぐに穀打場のある方へ降りたあたりには果樹園があつて、林檎や梨や梅の樹の小ぢんまりとした列があり、スグリ畑や苺畑が作つてあつた。家の眞後ろの方には丈の高い菩提樹の並木があつて、こんもりとした方形の庭を造つてゐた。右手の方の展望は道路に劃られて、その兩側に立つた白楊の並木で遮られてゐた。垂れ下つた樺の樹の樹立の向ふには温室の圓い屋根が見えた。庭園一帯が早春の若芽の軟かな緑に掩はれてゐた。そこでは未だ羽蟲共の騒がしい夏の唸り聲はしなかつた。若葉がこそ／＼と囁いて、鶉がそこ此處に歌つてゐた。一つ樹の上で二羽の鳩が絶えず鳴き交はし、寂びしげな郭公が聲のするたんびに場所を變へながら啼いてゐた。そして遙か向ふの水車場の方からは、白嘴鳥の鳴きつれてゐる聲が、木の心棒をもつた車輪が幾つとなく軋んでゐるやうに聞えて來た。かうした凡ての新鮮な、浮世離れした、平和な生活の上を、白い雲が大きな懶げな鳥のやうに喘ぎながら靜かに漂つてゐた。ネッダーノフはちつと眺め入つて、ちつと聽き入つて、半ば開けてゐた冷えきつた唇を透して大氣を呼吸した。

そして彼の心はだん／＼と軽くなつて來た。平靜な感じが胸を浸して行つた。

かう云ふ間に階下の寢室では、ネッダーノフの話が出てゐた。シプヤーンは彼と知己になつた譯や、G公爵から聞いた彼の身の上や、旅行中にした議論のことやを妻に話して「頭のいゝ男だ！」と

彼は繰返した。「なか／＼學問もある。確かに過激な革命論者だが、私はそんな事は少しも構はないからぬ。兎に角あゝ云ふ青年には抱負があつて好い。それにコーリヤはまだ小さいから何にも詰らん感化はうけやせん。」

ワレンチーナ・ミハロウナは夫の話してゐる事が多少奇怪な併し面白い笑談事でもあるかのやうに愛情と同時に冷笑を見せた微笑みを浮べながら、ちつと耳傾けてゐた。彼女の *deigneur et matre* (夫君) が、非常に堅實な人間であり、非常に重要な官職の人でありながら、今でも二十代の青年のやうに突拍子もない悪巫山戯をやり出す事の出来るのが、彼女にはこの上もなく嬉しかったのであつた。シプヤーギンは眞白なシャツに青い絹の下袴釣をして鏡の前に立ちながら、二つの刷毛で英國風に頭髮を梳きはじめた。その間にワレンチーナ・ミハロウナは土耳古式の低い長椅子の上で小さい靴を身體の下へひつ込ませながら、領地の事や、効果のあがつて來ない製紙工場の事や、暇を出さうと思つてゐる料理人の事や、教會の壁の剝げ落ちた事や、マリアンナの事や、カロミエーツエフの事や……様々な出来事をそれから其れへと話し出した。

この夫妻の間には眞實な融和と信頼の情とがあつた。二人は自分達がすつと以前から云つてゐたやうに眞に「愛と善き結合」の中に生活してゐるのであつた。シプヤーギンは身仕舞ひを終ると、まる

で騎士のやうな容子でワレンチーナ・ミハロウナに「彼女の小さな手を求めた。彼女が彼の方へ兩手を差出して、彼が交はる／＼それに接吻してゐる容子を物優しく誇らしげに眺めた時には、「二人の顔には美しい純粹な感情が現はれた、勿論それは彼女の方ではラファエルの描いたやうな眼の中に輝き彼の方では一高等文官の凡庸な「覗き窓」の中に輝いたのではあつたが。

かつきり五時にネツダーノフは食事に下りて行つた。それは呼鈴が使はれずに、支那の銅鑼のぼん／＼云ふ呻吟るやうな音で知らされるのであつた。一同のものは既に食堂に集まつてゐた。シプヤーギンは高い襟飾の上の方からもう一度丁寧に彼に挨拶して、アンナ・ザハロウナとコーリヤとの間に彼の食卓の席を指定した。アンナ・ザハロウナは、シプヤーギンの亡き父の妹である婆さんであつた。彼女は藏ひ込んであつた服のやうに樟腦の匂をさせてゐた、そして憂はしげな減入つたやうな容子をしてゐた。この家庭に於ける彼女の地位はコーリヤの乳母でもあり家庭教師でもあると云つた具合であつた。それ故ボツターノフが彼女と彼女の小さい教兒との間に坐つたのを見ると、彼女の皺だらけの顔には不快さうな色が現はれた。コーリヤは自分の新らしい隣人を横目でちら／＼眺めてゐた。敏感なこの少年は、自分の先生の落ちつかないでおづ／＼してゐるのを直ぐに見て取つた。彼の先生は眼を揚げやうとせず、録に物を食べずにゐるのであつた。コーリヤは今迄自分の先生はきつと意地

の悪い嚴格な人に違ひないと怖れてゐたので、この容子を見ると嬉しがつてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナもネツダーノフをちら／＼眺めてゐた。

「あの人はまるで學生みたいだ。」と彼女は思った。「そして世間見ずらしい。でも、面白い顔付をしてゐるし、頭髪の色は、昔の伊太利の偉大な畫家がきまつて頭髪を赤い色に描いた使徒のやうだわ。それに手を綺麗にしてゐるわ。」

他の人達もやつぱりネツダーノフをちら／＼眺めてゐた、そして彼を氣の毒がつて、まあ彼には構はずに置かうと云つた風にしてゐた。彼はそれを知つて、喜んでゐた。が、同時に、何と云ふ事もなく腹立たしく思つてゐた。食卓の話はカロミエーツエフとシプヤーギンとで絶えず持ちきつてゐた。彼等はゼムストウオ（地方會議）や、知事や、街道の通行税や、贖罪課税や、ペテルブルグとモスクワの友人達の事や、此頃公開されたカトコフの學校の事や、勞働者を得ることの困難や、家畜に關する損害賠償や、それから又ビスマークや、千八百六十六年の戦争や、カロミエーツフが「偉い人物」と云つてゐたナポレオン三世などについて話してゐた。若い「待從官」は非常に退歩的な意見を述べた。彼はお終には明らかに笑談にであるが——或る誕生日祝ひの宴會で、彼の友達の或る紳士が祝福に云つた言葉まで持ち出した。

「私は自分の承認する主義のためにのみ杯を掲げる、笞刑と棒杖のために！」その地主は赤くなつて叫んだと云ふのであつた。

ワレンチーナ・ミハロウナは、顔をしかめて、その引用語は *de tr's mauvais gout*（非常に悪い趣味）だと注意した。シプヤーギンは彼とは反對に、極めて放散的な意見を述べた。彼は穏やかに、多少無頓着にカロミエーツエフに反對して、幾らか彼を揶揄氣味であつた。

「農奴解放についての君の議論はね、セミヨン・ペトロヴキツチ。」と女は口を挿んだ。「我々の尊敬すべき友人アレキセイ・イワニキツチ・ツウエニチノフが千八百六十年に提出した建白書を僕に思ひ起させる。あの男は、ペテルブルグの方々の客間でそれを朗讀したものだ、その建白書の中に、恐らく解放された百姓達は手に松明をもつて全國到處に漂泊するだらう、と云ふ事を優い一種特別な素晴らしい文章があつた。君はあの善良なアレキセイ・イワニキツチが、頬をふくらして、眼を見張つて、子供のやうな口から「松明！ 松明！ 彼は手に松明を持つて彷徨するだらう？」と叫んだ時の容子を見たことがあるだらう。ところで農奴解放は既に行はれた……何處に松明を持った百姓がゐるかね？」

「ツウエリチノフは。」とカロミエーツエフは陰鬱な調子で答へた。「松明を待つて歩き廻るのが百姓で

はなくつてもつと他の人間だと云ふ事を見損つてゐただけさ。」

この言葉を聞くと、今迄一度もマリアンナ彼女は同ふの對角線になつた隅のところ坐つてゐた、
——の方を見なかつたネツダーノフは、不意に彼女と眼を見合はした、そして彼等は——この不愛想
な娘と彼とは……同じ信念を持つて、同じ戦線に立つてゐるのだと云ふことを直ぐに感じた。シプヤ
ーギンが彼女を紹介した時には、彼は彼女から何の印象をもうけなかつた。が、今不意に彼女と眼を
見合はしたのは何故だらう？ 同時に又彼は自分に向つて斯う訊いた、かうした議論を聞きながら何
の反對をもしないと云ふことは、自分が沈黙を守つてゐることに依つて、自分も同じやうに信じてゐ
るからだと彼等に思はせる理由を與へると云ふことは、自分にとつて耻づべきことではないか、不快
なことではないか？ 再びネツダーノフはマリアンナと眼を見合せた。そして彼女の眼付の中に自分
の疑問に對する答へを讀んだやうな氣がした。「一寸お待ちなさい。」とその眼付が云つてゐるやうに思
はれた。「今はその時ではありません……それだけの値打ちはありません……もつと後になつて……何
時までも云へる時がありますわ……」

彼女が自分を理解してくれたと思ふと、彼には嬉しかつた。彼は再び話に耳傾けた……ワレンチー
ナ・ミハロウナは夫の話を引き取つて、夫よりも一層自由な過激な議論を吐いてゐた。彼女にはどうし

ても分らなかつた、まだ年の若い、教養のある人間が、そうした古臭い因習主義にどうして同意する
ことが出来るのか、それが如何しても分らなかつた！

「でも、あなたはきつと」と彼女はつけ加へた「逆語のつもりであんな事を仰しやつたんでせう！
あなたの方は、アレキセイ・ドミートリキッチ。」と彼女は慇懃な微笑みを浮べてネツダーノフを振向い
た。(ネツダーノフは彼女が自分の名前と父稱とを知つてゐるのを心中に驚いた。)「セミヨン・ペトロヴ
キッチのお考へとは御意見が異なりますわね。ポリースがあなたの旅行中の御話を、聞かしてくれまし
た。」

ネツダーノフは頰を赧くして、皿の上へ面をうつむけながら、一言三言何か口の中で呟いた。彼は
臆病なではなかつたが、かう云ふ貴族の人々と會話を取り交はすことを馴れてゐなかつたのであつ
た。シプヤーギン夫人は猶彼に微笑みかけてゐた。彼女の夫は加勢でもするやうな調子で、彼女に同
意した……が、カロミエーツエフは落着き拂つて鼻と眉の間に圓い單眼鏡を持つて行つて、彼の見解
と「意見を異にする」この學生をちつと見詰めた。が、斯様な仕草に依つてネツダーノフを狼狽させる
ことは困難であつた。それ所かこの學生は直ぐに頭を揚げて、今度は彼の方からこの洒落者の官吏を
ちつと見詰めた。そして突然マリアンナを自分の仲間だと感じたと同様に、カロミエーツエフを敵だ

と感じた！ カロミエーツエフも其れと気がついて、單眼鏡を下して、側の方を向いて、何か笑談を云はうとした……が、何にも云ひ出せなかつた。密かに彼を崇拜してゐたアンナ・ザハロウナだけは心中に彼の味方をした、そしてコーリヤから彼女を引離さうとしてゐる忌々しい隣人に對して前よりも一層嫌惡を感じてゐた。

間もなく食事はお終ひになつた。一同のものは珈琲を飲みた露臺へ出た。シプヤーギンとカロミエーツエフは葉巻に火をつけた。シプヤーギンは牛粹のレゲーリアをネツダーノフに差出したが、彼はそれを辭退した。

「あゝ、さう／＼！」とシプヤーギンは叫んだ。「私は忘れてゐた、あなたは御自分の巻煙草の外あがらないんでしたね！」

「奇妙な趣味ですね。」とカロミエーツエフは齒の間で云つた。

ネツダーノフはもう少しで叫び出すところであつた。「僕はレゲーリアとシガレットの相違はよく知つてゐますけれ共、僕は他人に恵まれることを欲しないんです。」と口まで出かゝつたのを、彼は自分で抑へつけた。が、同時に彼はこの第二の侮辱を何時か敵に返報してやるべき「負債」として心に留めた。

「マリアンナー」とシプヤーギン夫人は突然大きな聲で云つた。「あんたは知らない方の前だつて遠慮なさることはありませんよ……あなたの巻煙草をお點けなさいな、さあ遠慮なく。それに、」と彼女はネツダーノフの方を向きながらつけ加へた。「あなた方の御連中では若い女もみんな煙草をお呑みになるんですつてね？」

「仰しやる通りです。」とネツダーノフは辛氣ない調子で云つた。彼がシプヤーギン夫人に物を云つたのはこれが最初であつた。

「ですのに私は呑みませんのよ。」と彼女は物優しい眼に媚びるやうな色を浮べながら續けた。「時代遅れですわね。」

叔母に對して挑むやうな落着き拂つた、用心深い容子で、マリアンナは巻煙草と燐寸の箱とを取出して、煙草をふかし始めた。ネツダーノフもマリアンナの火を借りて巻煙草を吹かし始めた。

それは美しい晩であつた。コーリヤとアンナ・ザハロウナとは庭園へ出て行つた。みんなは外氣を享樂しながら、一時間ほど露臺に留まつてゐた。會話は幾らか快活になつて行つた……カロミエーツエフは文學を攻撃した。シプヤーギンは其れについても自由な考へを披瀝して、文學の獨り子を擁護した。その効能を示した。そしてお終ひにはシャトブリアンの事まで持ち出して、アレキサンダー・

ペトロヴキツチ皇帝がセント・アンドレイ第一等勳章を彼に授與されたと云ふ事實を説き立てゝゐた。ネツダーノフはこの議論には加はらなかつた。シプヤーギン夫人は一方は彼の謹み深い沈黙を稱讃してゐながら、又一方には少しそれに驚いてゐるやうな顔付で彼を眺めてゐた。

お茶が運ばれると、人々は再び客間へ歸つた。

「私達には甚だよくない習慣があるんです、アレキセイ・ドミトリヴキツチ。」とシプヤーギンはネツダーノフに向つて云つた。「私達は毎晩骨牌をやるんです、それだけなら未だ好いんですが、禁制のstukoika (賭博の一種)までやるんです……どうか何とも思はないでくれ給へ！ 私は君を仲間には勸めないから……だが、マリアンナが君のためにピアノを弾いてお聞かせするでせう。君は音楽は好きですか、どうです、え？」そして答へを待たずにシプヤーギンは一組の骨牌を取上げた。マリアンナはピアノの前に坐つて、メンデルスゾーンの「言葉なき歌」を上手でも下手でもなく少しばかり弾いた。Charmant ! charmant! quel toucher! (素敵です、素敵です、何と云ふ打ち方！)とカロミエーツエフは遠くから焼傷でもしたやうな金切聲を揚げた。が、この稱讃はたゞ作法のために叫ばれたのであつた。そしてネツダーノフもシプヤーギンが好きだらうと云つたに拘らず、音楽に對しては少しも情熱を持つてゐなかつた。

やがてシプヤーギンと夫人と、カロミエーツエフとアンナ・ザハロウナとは骨牌に坐つた……コーリヤはお休みなさいを云ひに来て、両親に十字を切つて貰つてからお茶の代りに牛乳の入つた大きなコップを受取つて寢床へ行つた。父親はその背後から聲をかけて、明日からアレキセイ・ドミトリヴキツチに日課を始めて頂くのだと云ひ聞かした。やがて又、ネツダーノフが部屋の真中にたゞ一人取り残されて、もち／＼した容子で寫眞帖を繰つてゐるのを見ると、シプヤーギンは彼に向つて、旅行のために疲れてゐるだらうから、もう遠慮なく休みに行つてくれるやうに、自分の家の大事な掟は自由主義と云ふ事だと云つた。

ネツダーノフはこの許しが出たのを機會に、みんなに挨拶をして部屋を出た。扉口のところで彼はマリアンナと擦れ違つた。そして彼女の眼をちつと見詰めた時、彼女は微笑を浮べやうとはしないで、却つて顔をしかめて見せたが、其れでも彼はもう一度彼女を自分の仲間だと信じた。

彼の部屋は終日窓が開け放されてあつたので、新鮮な香氣に充ち／＼てゐるのを彼は感じた。窓から眞正面の庭園では、ナイチンゲールが静かな旋律的な歌をさへづつてゐた。圓い樹立の上の空には温かな薄ぼんやりとした光が漂つてゐた。それは月が昇りかゝつてゐるのであつた。ネツダーノフは蠟燭へ火をつけた灰色の火取蟲が雨のやうに庭園から飛び込んで来て、燈の周囲へ群がつた。と同時に

風が彼等を吹き亂して、蠟燭の青いやうな黄色い煙をちら／＼揺めかした。

「奇體だ！」彼は床へ横になりながら考へた。「あの人達はみんな善良な、解放的な、しつかりした人間らしい……だのに俺がこんなに惱ましく思ふのは何故だらう。Kammerherr……Kammerherr (侍従官)それが何だい！……朝になれば頭が好くなるだらう、餘り感傷的になり過ぎてゐるんだ！」

が、その時庭園で夜番の鐵板を打つ音がかん／＼と強く響いて、長く引張つた叫び聲が聞えた。

「警……戒！」

「警……戒！」ともう一人の陰鬱な聲がそれに應じた。

「え、何だ畜生！」とネツダーノフは獨言した。「まるで監獄にでも入れられたやうだ！」

八

ネツダーノフは朝早く起き上つた。家僕が来るまで待つてゐないで、服を着換へて庭園へ出て行つた。庭園は非常に廣々として美しかった、そして手入れがよく屈いてゐた。雇はれた労働者が鋤で小徑を掻き平してゐた。灌木叢の緑の茂みの間には熊手を持つた百姓の娘達の赤い頭巾が覗いてゐた。

ネツダーノフは池の傍まで行つて見た。朝霧はもう消え去つてゐたが、蔭深い岸の奥まつたあたりに

は未だ霧が片々に纏まつてゐた。太陽はまだ高くは昇つてゐなかつたが、廣々とした、絹地のやうな、鉛を溶いたやうな水面に蔷薇色の光を投げてゐた。棧橋の近くでは幾人かの大工が忙がし／＼に仕事をしてゐて、その傍に浮んでゐる新しい塗り立ての短艇が、あたりの水面に微かな波紋を描きながら左右に揺れてゐた。時折りの人聲が謹ましやかな調子で聞えて來た。凡ゆる周囲のものが朝の感じに包まれてゐた、静けさと朝の仕事の早く進捗つてゆく感じに包まれてゐた。秩序のある規則正しい生活の感じに包まれてゐた。そして見よ、並木路の曲り角で、ネツダーノフは秩序のある規則正しいその人が……シプヤーギンが……こつちへ遣つて來るのを見た。

彼は部屋着のやうな仕立をした青豆色の長外套を着て、縞の縁無帽を被つてゐた。彼は英國産の竹の杖をついてゐた。剃り立ての顔が満足さうに輝いてゐた。彼は自分の領地を見廻はりに出たのであつた。シプヤーギンは丁寧にネツダーノフに挨拶した。

「あゝ！」と彼は叫んだ。「あなたは若いに似合はず早起きですね。恐らく彼は餘り適切でないこの言葉でネツダーノフが自分と同様に寝坊もしなかつたことを稱めたつもりであらう。」「私達は八時にみんな食堂へ集まつてお茶を飲むのです、それから十二時に中食をやるのです。十時にはあなたはコーリヤに露西亞語で最初の日課を教へてやつて下さい、そして十二時には歴史を。明日五月九日は彼の

命名日ですから日課をお休みにして下さい。ですが、今日から始めて下さるやうに。」

ネヅダーノフは點頭をした。シプヤーギンは佛蘭西風に唇と鼻の前で二三度続けさまに手を振つて彼に分れた。そして氣取つた風に杖を振つて口笛を吹きながら、重要な官廳にある人間らしい勿體ぶつた所は少しもなく、人の好い露西亞の「田舎紳士」のやうな容子で歩いて行つた。

ネヅダーノフは八時になるまで庭園で老樹の樹蔭や、新鮮な空氣や、鳥の歌を享樂してゐた。銅羅の音がすると彼は家へ入つた。一同のものはもう食堂に集つてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナは、彼に對して非常に愛想よく振舞つた。朝衣を着けた彼女の姿はこの上もなく美しい印象を彼に與へた。マリアンナの顔には例の思ひ沈んだやうな氣難かしげな表情が浮んでゐた。きつちり十時に最初の日課がワレンチーナ・ミハロウナの前で始められた。彼女は最初ネヅダーノフに向つて、自分も此席にゐても可いか如何かと訊いた。そして日課が済むまで謹み深く聴いてゐた。コーリヤは懶巧な子供であることが分つた。如何することも出来ない最初の羞耻と躊躇とがなくなると、其れからは日課がすらすらと具合よく進んだ。ワレンチーナ・ミハロウナは、ネヅダーノフに對して明らかに満足したらしかつた。そして媚びるやうな容子で幾度か彼に話しかけた。彼は其れほど嚴格にはなかつたが、彼特有の態度を守つてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナは、第二の露西亞の歴史の日課にも出席した。彼

女はこの日課はコーリヤと同様に自分も先生の必要があると微笑みながら云つた。そして前の日課の時と同じやうに靜かに謹み深く振舞つた。三時から五時までネヅダーノフは自分の部屋に坐つて、ペテルブルグへの手紙を書いた、そして鳩はしい事からも不快な事からも離れてゐたので、彼は愉快をも不愉快をも感じなかつた。彼の疲勞した神経はだん／＼と和げられて行つた。晚餐の時には、そこにはもうカロミエーツフがゐなかつたに拘らず、再び神経を擾亂された。女主人の媚びるやうな馴れ／＼しさは相變らずであつたが、その馴れ／＼しさは却つてネヅダーノフを惱ました。その上又彼の隣席のアンナ・ザハロウナ婆さんは、明らかに意地悪く敵意を持つてゐる様子を見せつけ、マリアンナは例の氣難かしい顔付をしてゐた。そしてコーリヤは幾らか馴れ過ぎて、食卓の下で彼の足を蹴つたりした。シプヤーギンも不機嫌な容子をしてゐた。彼は高い報酬を出して自分の製紙工場の監督にしてゐた或る獨逸人に對して不満を抱いてゐたのであつた。シプヤーギンは自分は狂信的ではないが、或る程度までスラブ人種の肩を持つものだと云ふ事を打ち明けながら、一般に獨逸人を罵り始めた。そして、ソローミン某と云ふ露西亞人が、隣りの商人の工場の仕事を立派に整頓したと云ふ話をし始めた。彼はこのソローミンと非常に知己になりたがつてゐたのであつた。晩になるとカロミエーツエフがやつて來た。彼の領地はシプヤーギンの村のアルザーノフから僅か十露里しか距つて

おなかつたのであつた。そこへ又一人の治安判事がやつて来た。この男は、レルモントレの有名な詩に、

「耳まで掩ふた襟飾、膝まで隠れた長外套、濃い髭と金切聲、どんよりとした鈍い眼付。」

と歌はれてゐるあの地主の一人であつた。そこへ又もう一人の隣人が入つて来た。陰鬱な齒の抜け落ちたやうな顔付の男であつたが、非常にお洒落な服装をしてゐた。それから又田舎醫者で、無暗に術語を饒舌りちらすことの好きな無學なドクトルがやつて来た。例へば彼はクコールニク（第二流の詩劇作家）の作品には「原形質」が多いからプーシユキンよりもクコールニクの方が好きだと主張した。彼は骨牌をやり始めた。ネツダーノフは自分の部屋へ引きさがつて、眞夜中まで讀んだり書いたりした。

次の日、五月九日はコーリヤの誕生日祝ひであつた。家族一同は會堂まで僅か三百ヤード位しかないので、三臺の幌馬車に乗つて、後方の足臺に馬丁を立てして出發した。凡てが重々しく華美に行はれた。シプヤーギンは勳授を身に着けてゐた。ワレンチナ・ミハロウナは、青白いライラック色の華美な巴里式の上衣を纏つてゐた。そして會堂ではお祈りの間中彼女は眞赤な天鵞絨で装訂してある小さな書を眺めながらお祈りを捧げた。この小さな書物は幾人かの百姓を驚駭させた、その中の一人は、

隣りの男に向つてかう訊かすにはゐられない程であつた。「あの人の見てゐるのは、ありや巫女の魔法の本かな、で無けりや何だらう、え？」會堂の中に充ち／＼た花の匂は、硫黄で淨めて来た百姓達の新しい外套の強い匂や、タールを塗つた長靴や半靴の匂と入れ交つた、そして其れ等の上に息苦しいやうな乳香の甘い香が立ちのぼつた。助祭と唱歌班とは驚かれるやうな熱誠をもつて歌つた、そして彼等に加はつた幾人かの工場労働者のお蔭で四部合唱をやり始めさへした！そこには聴手を何となくはら／＼させるやうな瞬間があつた。中音部は（急性肺結核にかゝつてゐるクリーマと云ふ工場労働者の受持ちであつた）全然一人つきりで合唱者がなく、平調な短音譜の合唱の中へ突抜けたやうに響いた。合唱團にとつては恐ろしい迷惑であつた。若し途中で彼等の聲音が途切れたら、四部合唱は忽ち滅茶々々になつたに違ひなかつた……が、どうか期うか事もなくそれも終つた。法衣と法冠とを着飾つた、非常に重々しい容貌をした長老シプリアンは一冊の寫本を見ながら非常に訓誠的な説教をした。不幸にもこの誠實な長老はアッシリアの或る賢王の名前を引用する必要があると考へた。この名前の發音は非常に云ひ悪くかつた。そして漸くそれを發音して、彼の博識の程度を示すことには成功したが、彼はその努力のために赤くなつて汗をかいてゐた。長い間教會へ出ないでゐた。ネツダーノフは、隅つこへ行つて、百姓達の女の間に隠れてゐた。彼等は夢中になつて十字を切つたり、低く頭を下げ

たり、赤ん坊の鼻を丁寧に拭いてやつたりしてゐたので、ネツダーノフには少しも注意を向けなかつた。が、新しい上衣を着たり糸につないだ硝子珠を額に垂れ下げたりした百姓の小娘や、刺繍をした肩飾や赤い胸當をつけた、帯のある寛いシャツを着た小供達はこの珍らしいお客の方へ顔を振向けながら、ちつと彼を見詰めてゐた……そしてネツダーノフも彼等を眺めながら、様々の事を考へてゐた。

長い間續いたお祈り……一般に知られてゐるやうに奇蹟行者聖徒ニコラスに捧げる感謝の勤行は、正教會の凡ての勤行の中で一ばん長いのである……が濟むと、坊さん達は一人残らずシプヤーギンの招待をうけて、領主の屋敷へと向つた。邸内へ入ると、坊さん達はこの場合に一層適はしい儀式……部屋々々に聖水を撒く儀式……をも行つた後、整潔な齋時の席についた。この食事の間、かう云ふ時の常として席上の話は教誡的な多少退屈なものであつた。家の主人と女主人とは、何時もこんな時間に中食をしたことはなかつたが、二人共少しづつ飲んだり食べたりした。シプヤーギンはいかにも此席に適はしい、と同時に面白くもある逸話を話し出しさへした。そしてこれが彼の赤い勳授や威厳にも拘らず、愉快なと云つていゝやうな印象を與へた。そしてシプリアン長老に喜びと驚きとを起さした。自分の番になると、シプリアン長老も、かう云ふ時には自分も何か一條の話をする……

云ふことを示すために、會て僧正が彼の監督管區を巡回して、町の修道院へ此地方の坊さん達を呼び集めた時に、彼がその僧正と取交はした問答について話した。「あの方は嚴格な方でした、非常に嚴格な方でした。」とシプリアン僧正は云つた。「最初あの方は私共の管區のことや設備の事について手酷しい質問をなされました、それから試問をお始めになりました……「あなたの教會の獻堂記念祭は如何な風になされるか？」とあの方は私にお訊ねになりました。「わが救世主の變容祭。」と私は申しました。「ではあなたはその時の讚美歌を覚えてお出でか？」「はい、覚えて居ります。」「歌ふて見なさい」そこで私は直ぐに始めました。「おゝ、我が主キリスト、山の上にて御姿を變へ給へり……」「もう澤山ぢや！ 變容とは如何云ふことか、どう云ふ風に解釋せねばならんか？」「一言にして云へば。」と私は申しました。「キリストは神の榮光をその身に現はして弟子達に示さうとなされたのです。」「宜しい。」とあの方は申されました。「此處に小さい御像がある、私の紀念にこれをあなたに差し上げる。」「私にあの方の足元に跪つききました。」「誠に有難うござりまする！……斯う云ふ具合であの方はたゞ無役に私を引退がらせはなさりませんでした。」「

「私はあの尊者には個人的にお知己をうけて居ります。」「とシプヤーギンは重々しく云つた。「實に偉い坊様ですね！」

「實に偉い坊様です」とシブリアン長老は繰返した。「あまり管區の執事を御信用になり過ぎるきはあります……」

ワレンチーナ・ミハロウナは百姓達の學校についての話をして、未來の女教師としてマリアンナを紹介した。オルロフ産の馬を尾を漠然と思ひ出させるやうな長いうねつた頭髪をもつた、體格の大きな助祭は、(學校の監督は彼に委任されてゐたので)彼女の言葉に同意であることを示さうとした。が、彼は肺の強さを顧みずに大きな聲を出したので、自分でも驚駭し、他の人達をも驚駭させた。斯うして間もなく坊さん達は歸つて行つた。

金釧のついた新しい短いジャケツを着たコーリヤはその日の主人公であつた。彼は様々な贈物と祝福とをうけた。彼は前の階段でも裏側の階段でも、工場労働者や家僕達や年寄の女や若い女や百姓達から手を接吻された……百姓達は昔の農奴時代と同じやうに、家の前に据えられた圓い卓の周圍でがや／＼云ひながらパイや火酒の饅を取り上げてゐた。コーリヤは不意に慌てたり、嬉しがつたり、得意になつたり、含羞んだりしてゐた。彼は兩親に抱きついたり、部屋から駆け出したりした。食事の時にシブヤーギンハ三鞭酒を抜くやうにと命じて、息子の健康のために杯を揚げる前に一場の演説をした。彼は「自分の國に仕へると云ふ事の意味や、ニコライ(私は自分の息子をかう呼んだ)の未來

に對する希望や……ニコライの盡すべき義務について饒舌つた……先づ第一、自分の家族に對して、第二に彼の階級に對し、社會に對して、第三に民衆に對して……然り、諸君、民衆に對して、そして第四には政府に對して! だん／＼熱して行く中に、シブヤーギンはロバート・ビールそつくりと云ふ態度で、禮服の胸の折目に片手を突込んで、本統の雄辯になつて行つた。彼は「科學」と云ふ言葉を感動的に發音した、そして拉典語の *laboremus* と云ふ感嘆詞を使つて、それを直ぐ露西亞語に翻譯して演説をお終ひにした。コーリヤは父親に感謝するために、又みんなに接吻して貰ふために、杯を手持つて食卓を一廻はりしなければならなかつた。その時ネヅダーノフは又もや不意にマリアンナと眼を見合した……彼等二人は、恐らく同じ事を心中に感じてゐたに違ひなかつた……が、二人共口に出しては何とも云はなかつた。

凡ての光景がネヅダーノフを感動させた。彼は困惑と嫌惡とを感じはしたが、どつちかと云へば愉快と興味とをより多く感じてゐた。その間に又此家の蕭やかな主婦のワレンチーナ・ミハロウナに對しては、大事な役割をつとめてゐるのを彼女自身によく知つてゐながら、同時に又誰れか聰明な觀察の深い人が自分をよく見てゐてくれると云ふ事も知つてゐる聰明な女だと云ふ印象を彼は受けた……ネヅダーノフは彼に對する彼女の態度のために、どれ程彼の虚榮心が魅せられてゐたかを、恐らく自

分で疑つて見なかつたのであらう。

次の日學課が再び始まつた、そして日常の生活が習慣的な調子で進んで行つた。

何時の間にか事もなく一週間は過ぎ去つた……ネヅダーノフが何を經驗し何を考へてゐたかは、彼が高等學校の同級生であつた親友のシーリン宛に書いた手紙の抜萃を取れば、最もよく了解することが出来る。シーリンは今ベテルブルグには居ないで、遠い田舎町の裕福な親類の家へ寄食してゐた。彼の境遇はその家から離れることを考へて見る程の必要さへないやうなものであつた。彼は脆弱で臆病で、偏狭な男ではあつたが、質朴な純粹な性質を持つてゐた。彼は政治問題には少しも興味を持たず平凡な書物を少しばかり讀むだけで、時間つぶしに笛を吹いたりしてゐた。そして若い婦人達を嫌つてゐた。シーリンは熱烈にネヅダーノフを愛してゐた……彼は一體に自分の愛するものに對して有頂天であつた。ネヅダーノフは他の何人に對してよりもウラジミール・シーリンに對して心の底を打明けてゐた。ネヅダーノフが彼に手紙を書く時には、他の世界に住む或る最も親密な人間と話してでもしてゐるか、又は自分の内心と話でもしてゐるやうな氣持ちで書くのであつた。ネヅダーノフにはシーリンと再び友達として同じ町で暮らすことが出来やうとは考へることさへ出来なかつた。……彼は恐らくシーリンに對して忽ち冷淡になつて了ふに違ひなかつた。それ程一人の間には少しも共鳴する

點がないのであつた。が、彼はシーリンに對しては熱心に、心の底から打明けて書いた。他の者に對しては……少くとも手紙の上では……彼は何時も見得を飾つたり、技巧を凝らしたりした、が、シーリンに對しては決してそんな事がなかつた！ペンを持つことの不得手なシーリンは、短い拙劣な文句ではほんの少ししか返事を書いて寄越さなかつたが、ネヅダーノフの方でも彼から長い返事を貰はうとは欲しなかつた。そんな返事はなくつても、この知友は道路の砂埃が雨の雫を吸ひ込むやうに、ネヅダーノフの言葉を深く吸ひ込んで、神聖なものとしてその秘密を洩らさないと云ふことを、そして又この親友は、決して浮び出すことの出来ない惨めな孤獨の中に埋れて、たゞ自分の友達の生活のなかにのみ生きてゐるのだと云ふことをネヅダーノフはよく知つてゐた。世間の何人に對してもネヅダーノフは彼との關係を洩らさなかつた、それは彼にとつて何物よりも貴重なものであつた。

「さて、親愛なる友……我が誠實なるウラジミールよ。」と彼は彼に書いた……彼は何時も彼を誠實なると呼ぶのであつた、そして當然の理由があるのであつた……「僕を祝福してくれ給へ。僕は氣持のいい碇泊所へ入つたのだ、そして今休息することも、精力を回復することも出来るのだ。僕は今財産家の有名なシプヤーギンの家に家庭教師として住んでゐるのだ。僕は整潔なものを食ひながら（僕は生れからまだこんなに美味しいものを食つたことはなかつた！）彼の小さい息子に教へてゐる。ぐつ

すり眠りもするし、美しい田舎路を満足する迄ぶら／＼歩き廻りもしてゐる。そして一ばん肝心なことは、僕が暫くの間ペテルブルグの友達の後見から逃れたいと云ふことだ。勿論最初の間はすいぶん烈しい退屈に襲はれもしたが、今では段々そんな事もなくなつて来た。早く僕は君の知つてゐるあの仕事に取りかゝらなければならぬ（諺にあるやうに、自分が菌と呼ばれるためには、自分が籠の中へ入らなければならぬ）。そしてその爲めにこそ彼等は僕を此處へ送つたんだ。だが、當分の間ぐらひ僕は愉快な動物的生活を送つたつて可いんだ。羊味の物を食つてたつて可いんだ、感興が湧いたら、詩を書いたつて可いんだ。所謂田舎の印象は、又別の時に書くことにする。領地は適當に管理されてゐるが、工場は多少悪い方だらう。百姓達について云へば、或る者は幾分近づき難いところがある。それから使用人達はみんな體裁のいい者ばかりだ。だが、こんな事はみんな次の時に云ふことにしよう。家の人達は教養もあるし解放的である。シプヤーギンは何時も非常に懇懇に振舞つてゐる——お、實に懇懇だ！そして而も不意に雄辯家になることがある——この上もなく教養の高い人物なんだ！家の主婦は全くの美人だ……油斷のならない猫だと思はせるやうな女だ。この美人は人々を巧く操つてゐる……そして、お、その軟かい事と云つたら……まるで身體に骨がないやうだ！僕は彼女を恐れてゐる。僕の婦人に對する態度がどんな風にかはつたか君の知つてゐる通りだ！それから

隣人達……は幾人かの厭な奴等と……僕はむしやくしやさせる一人の老婦人とだ……だが、僕は一ばん興味を持つてゐる一人の若い娘がゐる——彼女は親類のものなのか、それとも友達なのか、少しも分らない。僕はその娘とたつた二言口をきいたばかりだ。が、彼女は僕自身と同じ種類の人間だと僕は思つてゐる。」

此處で彼はマリアンナの容貌や凡ての態度を書いて、やがて又續けた。

「彼女が不幸な人間であること、傲慢で、自意識が強くて、打ち融けない人間であること、その中でも不幸な人間であることは、疑ふべくもない。何故彼女が不幸であるかと云ふことは僕にはまだ分らない。彼女が正直な娘だと云ふことは僕にはよく分つてゐる。彼女がお人善であるかどうかは僕にはまだ疑問だ。だが、世の中に愚鈍でないお人善な女があるものだらうか？それにさう云ふ女が無ければならぬものだらうか？が、僕は一般に女と云ふものを一向に知らないんだ。此家の主婦は彼女を嫌つてゐる……そして彼女の方でも左様なのだ——どつちが正しいのか僕には分らない。どつちかと云へば夫人の方が悪いのだらうと僕は想像する……何故と云つて主婦の方は彼女に對して非常に丁寧なのに、娘の方は彼女の保護者に口をきく時神經的に眉毛をびく／＼させてゐる。左様だ、この娘は非常に神經質なのだ、そしてその點も彼女は僕と同じことだ。全然僕と同様だとは云へないかも

知れないが、彼女は僕と同じやうに「術はづれな人間」なのだ。

かうした凡ての事は今にもつとよく明らかになつたら知らせることにしよう……。

今も云つたやうに、彼女は滅多に僕と口をきかないのだが、彼女が僕に（何時も不意に突拍子もなく）一言三言話しかける言葉には一種卒直な馴れ／＼しさがある……僕はそれが好きだ。

序にいふが、君の親類はやつぱり不味い麵麩で君を養つてゐるのか？ もうお止めにしやうと思つてやしないか？

君は「歐羅巴」の使命に掲つてゐる、オーレンブルグ縣に於ける最後の僭望者に關する論説を讀んだか？ それは千八百三十四年に起つた事件なんだぜ！ 僕はあの雜誌を好かない、それにあの論説の筆者は保守黨だ。が、様々な事を暗示してゐる興味のある問題だ……。」

九

五月ももう終りに近づいてゐた。初夏の暑い日がやつて來た。

或る日歴史の日課が終るとネツダーノフは庭園へ出た、そして一方の側が庭園に續いてゐる樺の林へ入つて行つた。この林の一部は十五年前に材木商人に伐り拂はれたのであつたが、今はこの跡が一

面にこんもりとした樺の若樹に掩はれてゐた。樹々の幹には灰色が／＼つた輪の編目が描かれて、軟かな鈍銀色の圓柱のやうに立ち並んでゐた。小さな若葉は洗つた上をニスを塗つたやうに一樣に緑色に輝いてゐた。春の雜草は黒く平に積み重つた去年の落葉の下から小さい鋭い舌を突出してゐた。狭い小徑は林の間を縦横に走つてゐた。嘴の黄色い鶉が物に驚いやうにばた／＼と小徑を横切つて、地面へすれ／＼に低く下りて、やがて狂氣のやうに茂みへ飛び込んで行つた。三十分ばかり歩き廻つてから、ネツダーノフはあたりに古びた灰色の木片の散らかつてゐる切株に到頭腰を下した。その木片は樹が切り倒された時斧で削りとられたまゝ小山のやうに積み重なつてゐたのであつた。幾度か冬になると雪がそれを掩ひ春はそれが融けて現はれたが、誰れも手をつけずに放つて置いたのであつた。ネツダーノフは若い樺の樹の厚い根根に背中を凭せかけて、深い物やかな木蔭に坐つてゐた。彼は何にも考へなかつた。若い者も老人も同じやうに心中の傷みを誘はれる……若い者は未來の希望についてのいら／＼した懊惱を、老人は過去の悔恨の打沈んだ苦痛を誘はれる……一種異常な春の氣分に全然心を浸してゐた。

突然ネツダーノフは近づいて來る足音を聞きつけた。

それは一人の足音ではなかつた、そして又半靴や長靴をはいた百姓達の足音でもなく、洗足の百姓

女の足音でもなかった。誰れか二人づれで、そろ／＼と忍びやかに歩いて来るやうに思はれた……女服の軽い衣摺れのけはひがした。

すると不意に空胴な聲が聞えた……男の聲であつた。「では、それがあなたの最後のお言葉ですね？ どうしても？」

「え、どうしても！」ともう一人の女の聲が繰返した……ネツダーノフには聞き覚えがあるやうな気がした。と思ふ間もなく、若樹の樺林の端れになつてゐる小徑の曲角にマリアンナの姿が不意に現はれた。彼女はネツダーノフが今迄に一度も見たことのない暗い陰鬱な眼付をした男とつれ立つてゐた。

ネツダーノフを見ると、二人とも射すくめられたやうに立停つた。ネツダーノフの方では腰掛けてゐた切株から立ち上ることも出来なかつた程驚ろかされた……マリアンナは髪を生際まで顔に根くしたが、直ぐ輕蔑したやうな微笑みを浮べた。それは、誰れを輕蔑したのだらう……自分が根くなつたのを、それともネツダーノフを？……彼女の連れはもや／＼した眉毛をびくつかした。黄色味を帯びた白い彼の不安らしい眼がざらりと輝いた。やがて彼はマリアンナを見詰めた。そして二人はネツダーノフの方へ背中を振向けながら、前と同じ忍びやかな緩くりした歩調で、黙り込んだまゝ向うへ行つ

てしまつた。ネツダーノフは驚駭した眼付でその後を見送つてゐた。

三十分ばかりの後、彼は歸つて来て、自分の部屋へ入つた。そして銅羅の響をきくと食堂へ出た。すると先程林で出會つたあの陰鬱な顔付をした見知らぬ男がそこにゐるのを見た。シプヤーギンはネツダーノフを彼の前へ連れて行つて、この人はワレンチーナ・ミハロウナの兄弟で、自分の Jean Tetre (法律上の兄弟) のセルゲイ・ミハロヴキツチ・マルケーロフだと紹介した。

「どうぞ親しい友人になつて下さい、兩君！」とシプヤーギンは彼の持前の氣抜けしたやうな微笑みを見せながら、愛想のいゝ調子で重々しく云つた。

マルケーロフは黙つて頭を下げた。ネツダーノフも同じやうに、それを返した……その間にシプヤーギンは彼の小さい頭を軽く振つて、肩をしゃくり上げて、「まづ自分の役目はこれで済んだ、……君達が友人にならうと如何だらうと、自分には何の關係もない」と云はんばかりな容子で向うへ去つた。

やがてワレンチーナ・ミハロウナが身ぢろぎもせず突立つてゐる二人に近づいて来て、もう一度彼等を紹介した。そしてその美しい眼に自分の思ふ通りの表情を浮べることが出来るらしく一種特別な懐かしさうな輝きを見せながら自分の兄に話しかけた。

「どうしたんですの、Caroline（親愛なるセルゲイ）あなたは私達をすっかり忘れてしまつたんですか？ コーリヤの誕生日にも来て下さらなかつたのね。それとも仕事が大へんに忙しかつたんですの？ 此人は今自分の百姓達と新しい條件を決めやうとしてゐるんです。」と彼女はネヅダーノフを振向いた。「それが又非常に獨創的なんですよ。百姓達へ全體の四分の三を遣つて、自分は四分の一だけ取る事にするんですつて。それでもまだ自分は餘計に取過ぎると思つてゐるんです。」

「私の妹は笑談にして面白がつてゐるんです。」と今度はマルケーロフがネヅダーノフに話しかけた。

「けれ共、少くも百人の農夫に所屬してゐる全部の中から、たつた一人の男がその四分の一を取り上げると云ふ事は、確かに多過ぎます。」

「ですのに私が笑談にして面白がつてゐるとお思ひになつて？ アレキセイ・ドミトリウキツチ。」とシプヤーギン夫人は眼にも聲にも優しい愛嬌を漂へたまゝに云つた。

ネヅダーノフは何と答へていゝか分らなかつた。と、その瞬間にカロミエーツエフの來たことが告げられた。家の主婦は彼を出迎へに行つた。直ぐその後へ食事方が出て來て、歌をうたふやうな調子で食卓の支度が出來たと告げた。

食事の時ネヅダーノフはマリアンナとマルケーロフを注意して見ないではゐられなかつた。二人は

並んで坐つて、眼を下へやつて、唇を堅く結んで、氣難しい陰鬱な、殆んど怒つたやうな顔付をしてゐた。ネヅダーノフはマルケーロフがシプヤーギン夫人の兄貴であることを餘りに不思議に思つた。彼等の間には少しも似てゐるやうな所が見出せなかつた。たゞ一つ……色の淺黒いところが同じだと云へば云へた。が、ワレンチナ・ミハロウナの方は、顔も腕も肩も一樣に色をしてゐるが魅力の一つをなしてゐた……所が兄貴の方は上流社會の人々が「青銅のやうだ」と云つてゐるやうな、又露西亞人の眼には皮のゲートルとしか思へないやうな色の黒さにまで達してゐた。マルケーロフは縮れた頭髮と幾らか鉤なりになつた鼻と、厚い唇と、窪んだ頬と、狭い胸と、筋ばつた手とを持つてゐた。彼は全體に筋ばつて、血の氣がなかつた。彼は噁れた、氣忙しい、金屬的な聲で物を云つた。その眼付はどんよりとしてゐて、顔付はまるで胃病患者のやうに苦々しげであつた！ 彼はさつぱり物を食べずに、しきりに麵麩を小さい彈丸のやうに丸めながら、絶えずカロミエーツエフの方をちらり／＼眺めてゐた。カロミエーツエフは町から歸つて來たばかりであつた。町で彼は何か多少不愉快な事件のために知事に會つて來たのであつた。この事については彼は注意深く沈黙を守つてゐたが、外の問題については彼は鴟のやうに饒舌を始めた。

シプヤーギンは何時もと同じやうに、彼があんまり度端れになると、彼を抑制した。が、シプヤー

ギンは *qu'il est un officieux reactionnaire* (この男は恐ろしい保守黨だ) とは思ひながら、彼の笑談やおかしな話を非常に笑つてゐた。カロミエーツエフは他の人達に向つて、單純な百姓達が辯護士の事を「左様よ! 左様よ! あの客引人足奴が!」と云つたのを聞いてどんなに面白かつたかと話してゐた。「客引人足!」と彼は夢中になつて繰返した。「Ce peuple russe est délicieux. (露西亞人は實に面白いことと云ふ人間だ)」それから又彼は、自分が一度農民學校を訪問した時、その生徒に向つて、「鶴嘴とは何か?」と云ふ質問を出したが、誰れも巧く答へることが出来ず、教師さへも答へることが出来なかつたので、今度はヘミユツツアーの詩から「他の獸の眞似をする狒々」と云ふ句を引用して、「狒々とは如何なものか?」と質問したら、やつぱり誰れも答へる者がなかつたと云ふ話をして、諸君の農民學校なんでものは斯んなものだと言つた。

「でも失禮ですけど。」ワレンチーナ・ミハロウナは云つた。「私たつてそんな狒々のことなんぞ存じませんわ。」

「奥さん!」とカロミエーツエフは叫んだ。

「あなたなんぞにはそんな事を知つてらつしやる必要は少しもありません。」

「ちや百姓達は何故知つてゐなければならぬんですの?」

「それはですね、百姓共がやれブルードンたの……やれアダム・スミスだのと云つてるよりは、彼等にとつては鶴嘴のことや狒々のことでも覺えとく方がまだ可いですからね!」

だが、この言葉をきくとシプヤーギンは再び彼を押し留めて、アダム・スミスは人間の思想の中の大いなる光明の一つであつて、若し凡ての人々が、彼等の母親の乳を吸ふやうに(かう云ひながら彼は自分で *Chateau d'Yquem* をコップに一杯ついで)アダム・スミスの議論を吸収すれば(と彼はコップを鼻のところへ揚げて酒の香を嗅いだ)どんなに可いかも知れないと云つた……そして彼はコップを空にした。カロミエーツエフも飲んで、その酒を稱めた。

マルケーロフはこのペテルブルグの待從官の議論に大して注意を拂はなかつた、が、二度ばかりネヅダーノフの方を捜るやうに見詰めた。そして臍舌な客の鼻面へぶつけてやるためだと云つた風に、順りに麵麩の彈丸を指で丸めてゐた……。

シプヤーギンはこの義兄には少しも取り合はなかつた。ワレンチーナ・ミハロウナも彼には話しかけなかつた。夫も妻もマルケーロフに對しては、譯の分らない變人として、興奮させないやうにそつとして置く方が好いと考へてゐたことは明らかであつた。

食事が終ると、マルケーロフは煙草を吹かすために玉突場へ行つた。ネヅダーノフは自分の部屋へ

歸つて行つた。廊下で彼はマリヤンナにばつたり出會した。彼は、彼女を通り越しさうになつた……と、彼女はいきなり手を振つて彼を引留めた。

「ネツダーノフさん。」と彼女は、あたふたした調子で始めた。「あなたが私の事をどうお考へにならうと、私には同じですけれど、でも矢張り私は……私は……（彼女は何と云つて好いか迷つてゐた）今日林の處でマルケローフさんと二人でああなたに出會つた時の事をあなたに云つて置く方がいゝと思ひますわ……ねえ、あなたは多分、私達が何故あんなに驚駭したのか、何故あんな所へ約束でもしてあつたやうに行つたのかと變に思つてゐらつしやるでせうね？」

「え、僕は少し變に思ひました。」とネツダーノフは始めた。

「マルケローフさんは。」とマリヤンナは遮つた。「私に結婚の申込をなすつたんです、そして私は拒絶したんです。あなたにお話しとかなければならないのは其れだけ……ではお休みなさい。あとは私の事をどうお考へにならうと構ひませんわ。」

彼女は素早く身を翻して、足早に廊下を歩いて行つた。

ネツダーノフは自分の部屋へ入つて、窓際へ腰を下して考へ込んだ。「何と云ふ變な娘だらう！そしてあの荒つばい素振はどうだ？ あの突拍子もない打明け話は？一體どうだつて云ふんだ……」

創的に思はれたいためなのか、單にあゝ云ふ性癖なのか、それとも自尊心のためなのか？ 多分自尊心のためだらう。あの娘は一寸した嫌疑をも耐えてゐることが出来ないんだ……誰れか、自分を誤解するだらうと思ふともう我慢してゐられないんだ。變な娘だ！

ネツダーノフは斯んな事を思ひ耽つてゐた。その時下の露臺では彼の噂をしてゐた。彼には非常にはつきりと其れが聞えた。

「あの男が過激な革命論者だと云ふことは。」とカロミエーツエフがきつぱりと云つた。

「私には直覺で分りますよ。私は以前モスクワ提督の幕下に……あのラヂスラスと一緒に特別委員會に勤めてゐた頃から、私はあの連中——過激黨だの、非國教徒だの、連中——を直ぐ嗅ぎつけるやうになつたんです。私は時々驚くほど鼻が敏感になりますからね。」斯う云つてカロミエーツエフは、或る時モスクワの市外で、偶然一人の老人の非國教徒が逃げ出したところを捕縛したと云ふ話をした。その時折よく警官が來合せたので好かつたが、もう少しで小舎の窓から飛び出して逃げて了ふところだと云つた……「その無頼漢は、その時までちつと息をひそめて小舎の中に坐つてゐたのです！」

カロミエーツエフはその老人が監獄に入れられてから全然食物を取ることを拒んで、自分で餓死して了つたと云ふ話をつけ加へるのを忘れた。

「で、あなたの家庭教師は、」と熱心に待従官は續けた。「疑ひもなく過激黨です！ あなたはあの男が自分の方から先には決して點頭をした事がないのに、お氣附きになりませんか？」

「でも、何故あの人が先に點頭をしなければなりませんの？」とシプヤーギン夫人が云つた。「私は反對に——あの人のさう云ふところが好いと思ひますわ。」

「私はあの男の雇はれてゐる家のお客です。」とカロミエーツエフは叫んだ。「さう、あの男は *Comme* *un prince* (月給取のやうに) 金のために働いてゐる人間です……ですから私の方が目上のわけです、あの男の方から先に點頭をしななければならない筈です。」

「君はあんまり酷し過ぎるよ、カロミエーツエフ。」とシプヤーギンは彼の名前の *y* と云ふ發音に特に力を入れながら口を挿んだ。「全然それは、失禮かも知れんが、時代遅れのやうに思へるね。僕はあの男の勤務と仕事とは買ったが、それでもあの男は依然として自由人だ」

「あの男は少しも拘束と云ふものを感じてゐない。」とカロミエーツエフは續けた。「拘束を！ 抑制の念を！ 過激黨の連中はみんな左様だ。今も云ふやうに私はあの連中を嗅ぎつけることには驚くほど敏感なんだからね！ この點で私と匹敵する事の出来るのは恐らくラヂスラム一人位なものだらう。」

若しあの男が、あの家庭教師が私の手に掛つたのなら、少し痛い目に會はしてやるんだがね！ 會は

さずに置くものか！ そうすれば調子が非常に違つて来る、私の前で、きつと帽子を脱ぐやうになるね！……さぞ見ものだつたらうに！」

「生意氣な譚話を抜かすな、空威張の薄馬鹿！」とネツダーノフはもう少しで上から怒鳴りつけやうとした……が、その瞬間彼の部屋の扉が開いて、突然マルケーロフが入つて來たので、ネツダーノフは非常に驚いた。

十

ネツダーノフは彼を出迎へるために席を立つた。マルケーロフの方は眞直ぐに彼に近づいて、頭も下げずに微笑み一つ浮べないで、彼に訊いた。「君がベテルブルグ大學の學生アレキセイ・ドミトリエフ・ネツダーノフですか？」

「さうです……さうです。」とネツダーノフは答へた。

マルケーロフは横衣兜から開き封になつてゐる一つの手紙を取出した。「では、これを読み給へ。ワシリーイ・ニコラエヴキツチからです。」と彼は意味ありげに聲を低くしながらつけ加した。

ネツダーノフは手紙をひろげて讀んだ。それは半官的な訓牒のやうな性質をもつた手紙であつて、

この持參人セルゲイ・マルケエーフは、充分信用の置ける「我が黨」の一人だと紹介してあつた。更にその後へ緊急的な一致の必要、一三の要目の宣傳に就いての勸告が認められてあつた。この通牒は他の同志をも含めて、最も信頼すべき人としてネツダーノフ宛てられたものであつた。

ネツダーノフはマルケエーフに手を差出した。そして坐つて呉れるやうにと云つて、自分も椅子へ腰を下した。マルケエーフは一言も云はずに煙草を吹かし始めた。ネツダーノフも煙草に火をつけた。

「君はもう此處の百姓達と知り合ひになる機会を得ましたか？」と到頭彼は訊いた。

「いや、まだ其の機会がありません。」

「ちや、君は此處へ来てからまだ間がないんですか？」

「やうやく二週間ばかりです。」

「非常に忙しいですか？」

「其れ程でもありません。」

マルケエーフは顔しかめて咳拂ひをした。

「ふむ！ 此處の百姓達は可なり惨めな有様です。」と彼は再び始めた。「無學文盲です。教育する必要があるので。非常に貧乏な生活をしてゐるが、何が故に彼等が貧乏してゐるか云ふ事を誰れも説い

て聞かしてやる者がないのです。」

「元あなたの義弟さんの農奴だつた百姓達は、僕の見るところでは、貧乏ではありません。」とネツダーノフは云つた。

「私の義弟は詐欺師です。人の目を眩ますことを知つてゐるのです。此近所の百姓が何の役にも立たない事は分つてゐるが、彼は工場を持つてゐます。我々はそこへ力を注がなければなりません。彼處へ一寸脚を突込みさへすればいゝのです。すれば蟻の群は直ぐ騒ぎ出すでせう。あなたは何か書物を持つて來ましたか？」

「え、併し幾冊もありません。」

「ちや少し持つて來て上げませう。けれ共何故持つて來なかつたんです？」

ネツダーノフは答へなかつた。マルケエーフも黙り込んで、たゞ鼻から煙草の煙を吹き出してゐた。「だが、あのカロミエーツエフと云ふ奴は、何といふ畜生でせう！」と彼は不意にいつた。「食事の時。私はあの閣下の處へ起つて行つて、懲らしめのためにあの耻知らずの顔を木片微塵に叩きのめして遣りたくなつて堪らなかつたんです。けれ共、まあ！ 今はあんな狡猾な侍従官に掛り合つてゐるよりやもつと重大な仕事がありますからね。馬鹿者が愚劣な事を云つたからつてむかつ腹を立てゝる時

ぢやありません。奴等が愚劣な事をするのを喰ひ留めなければならん時です。」

ネツダーノフは同意を表するやうに頷づいた。その間にマルケーロフは再び巻煙草のけむりを吐いた。

「此處にゐる家僕共の中に」と彼は再び始めた。「たつた一人物の分る奴がゐます。君の従僕のイワンぢやありません……あれは鈍物です、他の者です……食器棚を預つてゐる、キリールと云ふ給仕人です。」——（此キリールは恐ろしい飲んだくれであつた）——「あの男を注意して見て見給へ。飲んだくれの暴れ者だが……氣持を悪くしては可けませんよ。時にあなたは私の妹をどう思ひます？」と彼は不意に目をあげて、例の黄色い眼でぢつとネツダーノフを見詰めながらつけ加した、「彼女は私の義弟より一層上手の詐欺師です。あなたは彼女をどう思ひます？」

「私は非常に愛想のいゝ婦人だと思ひます……それに非常に美人です。」

「ふむー 君達ベテルブルグの諸君は、いかにも適当な巧い物の云ひ方をしますね！……私はたゞ感嘆するばかりです！ 所で……あの事はどんな風に……。」と彼は云ひ始めたが、不意に眉をひそめて顔色を暗くした。そしてその言葉を途中で切つてしまつた。「さう、我々は充分に相談しなければならぬ。」と彼は再び始めた。「此部屋で話すわけには行きません。どんな悪魔がゐるかも知れないから。」

奴等はきつと扉口で立聞きをするでせう。あなたには僕が何を云はうとしてゐるか分りますか？ 今日日は土曜日だから、明日多分あなたは私の甥に何にも授業はなさらんでせう。如何です？」

「僕は明日三時から一週間分の下稽古をしなければならぬです。」

「下稽古！ まるで芝居でもするやうですね？ そんな事を考へついたのはきつと妹に違ひありません。だが、そんな事は如何でも構はない。あなたは直ぐこれから、私の處へお出で下さらんか？ 私の處は此處からたつた十露里です。私は良い馬を持つてゐます。風のやうに飛ぶ奴です——今夜泊つて明日朝の中だけ居ることにし給へ——すれば私は明日三時まであなたを送つて來ますから。御同意ですか？」

「どうぞ。」とネツダーノフはいつた。マルケーロフが入つて來てから彼の氣持は興奮と困惑との状態にあつた。彼に對するマルケーロフの唐突な親密さが彼を狼狽させた、と同時に、彼に惹きつけられたのであつた。彼は自分の眼の前にある一人の人物が、いかにも陰鬱ではあるが、疑ひもなく誠實な強い男だといふ事を感じもし、了解もした。それから又林の不思議な出會やマリ安娜の思ひ掛けな説明を……。」

「宜しい、素敵だ！」とマルケーロフは叫んだ。「君は直ぐ支度し給へ、僕はいつて馬車を用意させま

すから。君は此處の主人達にも断つて行く必要はないでせう？」

「僕は断つて行きます。黙つて外出しては悪いやうに思ひますから。」

「それは僕が云ひませう。」とマルケーロフは云つた。「心配したまふな。此家の連中は今骨牌に夢中になつて居るだらう。君が外出したことなんぞに気が付きはしません。私の義弟は偉い政治家になるつもりで居るが、彼を保證してやつて可いのは骨牌が素晴しく巧いといふ事だけです。だが、要するに多くの人間はあんな風に地位を作つて行くんだ……ちや君は支度し給へ、私は直ぐ用意しますから。」

マルケーロフは出ていつた。それから一時間の後、ネツダーノフは廣くゆとりのある、乗心地い、古ぼけた馬車の中の幅の廣い柔皮の坐褥の上へ彼と並んで坐つてゐた。馭者臺に坐つたづんぐりした小柄な馭者は鳥の鳴聲を素晴しく上手に口笛で吹き鳴らしていつた。編みである黒い蠶と尾とを持つた三頭の斑ら馬は、平坦な路の上を飛ぶやうに走つていつた。あたりには早くも深夜の蔭が掩ひかゝつて（彼等が出立したのは丁度十時を打つた時であつた。）樹々や、灌木叢や、畑や、平野や、谷間やが進んだり退いたりしながら滑らかに傍を這つて行つた。

マルケーロフの小さな所有地は（それは凡そ五百何十エーカーから成立つてゐて、七百留ぐらひの收穫しかなかつた……ボルジョニコウオといふ地名であつた。）縣の街から三露里ばかりの處であつ

た。シブヤーギンの所有地はそこから尙七露里ばかり向ふにあつた。ボルジョニコウオへゆくには、街を通り抜けなければならなかつた。この新しい友達同士がまだ五十程も會話を交はさない中に、馬車はもう街の郊外へ入つて、碎れかゝつたやうな、屋根の傾いた、いびつになつた窓から暗い灯影のぼんやり洩れてゐる、見すばらしい小さな職工達の小舎がちらほら目にはいつて來た。する中に、車輪の下で、街の舗石のから／＼いふ響が聞えた。馬車は突き上つたり左右に揺れたりした。そしてぐら／＼揺れ動いたんびに、破風のついた二階建の石造の商店や、圓柱のある會堂や、居酒屋やを通り越した……安息日の前夜であつた。往來には人影が見えなかつたが、居酒屋にはまだ客が一ぱい居た。そこには怒鳴り聲や、酔ひどれの歌ふ聲や、泣くやうな風琴の音色が聞えてゐた。不意に開いた扉口から、むつとするやうな牛濇い強いアルコールの匂と燈火の紅い光とが流れて來た。どの居酒屋の前にも、毛のもぢ／＼した太鼓腹の小馬を繋いだ百姓達の小さな荷馬車が置いてあつた。馬は蓬々とした頭をおとなしく垂れ下げながら、眠つてゐるやうに靜かに立つてゐた。襤褸を着て、帯をゆる／＼にした、頸へ袋のやうに先のぶら下つた大きな冬帽子を被つた百姓が、時々居酒屋から出て來て、胸をぐたりと握棒に押しつけて、ちつと立寄りながら何か盲目探でもするやうに手をふら／＼泳がしてゐたり、ひしゃげた帽子を被つて、木綿のシャツの胸をはだけた、疲れ切つたやうな職工が、洗足の儘

……種は居酒屋に置いて来たので……ふらふらと二足三足歩いたかと思ふと、一寸々停つて、頸の背後を掻きむしつて、不意に呻吟聲を揚げながら、後戻りをしたりしてゐた。

「露西亞の百姓はブランデーのために腐りかゝつてゐる」とマルケーロフは悲しげに云つた。

「悲しいから飲むでさ、セルゲイ・ミハロフキツチ。」と馭者が振り向きもせず云つた。居酒屋の前を通る度に彼は口笛を吹くのを止めて、深く思ひ沈むやうに見えた。

「急いで！ 急いで！」とマルケーロフは自分の外套の襟を亂暴に引張りながら答へた。馬車は闇の霧やキヤベツの悪臭のむん／＼する市場を横ぎつたり、門の處に白と黒の縞に塗られた暗舎の立つてゐる知事の家や、見物櫓の立つた警察署や、遂ひ此頃植へられたばかりの樹がもう半ば枯れてゐる遊歩場や、大の吠え立てる聲と鎖のちやらん／＼いふ音の騒がしい天幕小舎賣場やを通り過ぎて、だん／＼と町端れへ近づいた。そして又、夜の涼しい間にと遅くなつてから出發した荷馬車の長い／＼行列を追ひ越して、再び廣漠とした平野の爽やかな空氣の中へ突進んで、柳の植つた街道を再び滑らかに飛ぶやうに走つてゐた。

マルケーロフは……此處で彼の事を少し云つて置かなければならない……彼の妹のシプヤーギン夫人よりも六つ年上であつた。彼は砲兵學校で教育を受け、そこを出て少尉になつた。が、中尉に昇進

すると間もなく、獨逸人司令官と衝突して、軍隊を退かなければならなかつた。それ以來彼は獨逸人を、殊に露西亞獨逸人を憎むやうになつた。彼の退職のために父親との間に悶着が出来て、その後は臨終の時まで殆んど父親に會はなかつた。従は父親から僅かな所有地を愛繼いで、今そこへ住んでゐるのであつた。ペテルブルグでは彼は始終色々な智識階級の進歩した人達と交際してゐた。その人々を彼は非常に尊敬してゐた。その人々が彼の物の考へ方をすつかり形造つてくれたのであつた。彼はあまり讀書をしなかつた……主に政治問題に關係した書物……殊にヘルツェンを讀む位なものであつた。彼は軍隊で習慣を守つてゐて、スパルタ人か坊さんのやうな生活をしてゐた。一三年前に彼は或る若い娘と熱烈な戀に落ちたことがあつたが、その娘はこの上もない薄情な仕打ちで彼に寢返りを打つて、或る傳令使と結婚してしまつた……それも獨逸人であつた。マルケーロフは傳令使といふものをも憎むやうになつた。彼は始終露西亞の砲兵の缺點について論文を書かうとしてゐた。が、彼は文章を作る才能を少しも持たなかつた。たゞ一篇の論文をもお終ひまで書き上げたことは一度もなかつた。それにも拘らず彼はのたくつたやうな、讀み悪い、子供のやうな手跡で、灰色になつた大きな紙へ幾頁か書かうとして努力をつゞけてゐた。マルケーロフは精力の強い、頑固な、大膽な人間であつた。彼は彼自身の不幸と凡ての虐げられた人々の不幸に對して常に怨恨を抱いてゐて、許したり忘れ

たりすることは決してしないで、何物に對してもその用意をしてゐるのであつた。彼の偏狭な知識はたゞ一點に向つて集注してゆくのであつた。彼に理解のゆかない事柄は、彼にとつては存在しない所のものであつた。が、彼は瞞着や不正を嫌悪してゐた。上流社會の人々に對しては、彼が *dog* (饒舌家共) と呼んでゐる人々に對しては、彼は不愛想であり無作法でさへあつた。貧乏な人々に對しては眞率であり、農夫に對しては兄弟のやうに親密であつた。彼は自分の所有地を非常に具合よく處理してゐた。彼の頭は社會主義的な計劃に湧き立つてゐたが、その計劃も砲兵の缺點についての、論文と同様に進捗さしてゆくことが出来なかつた。大體に於ては——如何なる時にも、如何なる事柄にも成功しなかつた。聯隊では同僚から「不成功」といふ綽名をつけられてゐた程であつた。彼は誠實で、公明正大で、熱情的で、不幸な性質でありながら、或る瞬間には悪魔といつても好いやうな、無慈悲な、冷酷な態度を示すことが出来るのであつた。そしてそれを同様に躊躇したり反省したりする事なしに、全然自分を犠牲にする事も出来るのであつた。

街から三露里ばかりの處で、馬車は不意に白楊の森の靜かな薄闇に入つて行つた。目に見えない木の葉がさら／＼と鳴つて、新鮮な、強い森の匂ひが漂つてゐた。上の方にはぼんやりした光の斑點が見え、下には暗い蔭が入れ亂れてゐた。赤銅の楯のやうな赤い大きな月が、もう地平線の上に昇つてゐ

た。林の中を出たかと思ふと、馬車はもう小さな屋敷の前に來てゐた。月の姿を隠してゐる屋根の低い家の正面に、灯影の明るい三つの窓が正方形にあか／＼と輝いてゐた。門は一ぱいに開いてゐて、何時も閉めたことがないやうに思はれた。中庭の薄闇を透して、そこに白い二頭の厩馬をつけた丈の高い運送馬車が一臺見えた。二匹の白い仔犬が何處からとなく走り出して來て、荒々しい吠聲ではないが、鋭いきやん／＼いふ聲で鳴き立てた。家の中では人々が往つたり來たりしてゐた。馬車は階段の前で停つた。幾らか窮屈さうに馬車を出て、よくあるやうに村の鍛冶屋が不便な位置に取附けた鐵の踏臺に片足をかけながら、マルケーロフはネツダーノフに向つていつた。「到頭着きました。あなたは此處であなたのよく知つてゐる、併しまるで思ひ掛けなかつた人達に會ひますよ。さあ入つて呉れ給へ。」

十一

この人達といふのはオストロデューモフとマッシュリーナであることが分つた。彼等は二人ともマルケーロフの家の小さな見すばらしい家具を備へつけた客間に坐つて、ビールを飲んだり石油ランプの火で煙草をつけ／＼してゐた。彼等はネツダーノフの來たことを驚かなかつた。マルケーロフが彼を

連れて来るつもりでゐた事をもう知つてゐたのであつた。が、ネツダーノフは彼等を見ると非常に驚駭した。彼が其處へ入つた時オストロデューモフは云つた。「御機嫌よう、兄弟。」そして其れだけであつた。マシユリーナは最初すつかり赤くなつて、それから手を差出した。マルケーロフはネツダーノフに向つて、オストロデューモフとマシユリーナとがもう近い中に具體的形式を取る事になつてゐる。「黨の計劃」のために派遣されて來たことを説明した。そのために二人は一週間前にベテルブルグから來たのだと云ふ事、オストロデューモフは宣傳のためにS——縣に逗留してゐたと云ふ事、その間にマシユリーナは或る人に會ふためにK——へ行つて來たと云ふ事を説明した。

マルケーロフは誰れか反對したわけでもないのに、不意に興奮した。彼は口髭を咬んで、眼をぎら／＼させながら、噎れてはゐるが判然として興奮した聲で、自分達の周圍に行はれてゐる恐ろしい多くの不正行爲と、緊急的行動の必要とについて饒舌りはじめた。凡てはもう準備が調つてゐるのだと云ふ事や、少しでも躊躇してゐるのは時病者だと云ふ事や、腫物を切るのは容易なことではあるがやつぱり手術刀の必要があるやうに多少の暴舉は止むを得ないと云ふ事やを主張した。彼はこの手術刀の比喩を幾度も繰返した。明かにそれが彼を喜ばしたのであつた。この比喩は彼の發明ではなく、何かの本で讀んだのであつた。彼はマリアンナと情緒を交感する希望を全然失つてしまつたので、最

早や失ふべき何物も持たないかのやうに、そして今は唯出來るだけ早く「黨の計劃」に着手したいと考へてゐるかのやうに見えた。彼の言葉は眞向から斧を打ち下すやうに辛辣で、單純で、執拗であつた。彼の言葉は猙獰な年取つた番犬の皺枯れた吠聲のやうに一言一言重々しく單調にその青ざめた唇から響いた。彼はこの附近の百姓や工場労働者をよく知つてゐると話した。そしてその中には何時何事も引受けるやうな手頼になる人間が……例へばゴロブリヨフ村のエレメイのやうな人間が……幾人もゐると云つた。ゴロブリヨフ村のエレメイと云ふのは絶えず彼が話してゐた男のことであつた。十言ばかり饒舌るたびに彼は右の手をもつて、手掌でではなく拳固で卓を叩いたと同時に彼は左の手の母指だけを空へ向けて鼻先へ揚げた。彼の毛むくじやらかな筋張つた手や、その指や、噎れた聲や、ぎら／＼した眼やが力強い印象を與へた。途中ではマルケーロフはネツダーノフに大して物を云はなかつた。彼の怒りが心中に湧き上つてゐたのであつた……が、今其れが爆發したのであつた。マシユリーナとオストロデューモフとは微笑んだりちら／＼眺めたり、時々短い感動詞を叫んだりして彼を喝采してゐた。ネツダーノフは、心中に何となく奇怪な思ひを感じてゐた。最初彼は駭論を試みやうとした。性急のためや輕舉妄動のために起る損害について論じた。殊に何の疑惑をも持たず、よく周圍の事情を調査する必要のあるのを顧みず、民衆が何を要求してゐるかを確然と見究めもせず、凡の事

が決定されたのを驚いてゐた……が、その中に彼の神経はだん／＼と興奮して、豎琴の糸のやうに顔へ出した。そして一種狂氣のやうな状態になつて、眼に怒りの涙を浮べないばかりな容子で、絶叫するやうな聲でマルケーロフが云つたと同じ精神を、マルケーロフよりも一層熱烈に論じはじめた。どんな感動が彼の心中に起つてゐたのか？ それを知ることが出来なかつた。最近自分が遠巡とてゐたことは耻ぢたのか、自分自身に對しても他人に對しても焦燥さを感じたのか、手中に喰ひ入つてゐる或る蟲を退治やうとしたのか、さもなければ今再び出會つた仲間の前に自分の態度を膨脹して見せたのか……事實またマルケーロフの言葉に感動して……血が沸き立つたのか？ 議論は夜の明けるときで續いた。オストロデューモフとマシユリーナとは自分の席から立たなかつた。マルケーロフとネツダーノフは腰を下さなかつた。マルケーロフはちやうど哨兵のやうに同じ場所に突立つてゐたが、ネツダーノフの方は緩くりしたり足早になつたり不揃ひな歩調で部屋の中を歩き廻つてゐた。彼等は取るべき手段や方法について、自分達の負ふべきそれ／＼の役割について論じた。色々な種類の小冊子だのピラだのを探り分けたり、束に結びたりした。それから又、無教育ではあるが非常に手頼になるゴルーシユキンと云ふ非國教徒の商人のことや、非常に性急で自分の知識を高く見過ぎてはゐるが、聰明な人間である、キスリヤーコフと云ふ、宣傳者のことやを話し合つた。ソローミンの名前も話に出

た……。

「木棉工場を監督してゐる男の事ですか？」とネツダーノフはシプヤーギン家の食卓で出たその男の噂を思ひ出しながら訊いた。

「さう、その男の事です。」とマルケーロフは答へた。「君はあの男と知己にならなければ可けない。我々はまだ充分にあの男の事を調べてないが、確かに眞面目な手頼になる男です。」

ゴロブリヨフ村のエレメイの事が再び噂に上つた。それにつけ加へてシプヤーギン家にゐるキリーの事や、「眼面」と綽名されてゐるメンデレー某と云ふ男の事なども出た。が、その「眼面」だけは其れ程手頼にはならない男であつた……彼は素面の時には獅子のやうに大膽であるが、酔つ拂ふと臆病者になるのであつた、そして殆んどいつも酔つ拂つてゐるのであつた。

「そしてあなたの家の者には。」とネツダーノフはマルケーロフに向つて訊いた。「手頼になるものがありますか？」

マルケーロフは少しは居ると答へた。が、名前は一人も擧げなかつた。そして街の職工や神學生の事に話を向けて、彼等は體力が強いから、若し拳をもつて戦ふと云ふやうな場合には、どんなに大きな役に立つかも知れないと云つた。ネツダーノフは貴族達について質問した。マルケーロフは五六人

の若い貴族がゐると答へた。その一人は確かに獨逸人であつた。その男は一ばん過激ではあるが、勿論彼は獨逸人に對しては信用を置くことが出来なかつた……獨逸人は何時か諸君を裏切つて諸君を蹂躪するかも知れないと云つたが、この點についてはキスリヤコーフが知らせることになつてゐる報告を待たなければならなかつた。

「では軍隊は？」とネツダーノフは訊いた。

これを聞くと、マルケーロフは躊躇した。長い髯をひねりながら、何にも確かな事は分つてゐない……多分キスリヤコーフが何か搜つて来るだらうと到頭きつぱりと云つた。

「ですがそのキスリヤコーフと云ふのはどんな男です？」とネツダーノフは苛立つて訊いた。

マルケーロフは意味ありげに微笑んだ。

「或る一人の男です……或る一人の……併し私は個人的にはあまりよく知らないのです。」と彼はつけ加へた。「たつた二度會つた切りだから。併しあの男の手紙があります……手紙が！ それを君に見せやう……君はきつと驚くだらう。まるで焔のやうだ！ それにあの男の活動力と云つたら！ 少くとも五遍か六遍は露西亞中を歩き廻つてゐます……そして到る處の驛から十頁も十二頁もある手紙を寄越してゐます！」

ネツダーノフは搜るやうな眼付でオストロデューモフを見詰めた。が、彼は彫像のやうに坐つて、自叩き一つしなかつた。一方のマシュリーナな屹と結んだ唇に苦々しい微笑みを浮べてゐたが、彼女も魚のやうに黙り込んでゐた。ネツダーノフはマルケーロフが自分の領地に對して社會主義的な處置を取らうとしてゐると云ふ、其改革について訊かうとした……すると、オストロデューモフがそれを遮つた。

「今そんな事を議論したところで何の役に立つんだ？」と彼は云つた。「如何だつていゝこつた。凡ての改造は後のことだ。」

會話は再び政治問題に歸つた。ネツダーノフは依然として心中に人知れぬ蟲が喰ひ入つてゐることを感じてゐた。が、心中の苦痛が烈しければ烈しい程彼は一層聲を揚げて、熱烈に饒舌るのであつた。彼はたつた一杯ビールを飲んだだけであつたが、全然酔ひどれて了つてやうな氣がした。頭の中がぐら／＼して、心臓は息苦しく動悸打つてゐた。到頭朝の四時を打つ時分になつて議論はお終ひになつた。控室に眠つてゐる小さい給仕を起さないやうにと足音をひそめて、彼等が別々に各自の部屋へ行つた。ネツダーノフは床へ入る前に、自分の床板を見詰めたまゝ長い間ちつと佇んでゐた。彼はマルケーロフの饒舌つた言葉に籠つてゐた胸を絞るやうな悲痛な調子を絶へず思ひ出した。マルケーロフ

の自尊心は傷けられずには濟まなかつたのである。彼は苦まずにはゐられなかつたのである。自分の個人的幸福についての希望は路を閉されて了つたのである、然も尙どんなに彼は自分自身を忘れてゐるか！……どんなに彼は彼が道理として信じてゐる所の物に自分を全然捧げてゐるか！「偏狭な性質。」だとネツダーノフは思つた。「だが、斯んな……例へば自分が今持つてゐるやうな斯んな性質よりも、あの偏狭な性質の方が百層倍も良いではないか？」

が、直ぐに彼は自分の卑屈な感情に反抗した。

「何故さうなのか？ 俺だつて自分を犠牲にすることが出来ないだらうか？ まあ待て、我が友達よ

……そして汝パークリンよ、よし俺が美學の學生であらうと、詩を作らうと、今に見給へ、諸君を首肯させてやるから……」

彼は腹立たしげに頭髮を後方へ振りのけて、嚙を喰ひしばつて、急いで上服を脱ぎすて、濕つばい冷めたい床へ飛び込んだ。

「お休みなさい。」マシユリーナの聲が扉の向う側から聞えた。「あなたと隣り合せですよ。」

「お休み。」とネツダーノフは答へた。すると彼女が一晚中自分から目を離さずにゐたことを思ひ出した。

「彼女は何を思つてるんだらう？」と彼は呟いた。と同時に自分で氣耻しくなつた。「お、早く眠らう、眠らう！」

併し彼の興奮して神經をしづめることは困難であつた……到頭彼が重苦しい不快な目捷に沈んだ時には、もう太陽が空高く昇つてゐた。

次の朝彼は頭痛がしてゐたので遅くなつてから起き上つた。彼は服を着換へて、その屋根裏部屋の窓際へ行つた。そしてマルケローフが事實耕地と云ふものを少しも持つてゐないことを知つた。彼の小さな番小舎は樹立のある處から幾らも距つてゐない狭間に立つてゐた。その一方には小さな納屋や厩や畜や、半ば崩れてゐる草葺屋根の小舎などがあり、もう一方には小さな池や狭い菜園や大根畑や、同じやうな屋根をもつたもう一つの小舎があつた。すつと向うの方には小麥を蒸す竈場や納屋や、がらんとなつてゐる穀打場や……眼の前に展げられた財産は凡てこれだけであつた。これ等は凡て哀れな有様に荒廢しかゝつてゐた。而もそれは手入れをしないで放つたらかしてあつたのではなくて、根の充分附かなかつた樹のやうに一度も榮えたことがないやうに思はれた。ネツダーノフは階段を下りた。マシユリーナが客間にサモワルを前にして坐つてゐた。明かに彼を待つてゐたらしかつた。オストロデューモフは黨の仕事のために出掛けたから二週間は歸つて來ないだらうと云ふことや、マルケ

「ロフは職人達を見廻りに行つたと云ふことを彼はマシュリーナから聞かされた。五月も終りに近づいてゐたし、差迫つてする仕事もなかつたので、マルケーロフは請負師の手を借りずに小さな樺林を伐り拂ふ計画をしてゐた。そのために彼は朝早く出て行つたのであつた。

ネツダーノフは妙に神氣沮喪してしまつた。昨夜は幾度となく最早や躊躇してゐることは出来ないと云ふ事が叫ばれた。今は唯一「行動する」と云ふ事が残されてゐるだけだと繰返された。併しどんな風に行動するのか？ どんな方面に向つてするのか？ どんな風に躊躇しないですか？ マシュリーにそんな事を訊ねるのを無駄であつた。彼女は躊躇と云ふことを知らないのである。彼女は自分の爲すべきことには何にも惑ふ所はないのである。それは「——へ行かなければならないと云ふことであつた。その外のことを彼女は何にも顧みなかつた。ネツダーノフは彼女に向つて何を云つたら好いのか分らなかつた。そしてお茶を少し飲むと、帽子を被つて、樺林の方へ足を向けた。途中で彼は以前マルケーロフの農奴であつた幾人かの百姓が肥料を運んでゐるのに出會した。彼は彼等に話しかけた……が、大して得るところはなかつた。ネツダーノフが今経験してゐるやうな因慮した氣持とは全然異つた、普通の肉體の疲勞のために、彼等もやつぱり神氣沮喪してゐるやうに思はれた。彼等の以前の御主人は、その云ふ所に依れば、人の善い、質朴な旦那ではあるが、偏屈な人だといふの

であつた。彼等はこの旦那の破滅を豫言した、と云ふのは「あの方は物を處理する方法が分つてゐない。そしてあの方の祖先が、これまで遣つて來たやうにしないで、あの方の自分の遣り口であるからだ。それに餘り懶巧すぎる……これでお分りにならなきや、あなたの好きなやうに考へさつしやい、だが、滅多にない人の善い旦那だ」といふのであつた。ネツダーノフは、尙向うの方へと歩いて行つた。するとマルケーロフもその人に出會つた。

彼は職人達に取り捲かれながら歩いてゐた。彼が何事かを饒舌つたり、説明したりしてゐることは遠くから分つた。する中に彼は「これや駄目だ！」とでもいつた風に矢鱈に手を振つた。彼の傍に鈍い眼付をした、容子のさつぱり引立たない若い管理人が歩いてゐた。この管理人はもつと何か彼一個の意見を聞きたく思つてゐる主人をむしやくし、やさせる程小煩さく「仰せの通りでございます、あなた様」と絶へず繰返してゐた。ネツダーノフはマルケーロフに近づいた。そしてマルケーロフの顔にも彼が感じてゐたと同じ内心の疲勞の色が浮んでゐるのを見た。二人は挨拶を取交はした。マルケーロフは直ぐ簡単に昨夜議論した様々な問題や來らんとする革命について話し始めた。彼は身體中塵埃だらけになつて汗をかいてゐた。服の上には材木の鉋屑や青い苔の片がくつ附いてゐた。その聲は暖れ聲になつてゐた……彼を取り捲いてゐる男達は、みんな黙り込んでゐた。彼等は彼を恐れてゐたの

か、それとも面白がつてゐたのか分らなかつた……ネヅダーノフは、マルケーロフをちつと眺めてゐた。するとオストロデューモフの云つた言葉が再び頭に浮んで來た。「それが何の役に立つんだ？　どうだつて可いちやないか、凡ての改造は後のことだ！」

何か間違ひを仕出來した一人の職人が、その過失の罰金を免して頂きたいと哀願しはじめた……マルケーロフは最初かつと腹を立つて酷く怒鳴りつけたが、その後で彼はその職人を赦した。「そんなことはどうだつて可いちやないか……凡ての改造は後のことだ。」

ネヅダーノフはシプチャーギン家に歸るために馬と馬車とを云ひつけて呉れるやうにと彼に向つて云つた。マルケーロフはこの要求に驚いたやうであつたが、直きに凡てを留意させやうと答へた。

彼はネヅダーノフと一緒に、住居へと引返した……彼は疲勞のためにひよろ／＼しながら歩いてゐた。

「如何したんです？」とネヅダーノフは訊いた。

「疲勞してしまつたんです！」とマルケーロフは荒々しい調子で云つた。「あいつ等には幾ら説明してやつても、少しも分らんです。そして少しも私の指圖通りにしないのです……あいつ等には露西亞語さへ分らんです。『分け前』と云ふ事はよく知つてゐるのに、『分け前を共同にする』と云ふ言葉は……」

「分け前を共同にする」とはどう云ふ意味であるか、彼等に分らんです。併しこの言葉だつて立派な露西亞語ぢやありませんか！　彼等は私が土地をそれ／＼同じやうに分けて遣るとでも思つてゐるのです。」

マルケーロフは「共同組合」の原則を百姓達に説明して、自分の領地にそれを實行しやうと考へてゐたのであつたが、彼等はそれを拒んだのであつた。彼等の一人はこれについて斯んなことまで云ひ出しさへした。「前から深い陥穿がゐてゐたが、今ぢや底も見えねえくらひだ……」すると他の百姓達は深い溜息をついた。斯うしてマルケーロフの意気込みはすつかり挫かれて了つたのであつた。

家へ着くと彼は供の者を歸して、馬車のことや馬のことや中食のことを氣遣ひ出した。彼の一家はたつた一人の子供の給仕と料理人と馭者と、以前祖父の側使であつた非常な老人で、裾の長い木棉の上衣を着てゐる、耳の毛むくぢやらな男と、それだけで成り立つてゐた。この老人は酷く落膽したやうな眼付で何時もちつと主人を見詰めてゐた。彼は何一つしなかつた、多分何もすることが出來なかつたのであらう。が、彼はしよつ中扉口の闕のところを畏まつてゐた。

茹卵と鱈と切肉との中食……子供の給仕が古いポマードの甕に入れた芥子とオードコロンの瓶に入れた酢を差出した……が終ると、ネヅダーノフは前の晩乗つて來たと同じ馬車に乗つた。が、今日は

二頭曳ではなく二頭の馬しかつけられてゐなかつた。中食の間マルケーロフは録に物も云はず、何にも食べもしないで、憊ましげに溜息をついてゐた……彼は自分の所有地のことで一言三言悲しげに饒舌つてこんな事はどうだつて可んいだ、凡ての改造は後のことだ。……とでも云ふやうに再び手を振つただけであつた。

マシユリーナは一緒に町まで乗せてつてくれるやうにとネツダーノフに頼んだ。彼女はそこへ行つて買物がしたいと云ふのであつた。歩いて歸れますは、で無ければ百姓の荷馬車に乗せて貰ひますから。」

マルケーロフは階段まで二人を送り出して、近い中に又ネツダーノフの處へ訊ねてゆくからと曖昧に云つた、そして歸つて又（彼は身體を揺つて再び元氣になつた）……みんなは決定的な處置を取るに相違ないと云ふことや、ソローミンも遣つて来るだらうと云ふことや、マルケーロフ自身はワシーリイ・ニコラエヰキツチの通知を待つのみだと云ふことや、今は唯速やかに「行動」すると云ふことが残されてゐるばかりだと云ふことや、百姓達は「分け前を共同にする」といふことの解らない百姓達は「最早や頼むに足りないといふことやを語つた。

「お、あなたは僕にあの男の……キスリヤコフとかいふ……あの男の手紙を見せてくれる筈でし

たね、」とネツダーノフはいつた。

「手紙……」とマルケーロフは慌てゝ答へた……「今にすつかり見せませう……皆一緒に。」

馬車は出立した。

「ぢやその心算でゐたまへ？」とマルケーロフの最後に叫んだ聲が聞えた。彼は階段に佇んでゐた。その傍には一言も耳に聞えない例の落膽したやうな顔付をした、模範的な従僕の老衰した側使が、兩手を腰の背後で握り合はせて、曲つた腰を吃つと伸ばして、麥麵麴の匂やフアスチアン木棉の匂をさせながら立つてゐた。

街へゆく途中、マシユリーナは黙り込んだ儘巻煙草を吹かしてゐた。町端れへ近づいた時彼女は突然大きな溜息をついた。

「セルゲイ・ミハロヴキツチは可哀相な人ですわね。」と彼女は云つて顔色を暗くした。

「あの人は色々な勞苦のために落膽してゐるんです。」とネツダーノフはいつた。「所有地が惨めな有様になつてゐるやうですからね。」

「私がいふのはそのことぢやないんです。」

「ぢや、何です？」

「あの人の不幸なことですわ。あの人は不仕合せな人ですわ！ あんな善しい人が、何處にありませう？ けれども誰れも……誰れもあの人を對手にしないんですもの。」

ネツダーノフは自分の連れの顔をちつと見詰めた。

「ぢや、あなたはあの男のことを何か聞いたんですか？」

「私は何にも聞きません……でも、ひとりでに分りますわ。ぢや左様なら、アレキセイ・ドミトリツキツチ。」

マシユリーナは馬車を下りた。それから一時間の後ネツダーノフはシプヤーギンの家の中庭に馬車を乗りつけた。彼は気分が重くてならなかつた、……一晩中眠らなかつたのと……それにあの議論や……あんな話や……」

美しい顔が一つの窓から覗き出して、彼の方へ蕭やかに微笑みかけた……それはシプヤーギン夫人が彼の歸つて來たのを迎へてゐるのであつた。

「彼女は何と云ふ眼付を持つてゐるのだらう！」と彼は思った。

十二

晚餐には大勢の人が集つてゐた。晚餐が終るとネツダーノフは、みんながや／＼してゐる隙間にこつそり抜け出して、自分の部屋へ歸つた。彼は昨夜から旅で得て來た印象を想ひ出して見るために自分一人でゐたかつたのであつた。食卓にゐた時ワレンチナ・ミハロウナは、幾度となく熱心に彼を見詰めてゐたが、明らかに彼女は彼に話しかける機会を得なかつたやうに思はれた。マリアンナは彼を驚かしたあの唐突な打明け話以來、自分を耻ぢて彼を避けてゐた。ネツダーノフは、ベンを取り上げた。彼は友達のシーリンと手紙の上で話をしたく思つた。が、彼はこの友達に對してさへ何と語つたらいゝのか分らなかつた。恐らく餘り様な矛盾した思想と感情とが、頭の中で纏れ合つてゐたからであらう。彼はその纏れを解きほごすことが出来なかつたので、手紙は次の時に延ばしてしまつた。晚餐の連中のうちにはカロミエーツエフ氏も來てゐた。彼は今までに會つて見せたこともないほど傲慢な態度と紳士然とした尊大さを現はしてゐたが、その自由な輕妙な言葉も、ネツダーノフには何の影響をも與へなかつた。彼は全然そんな言葉に注意を拂はなかつた。彼は一種雲のやうなものの中に閉ぢ籠つてでもゐるやうであつた。それが彼と他の世界の凡ゆる物との間に薄暗い帷帳のやうに垂れ下つてゐた……そして不思議にも、彼はこの帷帳を透してただ三つの顔を見分けることが出来たばかりであつた。その三つは何れも女の顔であつた。何れもその眼が熱心に彼を見詰めてゐた。それはシ

ブヤーギン夫人と、マシユリーナと、マリアンナとであつた。「何と云ふことだらう？ 何故特にこの三つの顔なのだらう？ 彼等はどんな共通點を持つてゐるのだらう？ そして自分に何を求めてゐるのだらう？」

彼は早く床に入つた、が、眠り就くことが出来なかつた。彼は陰鬱な、とは云へ實際には苦痛を感じないと考へ……避け難い滅亡についての考へ、死についての考へに驅られてゐた。それは何時かもう親馴になつてゐる考へであつた。長い間彼はこの考へに就いて、今滅亡を豫想して戰慄するかと思ふと、やがて又それを歡び迎へて、殆んど喜悅を感じながら様々に思ひめぐらしてゐた。彼は到頭自分によく分つてゐる一種異常な興奮を感じた……彼は起き上つて書卓に向つた、そして一寸の間考へ込んで、殆んど書損ひをせず、次の詩を彼の秘密の帳面に書きつけた。

親愛なる友よ、私の臨終が來た時、

私の願ふところは斯うである。

私の書いたものを皆積重ねて焼きすてゝくれ、

私と同時に滅びて了ふやうに！

斯くて花をもつて私の周圍を飾り

私の部屋に日の光を導き入れ、

音楽者達を扉口に立たしてくれ、

そして物悲しい哀悼の歌はうたはせず、

酒宴の時のやうに、

愉快な胡弓を掻き鳴らし

浮きたつたやうな、騒ぎたくなるやうな

舞踏曲を弾かしてくれ！

かうして感覺を失つてゆく私の耳に陽氣な樂の音が消へ去ると共に

私は眠に落ちるやうに死にたいのだ。

そして無益に歎き悲んで

死と共に來る平和を損はないでくれ。

この世の愉快な享樂の

愉快な旋律にあやされて眠りながら

私はあの世へ行きたいのだ。

「規愛なる友よ」といふ言葉を書いた時、彼はシーリンのことを思つてゐた。彼は自分でその詩を小聲に歌つて見て、自分のペンから如何してこんな詩が流れ出したかを驚いた。この懷疑、この無關心、この輕薄な信仰の缺乏、それ等が彼の主義とどんな風に一致したのか？ マルケーロフの家で云つた議論とどんな風に一致したのか？ 彼は卓の抽出に張面を投げ込んで、床へ歸つた。が、彼がやつと眼りついたのは、夜が明けて早い雲雀が蒼白んで行く空に囀り出した時分であつた。

その次の日、彼は日課を終つた後で、球戯室に坐つてゐた。シプヤーギン夫人が入つて來た、そしてあたりを見廻して、微笑みながら彼に近づいて、自分の部屋へ來てくれるやうにと云つた。彼女は非常に質素な、可憐な輕いベレージの羅紗の服を着て居た。袖口が肘のところ、縁飾のやうに裝になつてゐた。廣いリボンが彼女の腰を締めつけてゐた。頭髮は頸のところへ厚ぼつたく渦を巻いて垂れ下つてゐた。彼女の身についてゐるものは何もかも……半分閉ぢたやうな眼の和らいだ輝き、優しい弱々しげな聲、身振り、歩き付などが——何もかも親切と思ひ遣り深い優情を、抑制した大膽な優情を漲らしてゐるやうに見えた。シプヤーギン夫人は自分の居間へネツダーノフを導いて行つた。晴れくとした魅惑的なその部屋は、花の香や、香水の匂や、婦人服の鮮やかな色彩や、婦人の始終起き臥してゐる氣配に充ちてゐた。彼女は彼を安樂椅子に就かせて自分もその傍に腰を下して、彼の旅

小行のことやマルケーロフの行動やを、いかにも巧みな、優しい、愉快な調子で訊き出した。彼女は自分の兄に對して眞面目な興味を持つてゐることを示した。彼女は今まで曾て一度もそんなことを、ネツダーノフに聞かせたことはなかつた。彼女の言葉から推し考へて、彼女はマリアンナが自分の兄に吹き込んだ感情を氣にしてゐるらしかつた。彼女の言葉は何となく憂はしげであつた……それは兄の感情がマリアンナから報ひられなかつたからか、それとも兄の選擇が何にも實際のことを知らない娘の上に落ちたか、どつちであるかは分らなかつた。が、大體に判然と分つたことは、彼女はネツダーノフを魅惑して、自分に對する彼の親密の情を起させ、彼に含耻むことを止めさせやうとしてゐる事であつた。ワレンチーナ・ミハロウナは彼が自分に對して間違つた考へ方をしてゐることを一寸非難する程までになつて行つた。

ネツダーノフは彼女に耳傾け、彼女の腕や肩を眺めてゐた。時々には又彼女の薔薇色の唇や微かに波打つてゐる彼女の頭髮やをちら／＼眺めてゐた。最初の間彼の答へは非常に簡單であつた。彼は咽喉と胸とが何となく塞がつてゐるやうに感じた……が、次第にこの感情は他の氣持ちと入れ交つて行つた。それも矢張り酷く昏亂した氣持ちではあつたが、一種甘い氣持ちであつた。彼はこれほど身分の高い美しい婦人が、これ程の貴族が、單に學生である彼に對して興味を寄せることがあらうとは曾て

想像したこともなかつた。それに彼女は單に、彼に興味を寄せてゐるばかりでなく、彼に對して少し媚びを呈してゐるやうにさへ見えた。どうして彼女はこんな風にするのだらうとネヅダーノフは自分と自分に訊いた。が、彼は答へを看出さなかつた、實際また答を看出さうとも思はなかつた。シプヤーギン夫人はコーリヤについて話をした。彼女がもつと彼と親密になりたく思つてゐるのは、單に彼女の息子について眞面目に話したいからだ、一般に露西亞の兒童教育について彼の意見を聞きたいからだとネヅダーノフに言明しさへし初めた。それならこの希望がこんなにも突然起つて來たと云ふことは誰れに云はしても餘りに奇妙だと云ふに違ひない。が、事實の根據はワレンチーナ・ミハロウナが今云ふことに横はつてゐるのではなくて、彼女が一種淫蕩な浪のやうな何物かに襲はれてゐるのだといふ事であつた。この頑固な人間を征服しやう、彼女の足下に跪かせやうとする渴望が、自らそこに現はれてゐた……。

が、この點については我々は一寸以前に遡らなければならない。

ワレンチーナ・ミハロウナは、五十年間勳績の標章として唯一つの勳章と緊金とを持つてゐた極めて愚かな氣魄のない將軍の娘で、彼女と同國の他の女と同じやうに非常に無邪氣な、寧ろ愚昧なと云ふていゝやうな容貌をもつてゐて、その容貌からこの上もなく大きな利益を引出す方法を知つてゐる、

非常に含羞やで密謀の好きな小露西亞人であつた。ワレンチーナ・ミハロウナの兩親は富裕な人ではなかつた。それでも彼女はスモールヌイ修道院で教育をうけた。其處では彼女は共和黨員として注目されてゐたが、懸命に勉強して、肅かに振舞つてゐたので、人々の上に立つてゐた。スモールヌイ修道院を出てから、彼女は彼女の母親と一緒に（彼女の兄は田舎へ行つてゐたし、勳章と緊金を持つた父親の將軍は、もうこの世を去つてゐたので）小さつぱりとした、が、非常に寒い貸部屋に住んでゐた。この部屋へ來て人々が話をする時には、口から出る息が蒸氣のやうに見えた。ワレンチーナ・ミハロウナはいつも其れを笑つて、「まるで會堂にゐるやうだ。」と云つてゐたものであつた。彼女は貧しい窮屈な生活状態の凡ゆる不快に堪へる元氣を持つてゐた。彼女は驚くべき愉快な氣質の持主であつた。母親のお蔭で彼女は知人との間柄を維持し、いろ／＼な手藝を拵へることが出來た。貴族社會の者でさへ誰れも彼女を非常に魅惑的な非常に育ちの良い、非常に教養のある娘だと云つてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナには會て幾人かの求婚者があつた。彼女はみんなの中からシプヤーギンを選んで、極めて簡単に迅速に巧妙に彼女の戀を成立させてしまつた……それにも拘らず、彼の方では實際自分にとつて彼女より優れた妻を看出すことは出來ないと直ぐに知つたのであつた。彼女は懶巧である上に少しも悪氣がなかつた……この二つに就いていへば、寧ろ人の善い方で、根本は冷めたく、無

關心な性質であつた……而も彼女は彼女に對して他人を無關心にさせて置くといふ考へには逆も堪へられなかつた。ワレンチーナ・ミハロウナは人を惹きつける力のふる自己主義者に特有な一種特異な溢れるやうな愛嬌をもつてゐた。その愛嬌の中には詩もなければ、眞の敏感さもないのであつたが、そこには温順さがあつた、思ひ遣りがあつた、優しみがありさへした。たゞ斯うした魅力のある自己主義の人は他人に逆はれる事を好まないものである。かう云ふ人は力と云ふものを愛してゐて、他人に獨立を許して置くことが出来ない。シプヤーギン夫人のやうな婦人は、無經驗な熱情的な人々を感激させたり動搖させたりはするが、自分自身は規則的な平靜な生活を好いてゐる。節制は彼等にとつては容易なことなのである、彼等の内心は少しも動搖しないのである、而も他人を煽動したり、惹きつけたり、喜ばしたりしたい不斷の慾望が、彼等の上に發動性と光彩とを添へてゐるのである。彼等の意志は堅固である、そして今云つた彼等の幻惑は半ばこの意志の力を借りてゐるのである。かうした華々しい純粹な人間の上を、和らかな神秘的閃めぎが無意識の中に通り過ぎてゆく瞬間には、男にとつて自分の位置を支へてゐることは困難である。彼は時が來て、氷が解け去るだらうと豫期しながら待つてゐる。が、冷明な氷は光の戯れを反映するばかりで、その氷は解けはしない、そして彼は決して光の入り亂れるのを見ることは無いであらう！

嬌態を見せることはシプヤーギン夫人にとつては譯もないことであつた。彼女は自分にとつては何の危険もないこと、決して危険のあり得ないことをよく知つてゐた。その間に他人の眼を曇らせたり輝き出させたり、他人の頬を慾望な恐怖のために赤くならせたり、顛へ聲にならせたり、あたふたした調子にならせたり、他人の心を苦しめたりする事は——お、彼女の心には如何に楽しいことであらう！ 夜遅く、彼女が自分の淨らかな奇麗な鼻に横はつて、安らかに眠りに入らうとしてゐる時、それ等の興奮した言葉や眼付や溜息やを思ひ出すことは、どんなに嬉しい事であらう！ どんなに幸福な微笑を浮かべながら、彼女は自分自身の中へ退いたらう！ 他人の近づき難い性質を持つてゐるといふ意識の中へ、他人に攻め落されない節制を持つてゐるといふ意識の中へ退いたらう！ そしてどんなに難かな謙遜した心持ちをもつて貴族育ちの夫の正常な拘擁に身を委したらう！ かういふ追想のために彼女は時々自分から感動して、何か慈善の行爲をしやう、他人を助けやうと考へた程それは彼女を慰めてくれるのであつた……曾て彼女を熱烈に戀した公使館の或る秘書官が咽喉を切らうとしたことがあつた時、彼女は小さな養育院を建てたことがあつた！ 彼女は子供の時分から宗教的觀念が乏しかつたに拘らず、その時にはその男のために内心からお祈りを捧げた程であつた。今もそんな風にして彼女はネツダーノフに話してゐた。そして如何かして彼を足下に跪かせやう

としてゐた。彼女は自分の方から打ち融けて行つた、詰り彼女は彼に對して自分の胸を開いて見せたのである。そして楽しい好奇心と、半ば母のやうな優しさをもつて、この奇麗な、面白い、嚴格な青年の過激論者が、次第にあたふたとした調子で彼女に答へはじめた容子をちつと見詰めてゐた。一日の中に、一時間の中に、一瞬間の中に……こんな事はみんな影も残さず消え去つて了ふに違ひなかつた。が、今彼女はそれを楽しく、面白く、寧ろ、情緒的に感動的にさへ思ふのであつた。他人の間で暮らしてゐる孤獨な人間にとつて、こんな問ひがどんなに喜ばれるものであるかを思ひながら、彼の血筋の事は忘れて、ワレンチーナ・ミハロウナは彼の少年時代のことや家族のことをネツダーノフに訊き始めた……が、彼の當惑した簡単な答へを聞くと、直ぐに仕損つた事に氣がついて、ワレンチーナ・ミハロウナは彼女の失策を取つてはうとして、彼の前に尙一層打融けて行きさへした……さながら眞書の氣怠い暖かさの中に満開の薔薇が香高い花瓣をすつかり開いて了ふやうに、勿論それは夜の新鮮な冷氣に觸れると直ぐにまたその花瓣を閉ぢるのではあるが。

とは云へ、彼女は充分彼女の仕損を揉み消すことに成功しなかつた。ネツダーノフは胸中の傷口に觸れられてから、もう今迄のやうに寛いだ氣持ちではゐられなかつた。始終彼の心の底に疼いてゐる傷ましい感情が又もや湧き上つて來た。彼の民主的な疑惑と自己非難の念とが、目覺めて來たのであつ

た。「俺はこんな事のために此處へ來たんぢやないんだ。」と彼は考へた。パークリンの皮肉な勸告が思ひ出された……そして彼は會話が途絶へた最初の瞬間を機會に起ち上つて、卒然ない點頭をして、まるで自分と自分に向つて「何て馬鹿な態だ」と咳かすにはゐられないかのやうな風で出て行つた。

彼の當惑した有様をワレンチーナ・ミハロウナは、見逃さなかつた……が、彼女が彼の出て行くのを見送つた時の微笑みから考へると、彼の當惑した有様を彼女は自分に媚びてゐる態度だと考へてゐたらしかつた。

球戯室でネツダーノフはマリアンナに出會つた。彼女は夫人の居間から幾らも距つてゐない窓のところに背中を凭せかけて、固く腕を拱きながら佇んでゐた。彼女は不意に黒い影でもさしたやうに顔色を暗くした。が、彼女の大膽な眼はいかにも怪訝さうに屹とネツダーノフを見詰めてゐた。堅く結んだ彼女の唇には、彼が昏惑してそつと立停つた程、いかにも輕蔑したやうな侮辱したやうな怨しげな容子があり／＼と浮んでゐた……。

「僕には何か話があるんですか？」と彼は思はず云つた。

マリアンナは直ぐには答へなかつた。

「いゝえ……でも、あるにはあるんですけど、今でない時に。」

「では、何時？」

「今に。多分——明日。多分……いえ、何時になりますか分かりませんわ。私にはあなたが本當はどんな方なんだか、ちつとも分らないんですもの。」

「併し。」と、ネッダーノフは始めた。「僕には時々こんな風に考へられてなりません……我々の間には……」

「それに私と云ふものがあなたには少しも分つていらつしやらないんですもの。」とマリアンナが遮つた。「けれど、まあ今に。多分、明日。今私は奥さんのところへ行かなければなりません。では左様なら、明日ね。」

ネッダーノフは二足ばかり行つてから、急に引返へした。「お、一寸、マリアンナ・ウイケンツエウナ……私は何時もあなたにお訊ねしたいと思つてた事があるんです。あなたと一緒に僕を學校へ連れてつて呉れませんか？……あなたが學校でどんな事をなすつていらつしやるか見せに……學校が退ける前に。」

「え、宜うございます……けれど私があなたにお話し、たいと思つてるのは學校の事ではありませんのよ。」

「では何です？」

「明日。」とマリアンナは繰返へした。

が、彼女は翌日まで話を延ばさなかつた。その日の晩方、露臺から大して距つてゐない菩提樹の並木路で彼女とネッダーノフとの間に或る會話を取り交はされた。

十三

最初彼女の方から彼に近づいた。

「ネッダーノフさん。」と彼女は氣忙しい調子で始めた。「あなたはワレンチーナ・ミハロウナにすつかり迷はされてしまつたんですね？」

彼女は答へを待たずに側の方を向いて、並木路を歩いて行つた。彼は彼女と並んで歩いた。

「どうしてあなたは左様思ふんです？」と彼は一寸黙つた後で云つた。

「さうぢやありませんの？ 若しさうで無いのなら、今日はあの人の掛引が拙かつたんですわ。あの人がどんなに抜け目のない業をしてゐたか、どんな風に小さな網を張つてゐたか私には分るやうな氣がしますわ。」

ネッダーノフは一言も云はなかつた。彼はたゞ側の方からこの奇妙な友達を見詰めるばかりであつた。

「ねえ宜うございますか。」と彼女は續けた。「私はいゝ加減な嘘をつくのが厭ですから本統を云ひますけれど、私はワレンチーナ・ミハロウナが嫌ひなんです……それはあなたにもよく分つてらつしやるでせう。あなたは私が間違つてゐるとお思ひになるかも知れませんが……まあ、考へて見て下さい……。」

マリアンナは聲の調子を變へた。彼女は眞赤になつて興奮し……彼女が興奮すると、殆んどいつも激怒した時のやうな有様になるのであつた。「あなたは多分。」と彼女は再び始めた。「何故この若い女はこんな事を僕に云ふんだらう、と思つてらしやるでせう？ あなたは屹度私がマルケーロフさんの事で或る事をあなたにお話しした時にも、やつぱりさうお思ひになつたでせう？」

彼女は不意にア停つて、小さい茸を摘み取つて、半分に引き裂いて、向うへ投げすてた。

「あなたは間違つてゐます、マリアンナ・ウイケンツェウナ。」とネッダーノフは云つた。

「却つて僕はあなたに勇氣をつけて上げたと思つてゐました……そしてそれは非常に愉快に思つてゐたのです。」

ネッダーノフは全然本統の事を云つたのではなく、この考へが不意に今頭に浮んだのであつた。

マリアンナは急に彼をぢろく眺めた。今まで彼女は執拗に側の方を向いてゐたのであつた。

「あなたが勇氣をつけて下さつた事なんぞ大したことぢやありませんわ。」と彼女は反響返しのように云つた。「あなたには少しも關係のないことですわ。けれどあなたの境遇と……私の境遇とは……まるで同じやうですね。私達はどつちも同じやうに不幸ですわね、私達の間が結びつけられるのはそのためですわ。」

「あなたは不仕合せなんですか？」とネッダーノフは訊いた。

「そしてあなたは……あなたは左様ぢやないんですか？」とマリアンナは答へた。

彼は何とも云はなかつた。

「あなたは私の身の上を知つてらしつて？」と彼女は性急に始めた。「私の父の事や、父が流刑にされた事を？ 御存じないの？ ぢやお話ししますわ。父は拘引されて、裁判をうけて、罪人として宣告されて、位階も……何もかも剝奪されて……シベリアは送られたんです。間もなく父は死にました。母も死んでしまいました。それから私の母の弟シプヤーギンが私の世話をして呉れることになつたんです。今私はあの人の食客でゐるんです。ですからあの人は私の恩人で、ワレンチーナ・ミハロウナも

私の恩人ですわ……だのに私は酷い恩知らずな報ひ方をしてゐるんです、それは私が片意地な心を持つてゐるからなんでせう……それに他人から貰つた麴麵は苦い味がしますから……そして私は辱しめられるやうな服従にうまく耐えてゆく事が出来ないんです……他人の恩恵に甘んじてゆく事が出来ないんです……私はそんな心持をうまく隠してゐる事も出来ないんです。そして私は絶えず小さな針で刺されるやうな思ひをしながら、自分が高慢のために泣き出したいのを、やつと堪へてゐるだけですわ。」

彼女はかうした切れ／＼な言葉を饒舌りながらすん／＼足早に歩いて行つた。が、彼女は不意に立停つた。

「あなたは叔母が……唯私を追ひ出したために……あの忌々しいカロミエーツエフに……私を結婚させるつもりでゐるのを知つてゐらしたつて？ 勿論あの人は私の考へを知つてゐるんですわ……何故つて、あの人の眼から見れば、虚無主義者なんでもの……それに又あの人は勿論少しも氣に入られてはゐないんです……私は美人ぢやありませんからね。でも、私は賣られるかも知れませんわ。矢張りそれも又一つの恩恵を施す行爲でせうから。」

「ぢや何故あなたは……」とネヅダーノフは始めた。そして躊躇した。

マリアンナは彼をちらりと見た。何故マルケーロフの申込を承諾しなかつたと仰しやるんでせう？ 左様ぢやありませんの？ え、でも如何してそんな事が出来ませう。そりやあの方は善い人です、けれども私が悪いんぢやありませんわ。私あの方を愛してゐないんですもの。」

マリアンナは連れの者がこの思ひがけない告白に何とか答へなければならぬ義務があるのを逃れさせやうとするかのやうに、再び前に立つて歩いて行つた。

二人は並木路の端れに達した。マリアンナは密接して植へられた樅の樹立の間を走つてゐる小徑の方へ素早く曲つて、そこを辿つて行つた。ネヅダーノフはマリアンナの後に隨いて行つた。彼は二重の當惑を感じた。この含羞やの娘が彼に對して突然こんな風に心を打ち開けたと云ふ事は驚くべきことであつた。そして彼がその打ち開けた態度を奇怪とも思はずに、それを自然な事のやうに感じたこと云ふ事は尙一層驚くべきことであつた。

マリアンナは不意に振り返つて、彼女とネヅダーノフの顔とが一ヤードばかりに近づいた時小徑の真中にちつと立停つた。彼女の眼は眞直ぐに彼を見詰めてゐた。

「アレキセイ・ドミトリーイチ。」と彼女は云つた。「私の叔母を性質の良くない女だと思はないで下さい……いゝえ！ あの人は嘘つきなんです。女優なんです。あの人は氣取つてゐるんです。みんなに

美人として崇められたり、聖者のやうに尊敬されたいのです！ あの人は思ひ遣りの深い文句を創造して、それを或る一人の人に云ひ、それから第二、第三の人に繰返すのです、まるで其時不意にその文句を思ひついたやうな容子を装つて、それと一緒にあの美しい眼付を働らかして！ あの人は自分と云ふものをよく知つてゐるんですわ。あの人がドレスデンのマドンナによく似てゐるのを知つてゐるんです、そして他人の事なんぞ何にも考へてはしないんです！ あの人は始終コーリヤの事を心配してゐるやうな風を装つてゐますけれど、あの人の本統にしてゐる事は、たゞ智識階級の人達とコーリヤの事について話をするだけなんです。あの人は誰れに對しても人の感情を害ふまいとしてゐます……あの人は全くの博愛家ですわ！ けれど、あの人の眼の前で他の人があなたの身體の骨を残らず折つて了つたつて……そんな事はあの人には何ともないんですわ！ あの人はあなたを救ふために指一本動かさしません。だのに若しそれが自分にとつて必要があつたり役に立つたりする事なら……その時には……おゝ、その時には！」

マリアンナは言葉を切つた。激怒のために胸が塞つたのであつた。彼女はそれを漏らしてしまふかと思つた……自分を抑へつけることが出来なかつた。が、思はず言葉が途切れたのであつた。マリアンナは不幸な人間の中でも一種特殊な階級に屬してゐた。(露西亞にはかう云ふ種類の人が可なり澤

山ある)……正義に對して彼等は満足はするが、幸福は感じない。然るに不正に對しては、それを看破することが恐ろしく敏感で、骨の隨まで反抗心を起すのである。彼女が饒舌つてゐた間ネツダーノフは熱心に彼女を見詰めてゐた。短く切つた頭髮が少しほつれ、薄い唇がぶる／＼戰いてゐる彼女の赤くなつた顔が、力強く、意味深く、美しく彼の目に映つた。重なり合つた小枝の網目を透して片々になつた日光が、金色のいびつな斑點となつて彼女の額に落ちてゐた。そしてこの焰の舌が彼女の顔全體の興奮した表情と、屹と見張つてゐる輝やかしい眼と、顔へを帯びた聲の調子をよく調和してゐるやうに思はれた。

「聞かして下さい。」とネツダーノフは到頭彼女に訊いた。「どうしてあなたは私を不幸だと仰しやるんです？ あなたは私の過去を知つてらつしやるんですか？」

マリアンナは頸づいた。

「えゝ。」

「併し……どうしてあなたは知つたんです？ 誰れか私をあなたに話したんですか？」

「私……あなたの血筋の事を知つてますわ。」

「あなたが知つてらしやる……誰れにあなたは聞いたんです？」

としてゐた。が、彼は今はもう「問題」などには少しも興味を感じてゐなかつた。

「マリアンナ・ウィッケンツェウナ。」と彼は始めた。「僕は卒直に云ひますが、今僕等の間に起つたやうな事を……僕は全く豫想もしませんでしたよ。(起つたと云ふ言葉に彼女は一寸身じろぎした。僕は二人が急に非常に……非常に親密な間柄になつたやうに思ひます。かうならなければならぬ筈だつたんです。僕等は言葉には出さなかつたが、長い間にお互にだん／＼接近してゐたんですね。それでやりばり僕は露骨に云ひますが、あなたは此家では悔めな苦しい位地に立つてゐるんですね。けれどもあなたの叔父さんは、度量の狭い人ではあるが、それでも僕の考へる所では、人間味のある人です、左様ぢやないですか？ あの人はあなたの位地を理解して、あなたの味方をしてるぢやありませんか？」

「私の叔父がですか？ 先づ最初にあの人は人間ぢやありません……上院議員だか大臣だか……私は知りませんが……たゞ官吏ですわ。第二に私は役に立たない不平を翻したり人の悪口を云つたりしなくありませんわ。私は此家では少しも悔めぢやありません。詰りどんな事にも私は壓制を受けてゐないと云ふことなんです。私の叔母の小さな針の尖なんぞ私には何でもありません……私は絶対に自由ですわ。」

ネツダーノフは狼狽しながらマリアンナをちつと眺めてゐた。

「では……今あなたが僕に云つたことはみんな……。」

「何卒私をお好きなやうに笑つて下さい。」と彼女は口早に云つた「けれど若し私が不幸だとしても……それは私自身の不仕合せのためぢやないんです。如何かすると私は露西亞の凡ての壓迫されてゐる人達や、貧しい悔めな人達のために苦んでゐるやうな氣がしてならないんです……いゝえ、私は苦んでゐるんぢやありません、憤つてゐるのです……私はその人達のために反抗してゐるのです……そのためには私の生命を犠牲にしてもいゝと覺悟してゐる位ですわ。私は自分が若い女ですから不幸なんです、何にもすることも出来なければ、何をする能力もないために、他人の厄介になつてゐるからですわ！ 私の父がシベリアに行つてゐた時分、私は母と一緒にモスクワに住んでゐましたけれど……あゝ！ どんなに父の處へ行きたいと思つたでせう！ と云つて私は父を非常に愛してゐたとか尊敬してゐたとかいふためぢやなく、流刑囚や、徒刑囚がどんな風に暮らしてゐるかを自分の目で見たくつて、自分で知りたくなつて堪らなかつたんです……そして私は自分自身やあの放埒な裕福な贅澤な人達に對してどんなに忌々しさを感じたでせう……其後父が身體も心もすり踏み崩されたやうになつて歸つて來た時には、それから世間は出るために自分を卑下して苛立つたり、苦んだり始めた時には……あゝ、どんなに悲しかつたでせう！ 父は到頭死んでしまいました。が、その方が宜かつたんで

すわ……それから母も！そして私は唯一人後に残されたんです……何のためにせう？私は自分が良くない性質を持つてることや、愚知らずだといふことや、私の周囲には何にも正しいことがないといふことや、私には何一つ出来ないといふことや……何事にも誰れにも不必要な人間だといふことやを感じるだけで、外には何の役にも立たないんです！」

マリアンナは顔をそむけてゐた。彼女の手は腰掛の上にだらりと垂れてゐた。ネヅダーノフは彼女を哀れに思つた。彼はその手に觸つた……が、マリアンナは忽ち手を引込めた。それはネヅダーノフの行爲が無駄に思はれたからではなく、彼の同情を求めてゐるやうに思はれたくないためであつた！椈の樹の小枝の間から女の眼がちらりと見えた。

マリアンナは眞直ぐに身體を起した。「御覽なさい、あなたのマドンナが見張りの者を出してゐますわ。あの下婢は私を見張り番して、私が何處に誰れと一緒にゐるかつてことを夫人に知らせるんですよ。叔母は多分私があなたと一緒にゐることを察して、不仕合だと思つてゐるんでせう、殊にあなたとセンチメンタルな場面を演じた後ですもの。それに本當にもう歸らなければならぬ時間ですわ。参りませう。」

マリアンナは起ち上つた、ネヅダーノフも自分の席を立つた。彼女は自分の肩越しにちらりと彼を眺めやつた、その時不意にまるで子供に見るやうな、可憐な、何となく氣耻かしさうな表情がさつと面を掠めた。

「あなたは私をお怒りになりはしないでせうね？私もやつぱり氣取つてゐるんだなんてお思ひになりはしないでせう？いゝえ、あなたはそんな風にお考へになりはしませんわ。」と彼女はネヅダーノフが何とか答へやうとしてゐる間に續けた。「ねえ、あなたは私と同じやうに不幸なんですわ、そしてあなたの性質もやつぱり……私と同じやうに良くないんですのね。さあ、もう私達はお友達になつたんですから、明日は御一緒に學校へ参りませうね。」

マリアンナとネヅダーノフとが家に近づいた時、ワレンチナ・ミハロウナは露臺から遠眼鏡で、二人を眺めて何時ものやうに愛想のいゝ微笑みを浮かべながら靜かに頭を振つた。やがて彼女は開け放されてゐる硝子扉の入口から、シプヤーギンがお茶に來合せた齒の抜けた知人ともう「株式」(骨牌の遊戯)をやつてゐる客間へ入りながら、引き伸ばしたやうな調子で、一語々々はつきりと聲高に云つた。

「晩方の空氣は何んて温つぽいんでせう！不健康ですわね！」

マリアンナはネヅダーノフをちらりと見た。一方のシプヤーギンは丁度對手から一點取つた所で、

横目と上目とで、ほんのお役目のやうな視線を妻に向つてちらりと投げた、そして側てその同じ冷淡な茫然したやうな、が、射透すやうな視線を、暗い庭園から入つて來た若い二人に向けた。

十四

二週間経つた。凡てのことが平常の通りに行はれて行つた。シプヤーギンは大臣のやうに。或は少くとも局長のやうに其日／＼の務めを果たした。そして例の高尙な優雅な、何となく又偏屈な態度を保つてゐた。コーリヤは學課を強勉してゐた。アンナ・ザハロウナは怒りを抑へて、絶えずむしやくしやしてゐた。訪問客が來て、話をしたり骨牌をやつたりして、飽きる容子もなかつた。ワレンチーナ・ミハロウナは何となく可笑な皮肉のやうな調子を例の愛嬌の中に織り交ぜてはゐたが、ネツダーノフに對して自分の氣晴らしを續けてゐた。マリアンナとネツダーノフとは紛れもなく親密になつて行つた。そしてだん／＼分つて見ると彼女は平靜な氣質を持つてゐて、何事についても烈しい衝突に出會はずに話することが出来るのに驚かされた。彼女と連れ立つて彼は二度學校を見に行つた。勿論最初の時既にそこには何にも自分にとつて用のないことが分つて了つたのではあるが。その學校は助祭がシプヤーギンの承認との下に全然自分まで支配してゐたこの尊敬すべき長老は、舊臭い方法に依つ

てゝはあるが、上手に読み書きを教へてゐた。が、試験の時だけは思ひ切り奇抜な問題を出すのであつた。例へば、或る時彼がガラセイに向つて『大空の水といふ聖書の句はどういふ風に解釋すべきものか』と云ふ問題を出した。これに對してガラセイは、この長老に教へられた通り『それは解釋すべきことではない』と答へた。

その上學校はもう直ぐに……夏の仕事のために……秋まで休みになるのであつた。パークリンや他の友人の勸告を思ひ出して、ネツダーノフは百姓達とも親しくならうと努めた。が、彼は直ぐに自分の觀察力の及ぶ限り彼等を研究することは出来るけれども、彼等の間に宣傳の仕事をするには全然駄目だといふことを知つた。彼は今までの生涯を殆んど街で送つて來たので、彼と百姓達との間には如何しても越えることの出来ない溝があつた。ネツダーノフは泥酔漢のキリールやメンデレイドウチクと言葉を交はすことにも成功した。が、奇妙な事には彼等の前へ出るとネツダーノフは臆病になるのであつた。そして或る一般的な醉害の外には彼等から何にも知ることは出来なかつた。フィチュイーエフといふ一人の百姓は全然彼を狼狽させたゞけであつた。この百姓はまるで山賊の首魁のやうな並々ならぬ獍猛な顔を持つてゐた。「ふむ……此奴は何か役に立つに違ひない。」とネツダーノフは思つた……が。フィチュイーエフは強壯な頗る體力の強い男でありながら……仕事といふものが少しも出来

ない男であるために……共産組合から土地を取り上げられてしまつた無頼漢であることが分つた。

「あゝ俺は駄目だ。」と彼は泣き出して、胸の奥から絞り出したやうな呻吟聲をあげたり、引き伸ばしたやうな溜息を吐いたりするのであつた。「働くことが出来ねえんだ！俺を殺して呉れ！で無きや俺や首を縊つて了う！」そしてお終ひには、彼は麴麵片を買うコベック錢を貰ひに……まるでリナルド・リナルヂニの畫から抜け出して来たやうな姿で……施與を乞ひ歩いてゐた。

工場の職人達もやつぱりネヅダーノフには何の役にも立たなかつた。これ等の連中は進れも彼れも恐ろしく元氣のいゝ人間か、さも無ければ恐ろしく陰鬱な人間であつた……ネヅダーノフは全然彼等と親しむことが出来なかつた。彼は此問題について友達のシーリンに長い手紙を書いた。その手紙では彼は自分の無能を酷く訴へて、それを彼の哀れむべき教育と嫌悪すべき藝術的氣質のためだと云つた。彼の宣傳事業に於ける天職は、口で傳へる所にあるのではなくして、生命のある言葉を書いて傳へるにあるのだといふ結論に突然到達した。が、彼の書いた小冊子は出来上らなかつた。彼が紙の上に述べやうとした凡てのことは、その調子にも言葉にもやつぱり何となく虚偽な、遊離的な、虚飾的な、印象を見せてゐた。斯うして今度も又……おゝ、恐るべきことだ！彼の何時の間にか詩の境地に、或は懷疑的な個性の表現の中に迷ひ込んでゐたのであつた。彼は遂に強い決心をもつて、……

異常な信頼と親密との表章として……このことをマリアンナに話した。……そして又もや驚かれたことは、マリアンナがそれを聞いた時、勿論彼の文學的傾向に對してははななく、彼が苦んでゐた精神的病症に對して同感したことであつた。そして彼女もその苦しみを知つてゐたことであつた。マリアンナは彼と同じやうに凡ゆる藝術的なものに對して全然反抗してゐた。それにも拘らず彼女がマルケーロフを愛さなかつた實際の理由は、彼と結婚しなかつた實際の理由は、マルケーロフも藝術的氣質がなかつたからであつた。勿論マリアンナは自分自身にさへ、このことを承認する勇氣はなかつた。が、吾々自身にとつて、半ば疑惑として胸中に留つてゐる秘密といふものが最も力強いものであるは明らかなことである。

斯うして幾日かは靜かに、取り留めもなく、退屈でもなく過ぎて行つた。

ネヅダーノフの心中には何となく奇妙なことが起つてゐた。彼は自分の活動に對して、否寧ろ不活動に對して自分に不満を感じた。彼の言葉には殆んど何時も苦しげな囁みつかれてゐるやうな自己非難の調子があつた。が、彼の心中には……何處かその深い奥底に一種幸福な気分と、一種平靜な感じとがあつた。それは田舎の靜寂や、新鮮な空氣や、夏や、美味しい食物の影響であるのか、又は彼が生れて初めて女の心に接觸して、今その楽しさを味つてゐる事實から来たものであるのか……それは解

き難いことであつた。が、事實彼の気分は、友人のシーリンに向つて……生真面目に……不平を訴へたに拘らず、晴れやかになつてゐた。

所が、この精神状態は、たゞ一日の中に、突然荒々しく破られてしまつた。

その日の朝、彼はワシリイ・ニコラエツキツチから、一通の手紙を受取つたのであつた。それには直ちに以前話したことのある、ソローミン及びS——に住んでゐる舊信徒のゴリユーシキン某といふ商人と友達になつて、了解を得て置いて、次の通知を待つてゐるやうにといふ命令がマルケーロフと彼と三人宛に認められてあつた。この手紙はネツダーノフを昏惑に陥し入れた。彼は行と行との間に彼の無能に對する非難の意味を讀んだ。絶えず言葉の上はのみ烈しく現はれてゐた苦しさ、今は心の底から湧き返つて來た。

食事の時にカロミエーツエフが非常に憤然として苛立つた様子でやつて來た。

「まあ考へて見給へ。」と彼は殆んど泣き出さないばかりの聲で叫んだ。「實に恐ろしいことを僕は今新聞で讀んだのだ。僕の親友のセルビア公府のミハイルがベルグラードで何者か悪黨のために暗殺されただん！ きつとあのジャコビン黨や革命論者の仕業だ、奴等を嚴重に取締らなければならん！」

シプヤーギンは「まあ僕の意見を聞き給へ。」といつて、この反逆的な暗殺は恐らくジャコビン黨の

仕事ではあるまいと云つた。「そんな連中がセルビアに居るとは考へられないから、多分オブレノヴキツチの敵であるカラジエルオルギイの仲間だらう。」

が、カロミエーツエフは一言も聴き入れずに、前と同じやうに泣き出しさうな調子で、あの殺された公爵は、どんなに自分を愛してゐたか、どんなに立派な鐵砲を自分に呉れたか、とそんなことを話し出した……だん／＼横路へ逸れて益々激昂しながら、カロミエーツエフは外國のジャコビン黨のことから國內の虛無主義者のことや社會主義者のことに云ひ及んで、お終ひには全くの罵倒論になつて行つた。両手で大きな白い麵麩を擲んで、スープの皿の上で半分に引裂きながら *Café Riche* の巴里ツ子そつくりといふ見得で、「何者に對しても何事に對しても」反抗者として立つ人間は残らず粉微塵に挽き潰してやりたいといふ渴望を述べ立てた。かういふのは彼の表現の特徴であつた。「丁度いゝ機會だ。」と彼は匙を口のところへ揚げながら決めつけた。「絶好の機會だ！」とシェーリ酒を注いで貰ふために給仕に向つて杯を差し出した時に繰返へした。彼はモスクワの有名な新聞記者まで引き合ひに出した……そしてラヂスラス、我が親愛なるラヂスラス……といふ言葉を幾度となく口にしたり。かういふ間に彼の眼は背後まで射透すやうにネツダーノフを吃と見詰めてゐた。「どうだ、これは貴様に向つて云つてゐるんだぞ！」と彼は云つてゐるやうに見えた。「一打ち喰らはしてやるんだ！ 貴様に向つて

そして今にもつと遣つてやる！」到頭ネツダーノフは堪へ切れなくなつて、反駁しはじめた。彼の聲は明らかに少し噎れて顔へを帯びてゐた……勿論恐怖のためではなかつた。彼は新時代の希望や主張や理想を擁護しはじめた。カロミエーツエフは直ぐに高い聲をあげてそれに應じた……彼は何時も激怒を示す時には作り聲を出すのであつた……そして罵詈雑言を吐きちらした。

シプヤーギンは重々しい調子でネツダーノフの味方をした。ワレンチーナ・ミハロウナも夫の意見に賛成した。アンナ・ザハロウナはコリーヤの注意を他へ轉じさせやうと努めながら、帽子の下から腹立たしさうにあたりを見廻はしてゐた。マリアンナは化石したやうにちつと坐つてゐた。

が、もう二十度もラヂスラスの名前を聞かされた時、突然ネツダーノフは赫となつて、卓の上を握拳で叩きながら叫んだ。「堂々たる大家ですつて！ラヂスラスがどんな奴か、我々が知らないかと思つて！彼は生れ落ちた時から雇ひ上げられた傀儡です、たゞ其れだけです！」

「え……何、何だつて。」とカロミエーツエフは激怒のために吃りながら金切聲をあげた……「ブラゼンクラム伯爵やコフリーツギン公爵のやうな地位の高い人から尊敬を受けてゐる人に對して、そんなことを云ふとは何たることだ！」

ネツダーノフは肩をしゃくり上げた。「實に素敵な諷刺ですね。コフリーツギン公爵、あの氣狂ひ染

みた阿諛者の……」

「ラヂスラスは私の友人だ。」とカロミエーツエフは叫んだ。「彼は私の同僚だ……そして私は……」

「ですから尙更あなたに取つて悪いんです。」とネツダーノフは遮つた。「詰りあなたが彼と意見を共にしてゐることになるんです、従つて僕の批評はあなたにも當て箴めることが出来るんです。」

カロミエーツエフは激怒のあまり蒼蒼になつた。

「な……何だと！君は……わ……笑つてるな！今に直ぐ……君を……」

「直ぐ私を如何しやうと仰しやるんです？」とネツダーノフは皮肉な丁寧さで再び遮つた。

シプヤーギンが初めの間に仲裁しなかつたら、此二人の敵の口論はどうなつて行つたか分らなかつた。シプヤーギンは聲を高めて、どつちにも優越を認めることも出来ないやうな……政治家の嚴かな權威と家長の尊敬とをもつた……態度を取りながら、自分はこの席上でかういふ狂暴な議論を聞いてゐるに耐えないと云ふことや、自分はいかなる人の信念をも尊重するのを法則としてゐる。(それは彼が自分自身を陶冶した神聖な法則であつた)といふことや、唯お互に了解すればそれで好い。(此處で彼は紋章を彫りつけた指輪を箴めてゐる人差指をあげた)お互に禮儀と教養との範圍内に自分を守つてゐなければならぬといふことや、一方ネツダーノフ君の言葉は、彼の年頃にはあり勝ちなことである

にしても、亂暴な點のあるのを非難しなければならぬと云ふ事や、同時にカロミエーツエフ君の敵の人物に對する攻撃は公衆の安寧を思ふ熱誠のためではあるとは云へ、その苛酷な點には讃成出来ないと云ふ事やを穩やかに述べた。

「この屋根の下には。」と彼は言葉を結んだ。「シプヤーギン家の下にはジャコビン黨もなければ傀儡もゐない。一度お互に了解すれば握手して了ふ好意のある人がゐるだけです。」

ネツダーノフとカロミエーツエフとは口を噤んでゐた。が、握手はしなかつた。云ふ迄もなくお互に了解する時はまだ來てゐないのであつた。それ所か、彼等は今迄これほど烈しい憎惡をお互に感じたことはなかつたのであつた。

食事は不快な氣拙い沈黙の中に終つた。シプヤーギンは外交上の滑稽談を話さうと努めてゐたが中途でがっかりして止めてしまつた。マリアンナは執拗に自分の皿の上を見詰めたまゝでゐた。彼女はネツダーノフの議論に呼び起された彼女の同情を顔色に出したくなかつたのである……それは臆病のためではなく、シプヤーギン夫人に自分を見透されるやうなことがあつてはならないと思つたからであつた。彼女は夫人の射透すやうな執拗な眼が自分に注がれてゐるのを知つてゐた。實際シプヤーギン夫人は彼女とネツダーノフとを絶へずちろ／＼眺めてゐた。彼の豫想外な激昂は最初敏感な夫人を

吃驚させた。する中に突然また彼女は覺えず獨言を云つた程そこに一つの手掛とも云ふべきものを認めた。おゝ……彼女はネツダーノフが……遂に此頃まであれ程自分の手に惹きつけられてゐたネツダーノフが……急に自分から遠く離れてしまつたことを覺つたのである。では何事かあつたに違ひない……マリアンナ何か話したのか知らさう勿論マリアンナとだわ……あの人が彼女を惹きつけたんだわ左様だわ、そしてあの人は……

「思ひ知らしてやらなければならぬ。」とシプヤーギン夫人は自分の想像をお終にしながら考へた。

一方のカロミエーツエフは腹立しさのために胸を塞らせてゐた。それから二時間の後骨牌をやり出した時でさへ、彼は「油過」とか「買ひ取り」とか云ふのに胸でも痛んでゐるやうな聲を出してゐた。彼は「そんな事は超越してゐる」と云はんばかりな容子を裝つてはゐたが、噎れて顔へを帯びた聲の調子に感情を害はれた様があり／＼と浮んでゐた。たゞシプヤーギンだけは實はこの光景を中心に面白がつてゐた。彼は捲き起る嵐を鎮めるために自分の雄辯の力を示す機會を得たからであつた……彼は拉典語を知つてゐた、ヴァチルの *opus oris* と云ふ言葉は彼の慣用語になつてゐた。彼は自分を海の嵐を鎮めたネプチューンの神と眞面目に比較するやうなことはなかつたが、今不圖一種愉快な氣持でこの神の事を思ひ出したのであつた。

その夜が来るや否やネヅダーノフは自分の部屋へ退いて堅く扉をしめ切つてしまつた。彼はマリアンナ以外には誰れにも會ひたくなかつた。彼女の部屋は家の一ばん上層を真二つに切斷してゐる長い廊下の端れにあつた。ネヅダーノフはたつた一度、而もほんの一寸の間彼女の部屋へ行つたことがあるだけであつた。が、今若し彼が彼女の部屋を訪れても彼女は怒りはしないだらう、否彼と話をしたく思つてゐる位に違ひないと云ふ考へがふと彼を打つた。時間はもう可なり遅かつた、十時位であつた。シプヤーギンはあの場面の後なので、ネヅダーノフには構はずそつとさせて置いて、カロミエーツエフを相手にまだ骨牌をやつてゐた。ワレンチーナ・ミハロウナは、マリアンナがどうしてゐるかを二度も探索した。マリアンナも食事が済むと直ぐに何處かへ行つてしまつたからであつた。

「マリアンナ・ウイッケンツエウナは何處へ行つてゐるの？」と彼女は最初は露西亞語で、次には佛蘭西語で、特に誰れに云ふともなく、丁度人が何か吃驚した時、よくやるやうにあたりの壁に向つて訊いた。が、やがて彼女も骨牌に夢中になつてしまつた。

ネヅダーノフは部屋の中を二三度歩き廻つた。やがて彼は廊下傳ひにマリアンナの部屋の前へ行つ

て、そつと扉を叩いた。何にも答へがなかつた。彼はもう一度叩いて、扉を動かして見た……錠が下してあるらしかつた。が、彼が自分の部屋へ引返して、卓の前へ坐つたかと思ふと間もなく、微かに部屋の扉が軋んで、マリアンナの聲が聞えた。

「アレキセイ・ドミトリイッチ、今私の處へいらしたのは貴方ですか？」

彼は急に跳び上つて、廊下へ駆け出した。扉口のマリアンナが片手に蠟燭をもつて、蒼ざめた顔色をして、ちつと立つてゐた。

「えゝ……僕です……」と彼は囁いた。

「こちらへ來らつしやい。」と彼女は云つて、廊下傳ひに歩き出した。が、端れまで行かない中に彼女は立停つて、一つの狭い扉を押した。殆んど空洞のやうな小さな部屋がネヅダーノフの目に入つた。

「此處へ入つた方が好うございますわ、アレキセイ・ドミトリイッチ、此處なら誰れも來やしませんわ。」ネヅダーノフは従つた。マリアンナは窓框の所へ蠟燭を立て、ネヅダーノフを振り返へつた。

「何故あなたが私に會ひにいらしたか分つてますわ。」と彼女は始めた。「此家に住んでゐらつしやるのは貴方にとつては悲しいことですか、そして私だつて同じことですか？」

「えゝ、ですから僕はあなたに會ひたくなつたんです。」とネヅダーノフは答へた。「けれども僕はあな

たと親しくなつてから此處にゐるのを悲しくは思ひません。」

マリアンナは考へ深い微笑みを浮べた。

「有難う、アレキセイ・ドミトリイッチ。でもあなたはあんな厭な事件があつたのですから、此先も
う此家に居らしやるおつもりは無いんでせう？」

「多分あの人達が私を置いとかないでせう。私に暇を出すでせう！」

「あなたは御自分の方から暇をお取りになりませんか？」

「自分の方から？……いゝえ。」

「何故ですか？」

愛意切々々々。

「あなたはその譯が知りたいんですか？ それはあなたが此家にゐらつしやるからです。」

マリアンナは下を向いて、尙少し部屋の奥の方へ行つた。

「そればかりではなく。」とネツダーノフは續けた。「僕は此家にゐなければならぬ責任を負つてゐる
のです。あなたは何にも知つてはゐらつしやらない——だから僕は何もかもあなたにお話したいと思
ひます、お話しなければならぬやうな氣がします。」

彼はマリアンナの傍へ行つて、彼女の手を取つた。彼女はそれを振り離さうとはしないで、唯ちつ

と彼の顔を見詰めた。

「聞いて下さい——」と彼は發作的な強い衝動をもつて叫んだ。「聞いて下さい——」そして部屋の中に椅
子が二三脚置かれてあつたにも拘らず、腰を下さうとしないでマリアンナと向ひ合つて、立つてや
つぱり彼女の手を握つた儘、衝動的な興奮と自分にも思ひがけないやうな雄辯をもつて、ネツダーノ
フは彼の計畫や彼の目的やシプヤーギンの申込みに應じた理由や、それから又彼の血筋や友人や彼の
過去や、平素彼が隠して誰れにも打明けずにおた事を何もかも残らず彼女に物語つた！ 彼は自分
が受取つた通知の事や、ワシリイ・ニコラエヴキツチの事や、シーリンの事まで残らず彼女に物語つ
た！ 彼は凡ての秘密を何故もつと前にマリアンナに打ち明けなかつたかと自分を責めて、彼女の許
しを求めてゐるやうに、少しも包み隠さずに、少しも躊躇せず急いで話した。彼女は熱心に食
るやうに彼に聴き入つてゐた、最初の間彼女は當惑してゐた……が、この感情は直ぐに消へ去つた。
今彼女の心は感謝や誇りや尊敬や決心の情に溢れてゐた。彼女はネツダーノフの手の上に自分のもう
一方の手を置いてゐた。彼女の唇はうつとりと開いてゐた……彼女は忽ち驚くほど美しくなつて行つ
た！

彼は到頭語り終つて、彼女を眺めた。そして今初めて彼女の顔を見たかのやうに、同時にその顔が

この上もなく懐しい親しいものに彼に思はれた。

彼は深い、長い溜息を吐いた……

「あゝ！ 僕は何かもあなたに話して好いことをしました！」と私の唇はやつとの事での言葉を吐いた

「えゝ、さうすわ、好いことでしたわ、好いことでしたわ！」と彼女も小聲で繰返へした。彼女は思はず彼の調子を直似した。實際また彼女の聲もうまく川なかつたのであつた。「そして私が斯う云ふのは。」と彼女は續けた。「もうあなたのお心の儘になると云ふ意味ですよ、私もあなたの計劃に何かお役に立ちたいと云ふ意味ですよ。私もこれからは私でお役に立つことなら何でもしますし、命じられた所なら何處へでも参りますわ。私は始終心から、さう云ふ事を憶れて居りましたわ。それはあなたが……。」

彼女も口を噤んだ。もう一言云へば感動のために涙が溢れだしたに違ひなかつた。彼女の強い性質が不意に蠟のやうに溶けてしまつた。活動、犠牲、直接的犠牲に對する渴望……彼女を支配したものはこれであつた。

誰かの足音が廊下に聞えた……忍びやかな、素早い、軽い足音が。

マリアンナは急に彼の手を振り離して、直ぐに身體を起した。彼女は忽ち顔色を變へて警戒した。何となく嘲笑的な、不敵な表情が彼女の顔付に現はれた。

「今、達を探してゐたのは誰だか私には分つてゐますわ。」と彼女は廊下まで一言々々はつきり聞える程聲高に云つた。「シプヤーギンが私達を探索してゐるんです」……けれど其様な事ちつとも構やしませんわ。」

足音が聞へなくなつた。

「では何を。」と彼女はネツダーノフを振り向きながら云つた。「何を私はすれば好いんですの？ 如何したらあなたのお役に立ちますの？ 云つて頂戴……今此處で云つて頂戴！ どんな事したら好いんですの？」

「どんな事を？」とネツダーノフは云つた。

「僕にはまだ分りません……僕はマルケーロフから手紙を受取つたんです。」

「何時？ 何時ですの？」

「今夜。僕は明日ソローミンに會ひに工場へ行かなければならないんです。」

「あゝ、左様……マルケーロフは立派な人ですわね。あの人は本統のお友達ですわ。」

「僕と同じやうに？」

マリアンナは眞正面にネツダーノフの顔を見詰めた。

「いゝえ……あなたの様にはなく。」

「では如何な風に？」

彼女は不意に面をそむけた。

「あゝ、あなたと云ふ方が私にとつて如何云ふ方になつたか、今私が何を感じてゐるか、あなたにはお分りになりませんか？」

ネツダーノフの胸は烈しく動悸折つた。思はず彼は下を向いてしまつた。この少女は、彼を……哀れな無宿の放浪者を……愛して、彼を信じて、彼に従つて、彼と同じ目的のために彼と一緒に進まうと決心したこの少女マリアンナは……この瞬間ネツダーノフにとつては此世界に於ける凡ゆる至善な眞實なものゝ権化であつた……彼が今まで會て知らなかつた母と姉妹と妻との凡ての愛の権化であつた……祖國と幸福と奮闘と自由との権化であつた！

彼は頭をあげて、再び彼を見詰てゐる彼女の眼を見た……。

「おゝ、その淨らかな貴い視線がどんなに彼の心に浸み透つたらう！」

「さう云ふ譯で。」と彼は茫然とした聲で始めた。「僕は明日出掛けます……そして僕は歸つて來たら、マリアンナ・ウィッケンツェウナ、(彼は不意にこの形式的な呼方をするのを何となく氣恥かしく思つた。)僕の見聞した事や決定になつた事柄やをあなたに話させよう。これからは何もかも、僕がしたり考へたりする事は何もかも一ばん先へあなたに話しますよ……マリアンナ。」

「おゝ、私のお友達！」とマリアンナは叫んで、再び彼の手を握つた。「私もあなたと同じお約束をしますわ、ねえ貴方！」

この最後の言葉は、この言葉でなければならぬと云つたやうに、長い間の親密な仲の「ねえ貴方」でもあるやうに、滑らかに單純に彼女の口を出た。

「私にその手紙を見せて下さつて？」

「此處に持つてゐます。」

マリアンナはその手紙にさつと目を通した。そして敬意を示やうな風に彼を見上げた。

「あの人はこんな重大な役目をあなたに委任するんですね、アレキセイ！」

彼はその答への代りに微笑を見せて手紙を衣兜に入れた。

「妙ですね。」とやがて彼は云つた。「僕等はお互に愛してゐる事を兩方から覺らせましたね……僕等

は愛し合つてゐたんですね……だのに私達の間にはそんな言葉が一言も出なかつた！」

「そんな必要はなかつたんですもの。」とマリアンナは囁いた。そして不意に彼の首へ飛びついて、彼の肩を抱きしめた……が、彼等は接吻さへしなかつた……二人はそれを平凡にも思ひ、何となく恐ろしくも思つたのであつた……そして再びしつかりと手を握り合つた後で直ぐに離れた。

マリアンナは空虚な部屋の窓框に立て、置いた蠟燭を取りに行つた。そしてその時初めて彼女は昏惑に近いやうな感情を覺えた。彼女は蠟燭を吹き消して、眞暗闇な廊下を足早に滑るやうにして自分の部屋へ歸つた。そして服を脱いで、やつぱり眞暗にした儘寢床へ入つた……彼女は何と云ふ事もない楽しさを感じた。
サモアウクレアさん。

十六

次の朝目を覺した時ネヅダーノフは前の晩起つた事を思ひ出したが、少しも耻羞の情は感じなかつた。寧ろ最早反對に、最早既に爲て置かなければならなかつた或る事を今漸く爲し遂げたやうな一種和らいだ落着いた幸福の思ひに充されてゐた。シプヤーギンに二日間の休暇を乞ふと、溢々ながら彼の外出を直ぐに許して呉れたので、ネヅダーノフはマルケーロフの家に向つた。出掛けに彼は都合

よくマリアンナに出會ふことが出来た。彼女も少しも含羞んだり極り悪がつたりはしなかつた。落ちついて大膽な容子で彼を眺めて、彼を呼ぶのに平氣でクリスチャン・ネエムを使った。彼女は彼がマルケーロフの處でどんな事を聞いて來るか、其れに熱中して、歸つたら何もかも話して呉れるやうにと云つた。

「勿論話しますとも。」ネヅダーノフは答へた。

「だが、斯んな風だのに。」と彼は反省した。「何故我々は妨害されなければならないのか？ 僕等の間柄では個人的感情は……第二位の役目になつてゐる……而も勿論永久に結びつけられてゐるでは。仕事を口實にしてゐるのか？ さうだ、仕事を口實にして！」

ネヅダーノフはこんな風に考へた。そして彼はこの想念の中にどれ程の眞實とどれ程の虚偽とが含まれてゐるかも推し考へては見なかつた。

彼はマルケーロフが相變らず困憊した陰鬱な氣分であるのを見て、彼等はほんの一すした食事を済した後、例の古馬車に乗つて、(彼等はまだ一度も馬具を身につけた事のない仔馬を二番目の曳馬に備つた……マルケーロフの馬はやつぱり跛行をひいてゐた。)ソローミンの住んでゐるフレイエフと云ふ商人の大きな製棉工場へと向つた。ネヅダーノフは好奇心が起つて來た。彼は今まで様々な噂

を聞かされてゐたその男と親しい知己になりたいものだと思ふ渴望を感じた。ソローミンは彼等の訪問を待ち受けてゐた。やがてこの二人の客が工場の門前で馬車を止めて、名刺を通じた時、彼等は直ぐに機械監督の住居になつてゐる見すばらしい小さな寄宿舎へと案内された。ソローミン自身はその建物の一ばん大きい翼室に住んでゐた。一人の職工が彼を呼びに行つてゐる間に、ネツダーノフとマルケーロフは窓の處へ行つて、其處等を見廻はした。

この工場は明らかに盛んな状態にあつて、あり餘る程仕事があるらしかつた。絶えず活動してゐる忙しい騒がしい響きや、機械の軋る音や、織機のかちやり／＼と云ふ音や、車のぶん／＼廻る響や、革紐のばた／＼當る音などが四方八方から聞えてゐて、その間に手押車や、樽だの荷物だのを積んだ車が出たり入つたりしてゐた。其處から又、色々な指圖をする高い叫び聲や鐘の音や汽笛の響が聞えて來た。シャツを着て腰を帯で締めつけた職工や、革紐で頭髪を束ねた更紗服の女工やが忙しげにあつちへ往き此方へ往きしてゐる。馬が曳出されて馬具をつけられてゐる……其處に數千人の人間の勞働が頂點に達してゐる活潑な噪音があつた。凡ゆる事が規律止しい、合理的な様式で、全速力に運動してゐた。が、其處には體裁とか衛生に對する設備は何にも見られない許りか、清潔らしいところは何にも一つ見へなかつた。其れどころか何方を向いても不仕懸や、不潔や汚穢の印象を與へる處ばかり

であつた。窓の碎れてゐる處もあれば漆喰の剝げ落ちた處もあり、板張の弛んでゐる處もあれば、扉の閉らなくなつてゐる處もある。暈のやうな色をしたねば／＼の薄皮に掩はれた大きな黒い水溜が、中央の廣庭の中に出來てゐた。その向うの方には廢物の煉瓦が幾つも轉がつてゐた。席の片や帆布の屑や繩の片つばしやが泥の中にへばりついてゐた。毛のもぢや／＼な瘦せ犬が吠えもせず其處等をうろつき廻り、塀の隅つこの所には頭髮のもぢ／＼に亂れた、太鼓腹をした、頭から足まで塵芥だらけになつた四つ位の子供が、みんなに振り捨てられて了つたやうに、淋びしさうにおい／＼泣いてゐた。その傍では同じやうに泥だらけな一匹の牝豚が、斑ら／＼仔豚共に取り捨かれながら、キャベツの莖を嚙つてゐた、襤褸々々のリンネルが掛け渡した綱の上に馴つてゐた。そして何處も此處も何と云ふひどい悪臭だらう！ 實際露西亞の工場と云つたら！ 英國にも佛蘭西にもこんな工場はありはしない！

ネツダーノフはマルケーロフを振り向いた。

「ソローミンと云ふ男は偉い技術を持つてゐると僕は度々聞かされたが。」と彼は始めた。「こんな不整頓な有様を見ては僕は少し驚いた。斯んな有様とは思はなかつた。」

「不整頓なんぢやないさ。」とマルケーロフは苦々しげに云つた。「これが露西亞人の放埒なところなん

だ。それで居ながら何百萬と云ふ金を働らかしてゐる！ その上彼は舊い習慣をも採用しなければならず、實際的な必要にも應じなければならず、又所有者の遣り口にも適應させなければならぬのだ。君はフアレイエフをどんな人物だと考へてゐるのだ？」

「何にも考へて居ない。」

「モスクワ切つての偉い吝嗇家だよ。資本家……と云ふ言葉にそつくり當籤める奴だ！」

この瞬間ソローミンが部屋へ入つて來た。ネツダーノフはこの工場に對すると同じやうに、彼に對して又もや失望せずにはゐられなかつた。一目見たばかりではソローミンはフィンランド人かスウェデン人のやうな印象を人に與へた。彼は丈が高く、瘦せて、肩幅が廣かつた。彼は長い黄色い顔と低い平つたい鼻と、小さな青味を帯びた眼と、落ち着き拂つた表情と、突出た厚い唇と、大きな白い齒と、ぼや／＼の生毛に掩はれた角張つた顔とをもつてゐた。彼は機械工か火夫のやうな服装をしてゐた。袋のやうな衣兜のついた古い厚織のジャケットを着、油布製の皺くちやになつた帽子を被り、毛織の頸巻を首に捲きつけて、タール塗りの長靴を穿いてゐた。彼はごわ／＼した百姓の上衣を着た年頃四十格好な、ジブシイのやうな顔付した、黒い眼の鋭い、動作の敏捷な男を連れて來た。この男はざらりとしたその眼で急いでネツダーノフの様子を見て取ると、直ぐに部屋へ入つて來た……マルケ

ーロフは既にこの男を知つてゐた。彼はパーウエルと云ふ名前であつた。彼はソローミンの右腕だと云はれてゐる男であつた。

ソローミンは靜かに二人の客に近づいて、一言物も云はずに彼の硬い骨張つた手で、一人々々客の手を握つて、それから卓の抽出から封のしてある小包を取出して、やつぱり無言の儘それをパーウエルに渡した。パーウエルは直ぐに部屋を出て行つた。やがて彼は伸びをして、咳拂ひをして、手を一振りすると帽子を脱ぎすて、ペンキ塗りの木の腰掛に腰を下した。そしてマルケーロフとネツダーノフと同じ長椅子を指しながら云つた。

「どうぞお掛け下さい。」

マルケーロフは先づ、ネツダーノフをソローミンに紹介した。彼は再びネツダーノフに手を差出した。やがてマルケーロフは『同志の計劃』について話し出して、ワシリイ・ニコラエヴキツチから手紙の來たことを云つた。ネツダーノフはソローミンにその手紙を渡した。彼が一行々々に眼を動かしながら詳しく熱心に讀んでゐる間、ネツダーノフはぢつと彼を見守つてゐた。ソローミンは窓際に坐つてゐた。もう傾きかゝつた太陽は、彼の日に焼けた、少し汗ばんだ顔と塵埃まみれになつてゐる薄い頭髪の上に照りつけて、毛筋の間に金色の光を見せてゐた。手紙を讀んでゐる間息が出たり入つた

りするたんびに再び鼻の穴が顔へてゐて、その唇が文句を一語々々發音する時のやうに動いてゐた。

彼はその手紙を堅く挿んで、両手で少し高く揚げてゐた。斯う云ふ容子が何故かネツダーノフを喜ばした。ソローミンは手紙をネツダーノフに返へして、彼に微笑みかけた。そして再びマルケーロフの言葉に聴き入り始めた。マルケーロフは長い間齧舌りつゞけてゐた。が、到頭話を切つた。

「御存じのやうに。」とソローミンは始めた。幾らか噎れてはゐるが、若々しい力強いその調子もネツダーノフを喜ばした。「僕のこの住居ではどうも工合が悪い。あなたの家へ行きます。あなたの處迄なら七露里とは無いんですから。あなた方は馬車で來られたんでせう？」

「さうです。」

「では……僕も乗せてつて頂きます。これから一時間の中に、僕の仕事は終わりますから、それから自由です。三人で話させよう。あなたも御差支はないんですか？」と彼はネツダーノフに向つて云つた。

「明後日まで自由です。」

「そりや結構ですね。では今夜マルケーロフ君の處に泊りませう。宜いだらうね、セルダイ・ミハールリツチ？」

「訊くまでもないよ！ 勿論宜いとも。」

「では僕は直ぐに支度しやう。たゞ一寸着換へをする間待つて呉れ給へ。」

「所で工場は今どんな風だね？」とマルケーロフは意味ありげに訊いた。

ソローミンは顔を背向けた。

「一緒に大いに話さう。」と彼はもう一度云つた。「ちよつと待つて呉れ給へ……直ぐ歸つて來る……忘れてゐた事があるんだ。」

彼は出て行つた。ネツダーノフが彼から受けた印象が悪かつたなら、ネツダーノフは「あの男は人を瞞着してゐるのではないか？」と思つたに違ひなかつた。そして其れをマルケーロフにも云つたに違ひなかつた。が、彼の頭にはそんな風な疑惑は全然浮かばなかつた。

一時間の後、宏大な建物のどの廊下からも、どの階段からも、どの扉口からも職工の群がどやどやと吐き出される時分に、マルケーロフとネツダーノフとソローミンとは馬車に乗つて、門から往來へと出た。

「ワシリイ・フョードチツチ。あれは遣るんですか？」と門までソローミンを送つて出たパーウエルが背後から叫んだ。

「否、少し待て……」とソローミンは答へた。「夜業の事を云つてゐるんだ。」と彼は二人に説明した。彼等はボルヂョンコウオに着いた。そして稍形式的に晚餐を済ました。やがて煙草に火がつけられて談話が始まつた。他の國民の間ではこれと同じやうな態度や調子の談話は決して見られない際限のない、夜の更けるのも知らない露西亞特有の談話の一つであつた。が、此處でもまたソローミンはネヅダーノフの期待を満足させなかつた。彼は著しく無口であつた……殆んど絶へず黙り込んでゐたと云つてもいい程であつたが。彼は熱心に傾聴して折々批評をしたり解釋を加へたりしたが、それは敏感な重味のある簡決なものであつた。露西亞には或る革命が近づきつゝあると事をソローミンは信じてゐないと云ふことが分つた。が、彼は自分の意見を他人に向つて強ひて主張しやうとはせず、彼等の計畫を敢て留めやうともしないで、遠く離れてゐるでもなく、彼等と相接して仲間として彼等を眺めてゐた。彼はベテルブルグの革命家達と非常に親密にしてゐた。そして或る點まで彼等に同情をもつてゐた。それは彼自身も民衆の一人だからである。が、彼はその民衆の運動に對しては本能的に無關心な態度を取つてゐた。「勿論、この人達が無ければ、人々は何をする事も出来ない、が、革命を起す人々はまだ長い準備を要するのだ、そしてその準備はその態度にあるのでもなく、その人々の手段に依るのでもない^を。かう云ふ風に考へては彼は假装的にでもなく瞞着的にでもなく、唯徒らに自分自

身を滅ぼしたり他人を傷けたりしまいとする分別者らしい気持ちで彼等の、傍に立つてゐるのであつた。が、その説を傾聴すると云ふことは……何にも差支はない、寧ろ出来るならば學んで置かなければならないのであつた。ソローミンは一助祭の息子であるに過ぎない。彼は五人の姉妹があつてみんな村の僧侶や助祭の妻になつてゐたが、彼は嚴格な謹直な父の許しを得て、神學校を見棄て、數學を勉強した。そして特に機械學に熱中した。彼は或る英國人の商會に入つた。その英人はまるで父のやうに彼を愛して、マンチエスターに行く手藝を與へてくれたので、彼はそこに二年間を送つて英語を勉強した。彼がモスクワの商人の工場に入つたのは近頃の事であつた。彼は英國で學んで來た物の處置振りに従つて部下の者に對しては非常に几帳面に振舞つてゐたが、それでも彼は部下の者から愛されてゐた。「あの人は俺達の仲間だ」とみんなはさう云つてゐた。彼の父親は彼の事を非常に喜んでゐたが、唯一つ不満に思つてゐるのは、彼が結婚しやうとしないことであつた。

マルケーロフの家での眞夜中の談話の間、ソローミンは、前にも云つたやうに殆んど黙り込んでゐた。が、マルケーロフが職工に對して抱いてゐる期待について論じ始めると、ソローミンは例の簡潔な論法で、我々と一緒にゐる露西亞の職工は、外國の職工とは全然ちがつて、温順な部類に屬する人間だと論じた。